理論戦線

4

1959.12

日本社会主義学生同盟理論機関誌

理論戦線　第四号　1959・12

■ 社会主義学生同盟理論機関誌

いまや前進の時はきた！
デモ禁止法粉砕と安保改定阻止のため
決定的闘争に立て！……(2)

スト破りの共産党は粉砕された
——名古屋大学教養部の十月三十日——
高田　堯……(6)

学生ノ闘イ孤立セズ
十月三十日・金沢大学支部発……(17)

国際政治
ロケットは社会主義をもたらすか？
軍縮提案とブルジョアとの共府……(21)

右傾化への再編成
社会党の分裂・左派の無力・全労の抬頭
大瀬　振……(29)

理論学習のために
スターリン官僚暴露の書
トロツキー著「裏切られた革命」……(41)

戦後学生社会運動史ノートⅡ
（一九五六年一月～三月）
熊谷信雄……(45)

論争社　東京都千代田区神田美土代町7　振替・東京82087

論争叢書　▶現代知識人の必読書◀

對馬忠行著
ソ連「社会主義」の批判
B6判・箱入・美装　定価三八〇円
10月27日発売

日本における反スターリン主義的マルクス派の第一人者の手になる、わが国最初のソ連「社会主義」の実体の理論的・実際的分析書待望の発刊！　本書ほどスターリン主義と真正面から対決した社会主義の本があろうか。

レオン・トロツキー著　山西英一訳
裏切られた革命
B6判・箱入・美装　定価三六〇円
10月30日発売

トロツキーを知らずしてソビエトの歴史を語る資格はない。「裏切られた革命」を読まずしてトロツキーを喋々することはできない。諸外国では戦前すでにベスト・セラーとなっていたが、わが国初めての完訳・決定版！

レイモン・アロン著　毎日新聞外信部長　渡辺善一郎訳
現代の知識人
B6判・箱入・美装　予価四五〇円
12月刊

「彼は、本書の中でフランス知識人が、左翼は何時でも正しい、革命は神聖なものである、プロレタリアは聖なる使命を与えられている、といったマルクス的革命主義の神話にとりつかれている。その結果は、新しい現実に即した思考をやめ、神話を信仰して、その中で陶酔するようになったことを鋭く指摘している」
都立大学教授　関嘉彦氏評

梯明秀著　A5函入予480円
ヘーゲル哲学と資本論

独自の構想をもってマルクス哲学思想の主体的把握をめざす著者が，「資本論こそはマルクスによって実現された哲学的体系である」との立場から，精緻な論理で資本論の核心に迫る最新の労作11月刊

◇目次◇
第一章　『資本論』の学的体系性
第二章　冒頭文節の体系的意味
第三章　諸商品集成の感性的直観
第四章　歴史的現実と「経済学の方法」
第五章　現実的な学としての『資本論』

◇社会科学セミナール◇
レハーノフ著　西牟田他訳　歴史における個人の役割　一七〇円
ルフェーヴル著　柴田三千雄訳　フランス革命と農民　一〇〇円
ルッチスキー著　遠藤輝明訳　革命前夜のフランス農民　一四〇円
ルカーチ著　平井俊彦訳　階級意識論　一五〇円
ルカーチ著　相沢久訳　組織論　一六〇円
ボスタン著　佐藤伊久男訳　イギリス封建社会の展開　一六〇円

東京文京区表町七八　振替東京八七三八五　未来社

いまや前進の時はきた！
国会デモへの弾圧をはね返せ！
デモ禁止法粉砕と安保改定阻止のため決定的闘争に立て！
社会主義学生同盟を強化せよ！

全国の同盟員諸君！
先進的学生活動家諸君！

十一月二七日に、首都で斗かわれた偉大な行動は、諸君らに、絶大な激励となったにちがいない。

われわれ社学同中央は、あの偉大な国会デモンストレーションの先頭に立って斗ったことを、最大の誇りとするものである。

労働者と学生のデモ隊が、警官隊を圧倒し、「天皇と元首しか通れない」国会正面を、果敢なデモで制圧した時、支配者と、ダラ幹は目を廻し、腰をぬかした。しかし、われわれはこれぐらいのことで仰天している連中に用はない。

「国会の尊厳・神聖な国会」それがなんだというのだ。資本家が自動車で正門を通れるのに、労働者がデモで通ってどこが悪いのか？ 国会デモのすべてについて、無条件にそれを支配階級の大誹謗から守るものこそ、真の先進的学生なのだ。

すでに全印総連機関紙印刷労組、化学同盟関東青婦協、全電通本社支部、東京杉並青学共斗をはじめとして、無数の労働者大衆から、われわれ学生の行動にたいする連帯と支援の挨拶がよせられている。

明らかに、一一・二七国会デモの空前の成功は、安保斗争の巨大な前進であり、日本の労働者階級の心臓に記憶されるだろう。われわれはこの成果の上に、一層の前進をかちとらねばならない。

一一・二七以後、情勢は急テンポで進んでいる。それまでのマスコミの安保改定反対論は、急速に「空前の不詳事」にたいする非難の絶叫にかわった。

あらゆるマスコミの非難は、なによりも、デモ隊の先頭をきった

全学連にあびせられ、社会党が一層徹底的に全学連と斗うようよびかけている。

彼らの作戦は、「全学連におどらされた」社会党、総評を動揺させ、徹底的に右傾向させ、孤立した全学連を潰滅させることである。

このために、彼らは、学生と労働者を大量に逮捕し、学生運動には、その「正常化」「隠健化」のためあらゆる勢力を動員し、そして、「国会の安全」を守るため、国会周辺デモ規制法をおし通そうとしているのである。

事態はきわめて重大な段階にさしかかっている。

すでに、社会党は、徹底的に動揺した。彼らは二七日のわび証文を敵にわたすことにより、屈服によって和解の道を撰ぼうとしているのだ。共産党はいうまでもなく、一一・二七を「トロツキストの挑発」として非難する。彼らにとっては、彼らの指導をのりこえて前進した労働者、学生大衆の行動は、みなすべてトロツキストのしわざに見えるのだ。このような労働者大衆に一定の影響を持った政党の動揺は、明らかに、労働者の斗争の重大なブレーキとなっており、敵の攻撃の進展を許す結果をもたらしている。

だが、二七日の行動をなんらの疑問もなく感動をもって受け入れた、下部労働者、学生大衆には、もはやこのような裏切りによって敵階級の攻撃の前に丸はだかにされている状態を続けるわけにはゆかない。

ただちに、徹底的な反撃を組織することによって、彼らの弾圧をうちくだき、一一・二七によってきりひらかれた、階級斗争における流動の局面を、有利におし進めねばならないのだ。

敵の弾圧に、おびえ、いわゆる「世論」からの孤立をおそれて、斗争を萎縮させてはならない。

われわれはすでに一一月二七日を前にして、その日の国会デモの成功が、その後の安保斗争に、全階級斗争の進展に、新しい有利な局面をきりひらき、一二・一〇ゼネストに、全斗争を推進させる可能性をもたらすことを指摘してきた。

だからこそわれわれは、国会デモが、生産点でのゼネストをさばる口実として設定されたものであることを承知の上で、国会デモを徹底的に、戦闘的に闘いぬくことをめざしたのである。

そして、われわれの予想をはるかに上廻る一一・二七の成功は、安保改定をゼネストで阻止しようとする全国の労働者学生にみずからの力を自覚せしめ、一二・一〇ゼネストを断固として準備する部分の急速な拡大を可能としたのだ。とくに、東京におけるデモ参加労働者への影響は決定的である。

東京共闘会議における断固たる全学連支持は、このことを明白に物語っている。政府、マスコミの徹底した攻撃の中にあっても、下部労働者に一一・二七が与えた巨大な自信をぬぐい去ることは不可能である。

もし、運動の指導部が真に階級的立場で武装されているならば、一一・二七の行動はさらに、全労働者階級による強力な全面的攻勢へと発展することだろう。弾圧への抗議闘争を軸として、全労働者階級は一二・一〇のゼネストになだれこみ、資本家政府をぶったおす状態を生んだにちがいないからだ。

このような展望が与えられている時、ただただ敵の攻撃をかわすことにきゅうきゅうとし、ほころんだブルジョアの支配の秩序の破れ目をぬい合わせることにうき身をやつすことによって、いたずら

に敵の攻撃への犠牲をも増している社共総評の幹部に対してわれわれは心から怒りを禁じえない。みずからがついてゆけないことを理由に闘った労働大衆や全学連を非難するがごとき行動は、まったくの利敵行為であり、まさに階級闘争における重大犯罪であるからだ。

全国の同盟員諸君！

先進的学生活動家諸君！ 事態は一刻のひるみも許されない。社共・総評の裏切りをのりこえて、真に闘争の展望をきりひらきうるもの、それはまさにわれわれと革命的労働者しかないからだ。あらゆる困難をのりこえて、無条件に一一・二七闘争の偉大な意義を全労働者学生大衆のものとする行動の先頭に立て！ 闘争の方針、それはなによりも、一二・一〇ゼネストの成功によって、弾圧を粉砕し、さらにあらたな決定的成闘の局面をきりひらくことだ。

一二・二七以前、それが一二・一〇への展望をきりひらくといった時、われわれは、具体的イメージをもつことができなかった。だが、一一・二七以降の急テンポの情勢の進展は、明確にわれわれに全階級闘争における一二・一〇闘争の意義を教えている。

もし、指導部のうら切りをのりこえて、革命的労働者と学生がとくに首都の労働者学生が、生産点でのゼネスト闘争の上に、再び、強力な国会に向ってのデモンストレーションを敢行するならば、それは完全に政府自民党の弾圧をはねかえすだけでなく、全労働者階級をさらに岸政府打倒の一大政治闘争にひき入れることを可能とするだろう。

流動化する階級状勢の中で、闘争の主導権をにぎるもの、それはおっかなびっくりあたりを見わして、行動をためらうものではない。何者をもおそれぬ決意をもって、断固として自己の意志を行動として具現し、それをおし通すものである。

われわれは社学同の全組織を上げて、この偉大な階級決戦の時をとことんまで闘いぬくことを宣言する。支配階級は覚悟してわれわれを見守るがよい。どんな弾圧も、われわれの決意をにぶらせることはできないだろう。

一人の同盟員の逮捕は、われわれの闘争が彼等にあたえた打撃を確信させるだけだ。

われわれの闘争をはばみうるものはなにもない。

国会デモへの弾圧をはねかえし、国会デモ禁止法粉砕のため、安保改定論を阻止のため、さらに決定的な闘争に前進せよ！

日本学生運動が、その偉大な十年の戦闘の経験の上に、明確な革命的指導部によってその前進を開始した最初の年もやがて終る。「学生運動は危機だ。」「なんとかもう少しおだやかにやらなければとうてい一般学生はついてゆけないだろう」こんな泣き叫がいわれてから一体もう何年になるだろう。

日本学生運動は、はたして危機にひんしているだろうか。このままでは、全学連は破綻するだろうか。六月の第一四回全学連大会以後の学生運動は事実をもって、このような悲観論に反ばくしている。昨年の勤評・警職法闘争の後の若干の低迷の中では、確かに、学生運動内部における日和見的潮流は、その力を増したかに見えた。日本共産党に代表される右翼反対派は、一定の影響をあたえるかに見えた。

しかし、六月、それまでの低迷を打ち破る戦闘的な指導部が確立されてからの事態は、あきらかに、日本学生運動が、その偉大な前進を開始したことを示している。

東大Cにおいて、名大Cにおいて、日本共産党に代表される右翼的潮流は、戦闘的学生大衆から見放されてきている。東大Cにおける委員長選挙の結果は、日本共産党がいかにぎまん的スローガンをもって大衆をあざむこうとしても、もはや不可能であることを事実をもって示した。

われわれは現在までの実践の経験の上に自信をもって断言することができる。日本共産党をはじめとした、一切の日和見主義的潮流を、日本学生運動の戦列から根本的に追放することは、完全に可能である。一一・二七闘争における社共両党の指導の破綻は、日本学生運動が既成の前衛の権威から放たれ、巨大な前進を開始する上に決定的な日時を画した。

あの日、社会党浅沼書記長が、デモ隊を早く解放させるために行った万才の三唱に、労働者学生の唯一人として唱和しなかった事実共産党の志賀義雄が、ごうまんにもデモ隊の進撃を制止しようとした時、なんの抵抗もなく大衆は彼をはねとばして前進した事実は、もはや彼らが日本学生運動の指導にとって、過去の人物となりきったことを示している。

真に階級闘争の試錬にたえぬく決意を有するもの、それはいまこそおそれず、真の革命的左翼の旗の下に結集せねばならぬ。われわれ社会主義学生同盟は、このような真の革命的学生の組織である。

われわれは、既成政党の破綻の中をおそれずみずからの組織を拡大して前進するだろう。

全日本の社会主義をねがう学生諸君！

いまこそ、社会主義革命の大事業のため、わが社学同に参加せよ！

われわれは、諸君が汚れない革命への熱情に燃える者である限り無条件で諸君らの参加を歓迎するだろう。

いま、社学同を強化することこそ、一人の諸君がわが同盟の旗の下に参ずることこそ、大誹謗の嵐を浴せる敵権力にたいする新たな脅威を与えるのだ。われわれの活動に目を見はる労働者大衆を勇気ずけ、日和見主義者を絶望させるのだ。

全日本の先進的学生諸君、

一一・二七国会デモの勝利の上に、いまこそ大進軍を開始せよ！

国会デモへの弾圧を労働者学生の連帯行動ではねかえせ！

国会デモ禁止法を実力で阻止せよ！

労働者学生のゼネストで安保改定調印を阻止せよ！

全学連の旗の下、日本学生運動の戦闘的伝統を守れ！

社学同を強化せよ！

すべての先進的学生は、社学同に結集せよ！

一九五九年一二月三日

スト破りの共産党は粉砕された

――名古屋大学教養部の十月三十日――

高田　堯

はじめに

八月の第五回原水爆禁止世界大会の後、革共同と呼ばれる少数反対派の人々は、全学連の安保改定阻止を決議させる闘いに加わることなく傍観した後に、次のように評論した。「全学連は改定阻止の決議をさせることばかりに目を奪われて、平和共存論の裏切り性を充分暴露することができなかった」と。

四、五月闘争の初めに、まだ全学連の指導権を握っていた彼らは、安保改定阻止の大衆行動を組むことではなく、まず新入生歓迎会、講演会を、まずイデオロギー闘争をと叫び、雨で総評がデモを中止してしまったあとに独自に断乎としたデモを組むのではなくて、集会を開いてその壇上から大衆行動と切りはなされたイデオロギー闘争を説いたのであった。全学連の安保闘争が、六月の定期大会を経た後の六月二五日においてやっと全国的な様相と高揚を見せたのも、それ相応の理由があったのである。

安保改定の本質を暴露するにしても、平和共存、中立政策の裏切り性を暴露、粉砕するにしても、単なるおしゃべりだけではできるものではない。日和見主義は具体的問題においてはっきりとあらわれる。志賀義雄の「原水爆大会だから安保を持ちこんではならぬ」という発言が、平和共存論と同じ日和見の根源から出てきていることは、われわれが徹底的に安保改定阻止を持ちこむことによってこそ、もっとも有効に暴露されたのだ。

共産党の日和見は具体的問題において――いかに闘うかにおいて――はっきりとあらわれる。彼らの日和見をはねのけて闘う中でこそ、その日和見性と日和見の根源とがあますところなく暴露されていったのである。「中立かどうか」という抽象的論議ではなく、「スト か否か」――この中で共産党の日和見を見せつけられる中で、「中立」に対する疑問と批判が生まれてきたのではなかったか。

第二〇回全学連中央委員会の第一日目の十一月九日、「アカハタの「主張」は学生運動内部の「トロツキスト退治」を呼びかける中で、「しかしトロツキストとの闘争で指摘しなければならないことは、まだ行動を決意できないおくれた層に依拠する批判、消極的傍観者的態度でなく、学生大衆の政治的日常的利益の積極的擁護者としての能動的積極的戦闘的態度がつねに必要であるということである。」「正しい政治的自覚と盛んな行動力をもって政治的日常的課題にとり組み、大衆的行動をたたかうことを忘れて学生運動の正常化はありえない。」と批判している。このことは学生運動における「トロツキストとの闘いが、全国的に右翼的なおくれた部分に依拠して行なわれているのをこの無能なトロツキスト狩の英雄たちはザンゲしたことになる。

しかし、このような「批判」が現われたことをもって、共産党を「改造」できるがごとき幻想をいだくことはむしろ有害であるだろう。共産党内部における「あまりに生ぬるい、あまりに稀な批判」は、あたかも資本主義社会に対する近代経済学の「批判」が、資本主義社会を改革できるかのごとき幻想を伴うのとまったく同じ役割を果すものだ。

「トロツキスト退治」における「大衆的行動をたたかうことを忘れた」右翼的なおくれた部分への依拠は単なる偶然でもなければ、単なる技術・戦術の問題でもない。これこそ共産党の本質なのである。しかもそれがもっとも革命的であった学生細胞を完全に毒しており、その病状はわざわざ「アカハタ」で「批判」しなければ左翼的部分をつなぎとめておくことができなくなっているほどである。

われわれは、安保改定阻止のストライキ闘争を闘っていく中で、共産党の「おくれた部分に依拠」したやり方こそ彼らの本質であり、それは一片の「批判」で「改造」できるものではなく、徹底的に粉砕しつくされなければならないことを知ったのであった。

一、日和見主義粉砕の火ぶたは切られた

伊勢湾台風にみまわれて三週間、十月三十日をひかえて各古屋大学における授業は一九日から始まろうとしていた。その前日の一八日、「安保対策会議」において、安保の本質、国際国内情勢を討論する中で、十月三十日のストの意義が全員一致が確認されつつあった。日和見主義者は一人もいないかのごとくであった。だが日和見主義はまさに具体的問題において現われる！　一〇・三〇ストをいかにして実現するか――その方法をめぐって安保対策会議は真二つに分裂した。次の日の始業日から一〇・三〇ストライキを徹底的に訴え、そのための宣伝にただちにとりかかるべきであると主張したのは一二名であり、それに反対したのは、対策会議の議長を入れて四名であった。

反対派の主張はこうであった。〝台風以来、多くの学生が災害救援活動に従事して、その中で政治的行動の必要性を感じている。だが最初からストを提起すれば反撥をまねくだけである。災害活動の中で安保の本質を明らかにしていき、盛り上ったらストを提起すべきだ〟

これに対してわれわれは次のように主張した。〝災害救援活動の中で大多数の学生が政治的に目覚め、政治的行動の必要性を痛感していることは事実だ。だが、それらの人々を行動に立たせるためには、まさに安保改定阻止のための行動を訴えるこ

とによってである。名古屋は六・二五で授業放棄さえやっている。一年間近い安保闘争で学友は安保改定の本質を見抜いている。今必要なのはまさに具体的行動提起だ。

「ただちにストライキを提起すべきだ！」という主張が一二・四（議長も含む）で可決されその方針を物質化すべく、議長がとりかえられた。情宣部長も組織部長もとりかえられた。われわれの行動によって校内は一夜にしてその情景を一変した。掲示板といい、門といい、校舎の壁といい、立木といい、あらゆるところにステッカー、掲示用紙がはられ、一〇・三〇ストが呼びかけられた。ビラがまかれ、あらゆるクラスでクラス討論が組織された。一九日、二十日の圧倒的宣伝と組織のもとにすでに二十日には二つのサークルと二つのクラスがストライキの決議を圧倒的多数で可決したのであった。

まさに学校全体が、一〇・三〇ストに向って驀進し始めたかに見えた。だがその裏では、共産党細胞の指導下に、「反革命」としかいいようのない隠謀が着々と進行しつつあったのだ。

二、日和見主義の反撃

日和見主義者でも死者狂いで斗うときがある

一九日の圧倒的なストライキ提起に仰天した共産党一派の支配する常任委員会は急きょ常任委員会を開いて「ストライキはやるべきでない」という前代未聞の「方針」を発表した。それは次のようなものであった。一〇・三〇ストをやれば「たとえストライキができたとして、闘争の最大の山である十一月中旬にわれわれの力を発揮することを妨げるのではないか」「学生運動の経験は教えている。われわれの運動は粘り強い、また地味な持続性がなく、なん回もストライキはできない。十一月中旬が最大のピークだ。」（常任委専用掲示板より）

時を同じくして共産党細胞も次のような声明文を発表した。

「中立がナンセンスであるという」分裂主義者は「われわれが血と泥で闘いぬいた災害救援闘争を正しく評価せず」「彼らは市民の多くが生命の危機に陥っていた時見むきもせず、人間として当然感ずべき被災者に対する同情と共感をもたなかった。」

「岸反動内閣は安保を災害でカモフラージュするとともに、災害復旧の要求を安保で解消することに誰よりも利益を感ずるであろう。この利敵行為に加担してはならない。分裂主義者の本質はこれである」

「一〇・三〇に対してただちにストを提起することはその言たるや壮なるもむなしと云うべきである」「全国一斉の政治ストのデマゴギーのもとにだれの目にも必要である災害復旧の要求をそらせることはおそらくこの上なく〃なに者か〃を喜ばせるであろう」

このように、例によって例のごときウソと中傷のキャンペインとともに、共産党一派は本格的な反革命――スト妨害を開始した。「安保対策会議」は毎日四時から開かれた。二十日の対策会議は最初から異様な雰囲気につつまれていた。それは出席者の構成を見ただけでなにものかを感じさせた。対策会議のメンバーのうち出席していたのはたった一五名に対して、常任委員五名、全学連一名、県学連、各専門自治会より七名（すべて共産党員）であり、その他傍聴者が十数名であった。

会議は初めから熱気をおび、ヤジと怒声がみだれとび、議長がな

ん度も交代し、はては机の上にとび乗ってつかみ合いにならんばかりの場面も現出した。結果は八対七で今までの対策会議の方針が否決され、新たに「常任委の方針に協力する」という動機が可決された。いったいなぜこんなことが起ったのか、という疑問に、次の日にだされた「常任委一派の奇怪な反動的言動について――常任委多数派のストライキ反対論は闘おうとしない意志の巧妙な正当化だ！――」というビラが見事に答えてくれている。

『皆さんは不思議に思うかもしれませんなぜなら、十月十八日の対策会議では一一・四で一〇・三〇ストが決定され、それによってきのうまで皆さんにストが呼びかけられてきたからです。それでは十一名のうちなん名かがスト反対に自分の意見を変えたのでしょうか。そうではありません。ストライキに賛成して、そのために活動していたなん人かの人は、ビラ作りなどの仕事で疲れてでてきていなかったのです。

それならスト反対の人々はなぜ急にふえたのでしょうか。八名のうち五名までが「常任委員としてやることになっている」という理由で、ほとんど対策会議としての活動をやってこなかった人たちだったのです。いったいなぜこれらのスト反対派の人々はそのようなにも活動していない人々を大量動員して、教養部以外の人までなん人も応援にかけつけたのでしょうか。

そのうらには次のような事実があったのです。一九日の夜、一八日に一〇・三〇ストを決めた対策委員会は、常任委員会に同様の方針をだして、安保改定阻止のためただちに行動を起すこと、具体的に一〇・三〇ストを目指す行動を起すことを常任委員会に要請したのです。ところが常任委員は一名を除いて全くストをやる気がなかったのです。一〇・三〇ストの重大性も考えていなかったのです。かれらはそのとき、はっきりとストライキはやるべきでない、といいました。

問題はここから起ってきたのです。〃やるべきでない〃といういい方はしても、本心は〃やる気がない〃という無気力なものでした。しかし、かれらとしても〃自分たちはやる気がないけれども、君らだけでやってくれ〃などといいうるでしょうか？　かれら自身〃安保改定阻止のため断固闘わなければならない〃といっているのに。

ここからきのうのかれらの態度がでてきたのです。自分らは今やる気がない。しかし、〃彼らはやる気がない〃といわれるのは困る。このジレンマから逃れる道はただ一つ、〃やらないこと〃を正当化することである。ただまったくこの理由によってのみ、かれらの態度がでてきたのではないでしょうか。それは〃一〇・三〇ストライキ反対〃というときのかれらの理由がなに一つ正当なものはなく、すべてなにかためにするゴマカシであることからもわかります』

このビラは、以後「十一月中旬ピーク論」「ストライキは二回できない」などの理論を反駁した後、次のように結論している。

『以上のように常任委（一名を除く）と、その一派の人々の理論はまったく非科学的で〃どうやって安保改定を阻止していくか〃という観点のない、不可思議な理論です。このことは、はじめに指摘したように、自分たちは一〇・三〇を断固闘う意志などないのだ、という本音を、一応やるようなことばでもって巧みにインペイし、はては正当化するために、とにかく一〇・三〇をやらな

いために考えだされた理論でしかない、というべきではないでしょうか。

常任委員の人々はいつもこういっていました。「行動形態をきめるには学生大衆のもり上りを見てきめるべきだ」と。(じつはこのような考え方によって、いつも行動提起が遅れ、全学生がそれに向って準備する時間がなかったのでした)それが、なんと不思議にも、「学生大衆」のもり上りがまだどうだかわからない一九日(学校が始まった日)の夜、いち早く提起してしまったのです。ストをやっちゃいけない！　と……。しかも学生大衆である安保対策会議が一〇・三〇ストを提起し、二十日には二つのクラス決議、二つのサークル決議が出ているのに、こうした「学生大衆のもり上り」を無視して、いち早くそれと反対の行動提起をし、しかも安保対策会議をぶちこわしにかかったのでした。

このようにあくまで、自分たちのやる気のない日和見主義を大衆的もり上りまで押しつぶして正当化しようとする常任委員会多数派及びその同調者たちに対して、私たちは声をかぎりに不信任を叫びます。

学生の皆さん！　こうしたマチガッタ理論と、やる気のない意志にまどわされることなく、絶対に一〇・三〇ストライキ目指して安保改定阻止、調印阻止目指して、意志を結集していこうではありませんか！』

三、われわれの反撃と共産党の恐るべきスト妨害

このビラのでた日、安保対策会議はふたたび一二・六で一〇・三〇ストを確認した。だが、一日の空日と混乱はそれだけではすまない。それはこのような激動の時期にあっては、一月にも二月にも価する。この遅れをとりもどすために、なにがなされねばならなかったろうか。

まず第一に必要であったのは、「十一月中旬ピーク論」と「安保と災害関連論」を、われわれの間でも、大衆的にも徹底的に粉砕することであった。「十一月中旬ピーク論」の主観主義的でかつ客観主義的、図式主義発想法については、ここでは「安保と災害関連論」についてはあまりに明らかであるので、ここでは考察してみたい。

そもそも、この「関連論」は、つねにマルクス主義の歪曲や階級闘争の裏切りの隠蔽のために使われてきた。現在われわれの間で問題になっている「労働の質と量」がそうであり、「安保と合理化」もそうである。「労働の質は量に環元されうる」とか「労働の質と量とは互いに関連している」という理論が「労働の質による分配」を正当化するために使われているし、「安保と合理化は関連している」という理論は「合理化闘争をやることによって安保闘争を発展させる」という考えや、炭労の合理化闘争に便乗し、おぶさって安保闘争をやり、それで一応やったふりをする総評の裏切り的方針を正当化している。

もちろん労働の質と量は関連している。しかし、労働の質と労働の量はまったく異った、相互に対立する概念であることを把えてはじめて相互の関連性も明らかにされるであろう。(くわしくは「共産主義」第三号・加藤明男「労働の質と量」参照)。安保と合理化にしても同じである。なるほど安保改定と合理化は資本の運動法則による切っても切れない関連をもっている。だが安保闘争と合理化闘争はまったく別の闘争であり、まったく別に闘われねばならない。

そしてその二つのまったく別の闘争をもっとも有効に有機的に結合させることこそ前衛党の任務といわねばならない。

われわれは以上のように「関連論」のまやかしとその本質を見抜いた上で、「安保と災害関連論」に対して次のような反論を加えた。これは二三日に出した「共産党細胞への公開質問状――ウソと中傷をやめ、一〇・三〇ストの妨害をやめ、安保改定阻止に真剣にとりくめ！――」というビラだ。この一部を引用しよう。

『このことを考えるためには、現在の政府の災害対策を正しく評価する必要がある。現在政府は災害復旧をサボっているだろうか。むしろサボツているというより彼らは世間から非難を受けないための一応のことをやろうと一生懸命である。台風直後の混乱のときの無能ぶりとは違うものがあるのである。このときにいくら「災害復旧の要求」をしても、「それによって政府の本質をバクロしよう」としても、せいぜい「台風のようなときには、手落ちがあるものです」と弁解されるか「自民党県知事と社会党市長のすれちがい」だという弁護論との論争にひきずりこまれるのがオチであって、むしろそれこそ逆に、安保から目をそらす役割しか果さないのではなかろうか。

彼らは「岸反動内閣は災害復旧の要求を安保で解消することにたれよりも利益を感ずるであろう」とのべている。この論法でいくと、安保改定阻止を徹底的に闘うことは災害復旧の要求を解消する役目を果すことになってしまい「利敵行為」だというのである。災害復旧の要求とはそんなものだろうか。

「災害復旧闘争を徹底的にやることによって、安保闘争をもり上げていく」という理論だから「安保を最初からやるのは――言葉をかえれば一〇・三〇ストを最初から提起するのは利敵行為だ」ということになってしまう。そういう災害復旧闘争のとらえ方だから、安保から目をそらさせる結果になるのである。

現にクラス討論をやっていて、一〇・三〇ストについて安保阻止の見通しについて討論が活潑になってきたところで、「災害のことも大切だ」といって討論をそらしてしまったことがある！

災害復旧の要求をやるのは人民の利益を守るために絶対に必要である。しかし、安保闘争と災害復旧の要求とははっきり分けてやらなければならない。そうでなくて、「どちらも関連している」とか「災害は安保の本質とつながっている」とかいってなんとか関連づけようとするなら、「安保をやると災害復旧の要求を解消する利敵行為だ。」ということになってしまうのである』

このようにビラなどによる徹底的な宣伝活動とともに、われわれは全力をあげてオルグ活動を開始した。共産党一派の日和見と、大衆的盛り上りがないからという日和見の口実を粉砕するためには、絶対に大衆的盛り上りを作り出すことが必要であったからである。しかしこの仕事をわれわれは単独でやらなければならなかっただけでなく、共産党一派の積極的意識的な妨害の中で行なわねばならなかった。対策会議のメンバーはクラスオルグでしばしば共産党派とかちあった。彼らは討論が白熱化してくると「災害も大切だ」とか「本質を全員が認識しているとはかぎらない」とか、はては「処分が出るかもしれないから、そのことを考慮に入れて慎重に決めてくれ」とさえいいだし、とくに「本質論」は多大の混乱をもたらした。共産党一派は「最初からストを提起したからスト論議になってしまって安保の本質の討論が失われてしまったとさかんに宣伝し始

めたからであった。

なるほど、ストライキ提起はつねにそのような危険をともなうものである。具体的な行動提起は単なる戦術論に討論を陥らせる危険をつねにもっている。そのような危険から逃れることは討論の組織者、意識的部分がつねに具体的な行動提起を問題の本質や当面の情勢の問題と関連させて討論を進めることによってのみ可能なのである。そうではなくて、共産党一派のしたことは、具体的な行動の問題と切りはなして、「本質」の問題にかぎり、そこへ討論をひきもどすという後向きの役割であったのだ。だからこそわれわれはある程度それに対抗するためにストライキを強調する必要があったし、そのためにあたかもわれわれが本質の問題ぬきでストライキ論議をやっているかのように宣伝されたのであった。

こうした数々のウソやデタラメの宣伝にもかかわらず、まさに大衆的昂揚は急ピッチで上昇していった。二〇日の反革命と、一日の空白のもたらしたその後の一時的低滞を打ちやぶって二六日の月曜日には一挙にして四クラスがストライキを決議し、二クラスが仮決議、さらに二サークルがストライキを決議したのであった。ステッカーはすべて貼りかえられ、なになにクラスト決というステッカーが校内のいたるところにはられた。学校中が異様な雰囲気をもってきた。朝のビラくばりもほとんどが皆積極的にビラを受けとっていくようになった。われわれの精力的活動がすばらしい大衆的昂揚をもたらしたのであった。

これが勝利を保障した。その晩常任委員会は日和見の本質たる大衆追随ぶりを示して、ストライキ方針をだしたのであった。問題は二八日の学生大会であった。学生大会が成立するか否かにすべてがかかってきたのである。

四、共産党の顕著なる分裂工作

それにもかかわらずストライキは可決された

一〇・三〇ストの成否がかけられた二八日の学生大会は、共産党のセクト主義が暴露されたという意味で、画期的なものであった。

彼らのセクト主義はすでに以前から顕在化していた。たとえば、彼らの反革命が失敗し、安保対策会議の指導権が彼らの手から奪われると同時に、彼らは対策会議から全員引き上げてしまい、平民会（平和と民主主義を守る会）に入ったのであった。しかもその理由たるやなんと「平和共存と中立政策を認めない者と一緒にやるわけにはいかない」というのであった。

しかし、それはウソであった。対策会議で常に確認されていたのは、いかなるイデオロギーをもとうが、安保改定を阻止せんとする者はだれでも入ることができるということだった。もし「中立政策を認めなければ入れない」とか「中立を唱えるものは入れない」とかいうのであれば、いったい安保改定阻止闘争の統一戦線はどうして組むことができようか。つねに「民主勢力の巾広い統一戦線」を叫ぶ共産党は、実は世界の共産主義運動史が破産を宣告した「政策による統一戦線」であり、それによって彼らはみずからをセクトに追いこんでいることを知らねばならない。

二九年恐慌とそれにつづく資本主義そのものの危機の中で、増大するプロレタリアートの闘いを紛砕するためには、必然的にブルジョアジーはファシズムに賭けざるをえなかった。迫まりくるファシズムの嵐と闘うためには、まず「労働者の統一」こそ必要だったろう。共産党の影響下にある労働者、社会民主党のもとにある労働者、さらにはブルジョア自由主義政党のもとにある労働者とさえ、ファシズムに対してともに闘うことができたし、また闘わねばならなかった。ところがドイツ共産党は「ファシズムは社会民主主義にたよるブルジョアジーの戦闘的組織である。客観的にいえば社会民主主義は、ファシズムの穏健な一翼である」というスターリンの言葉を信奉し、社会民主党をもって「社会ファシズム」であると規定したのであった。「社会主義」を名のるファシズムと統一戦線を組めるはずはない。社会ファシズムを打倒することなくしてヒットラーの打倒はありえない。だが下部の社会民主党員はちがう。彼らは革命的だ。彼らとは統一戦線を結ぼう。ここから「下からの統一戦線論」が生まれ、下部の社会民主党員に対して最後通牒が発せられる。「社会民主党を捨てて共産党にきたれ！」と。共産党の機関紙「ローテ・ファーネ」はくりかえす、「共産党の指導下に服しない一切の統一戦線は、プロレタリアートの利益に反するものである」と。独共産党書記長テールマンは宣言する、「われわれ共産党はどんな犠牲をはらっても統一戦線を望んでいるのではない」「われわれの政策の階級的内容を否認することはできない」と。彼が「政策の統一」――実は社民党との合同を考えていたことは明白である。統一戦線とは、具体的問題について「だれを打つのか」とか「なにをどうやって獲得するのか」で結ばねばならない。そしてその場合の相互の政策・方針に対する完全な批判の自由が保障されねばならない。

ドイツの敗北の教訓から生まれたといわれるフランスの人民戦線もまさに、この点で、中国の共産党員が個人の資格で国民党の規律に服して自民党に入党したのと根本的には同じ誤りを犯したものだった。それは共産党の全活動が課せられている任務とさえいえる労働者階級の階級意識の覚醒に対して、みずからの手足をしばり、みずからの口をみずからの手で封じるものであった。なにをかくそうフランス共産党の統一戦線は、スターリン＝テールマンが熱望した「政策の統一」であったのだ。それはトレーズによって「資本主義の枠内で実現できる最低綱領」と名づけられた人民戦線綱領を見ればあまりに明らかである。そこには批判の自由の保障はまったくなかった。そしてそれはコミンテルンの「不干渉政策」によって輪をかけられたのであった。

セクト的ブランキスト的火焔ビン闘争の誤ちは、第七回大会によって完全に払拭されたといわれる日本共産党は、はたしてこうした誤りと無縁であろうか。あらゆる事実が「否！」を叫んでいる。彼らは社共の統一を唱える。いったいどんな統一か。具体的な階級闘争を離れて統一はありえない。ところが夏以来開かれてきたいくつかの組合の大会、総評大会は、実際の階級闘争の方針と離れて社共の統一を論じ、そのために安保改定阻止の方針すら明確に打ちだすことができなかった。共産党の提起する無原則的、抽象的、無内容な社共の統一が、いかに階級闘争に害毒を与えているかを知ることができる。しかも共産党は「自民党の良心的な部分」とすら「統一」するために、批判の自由などまったくどこかに忘れてきてしまったばかりでなく、八・六大会においては「自民党の中にもいい人がいる、松川事件で献身的に活躍している人もいれば、原水禁活動を精

力的にやっている人もいる」と積極的に自民党を弁護し、自民党の「いい部分」に媚を呈することさえ始めたのだ！　これは巾広い統一ではない！　実は裏返えせばセクトである。これは戦闘的労働者に自民党との統一戦線を強要するものであるだろう。

こうした共産党のセクト主義は二八日の学生大会において、はっきりと大衆の前にあらわれた。その席上、ある共産党員は、大衆的盛り上りを敏感に感じとることができず、「まだ充分に安保の本質が認識されているとはかぎらないから、まず本質の討論をしよう」と討論の途中になって恥かしげもなく発言し、引きのばしをはかることによって、あやうくストライキ決議をできなくさせるようなことをした。また、ある共産党員は「処分がでる可能性があるから、充分慎重に採決してくれ」とドウカツした。彼はかって対策会議で、スト提起のときには名古屋人の特殊性を考える必要があるといって失笑を買ったことのある者だった。また、常任委員会は、スローガンに「中立」を唱え、党の政策を大衆におしつけた。幸い、中立に反対する人々は、安保改定阻止のため断固統一を守って闘うつもりだったので、そうしたセクト的行為もストライキを決議するのに混乱をもたらしたりはしなかったが、そうしたやり方が、全世界の階級闘争に大きなマイナスを与えていることはあまりに明白ではないだろうか。

このようにして、共産党は一歩あやまれば収拾のつかない混乱に陥る危険性をもったセクト的分裂工作を行ったにもかかわらず、大衆はそれを乗りこえて進んだ。大衆は共産党の攪乱にもかかわらず、安保対策会議の訴える現在の危機的情勢をよく理解した。学生大会は、ついに三八六対八六対一〇三の圧倒的多数でストライキを可決したのであった。

五、なぜストライキは成功したか

当日の行動はすばらしかった。学生大会のあとで結成されたストライキ実行委員会のもとに、朝七時から行動が開始された。その日の様子を十月三十一日付「名古屋大学新聞」は次のように伝えている。「三十日、教養部の学生は各クラスごとに、早いところでは朝六時から行動を起し、日本車輌、国鉄、愛知時計、全港湾、全司法、全テイの各労組、県女大、名市大、名工大、学大、愛大、福祉大、旭丘高の学友へ向けて、笠寺駅、熱田駅、名古屋駅、堀田駅で市民にビラを配り安保改定阻止をよびかけた。十時から一時までは街頭でステッカーはり、ビラ配り、署名カンパ活動をくりひろげた。名駅に栄町に、ひろげられた署名カンパ、三万枚のビラ、全市にはられた七千枚のステッカー、これらが大きな力となって国民の安保闘争へ発展するきっかけをあたえてくれるだろう。教養部大会は、一時からエンゼルパークでもたれた。はじめ五百二十と報告された出席者も、大会中にカンパを終って帰ってくる人もあり参加学生は約七百。

集会には争議中の名古屋証券労組の代表が挨拶し、また各労組にビラ配りに入ったクラスの労組との話し合いの報告などもあり、参加者は行動の中で労働者との連帯感を深めていった。校内におけるピケは二クラスがあたっただけにもかかわらず、授業をうけたものは千八百名中午前中七四名、午後七一名であった。一〇・三〇ストライキは完全に成功した。なにがこの成功をもたらしたのであろうか。

重化学工業を中心とした固定設備の巨大化は、個々の資本家の蓄積と銀行信用によるその遊休資金の調達という機構を桎梏と化し、社会的な遊休資金を広汎に調達すべき株式会社を生み出しつつあった。株式会社の出現は産業資本と銀行資本の癒着をもたらし、巨大な独占を形成するとともに、ある程度いつでも尨大な資金調達が可能になったことはかならずしも不況の末期に有機的構成の高度化を伴った投資をするとはかぎらなくなり、そのことによって景気の循環過程すら攪乱するようになった。設備投資はそれが有機的構成の高度化をつねにともなうために不断に産業予備軍を形成し、それが潜在失業者・停滞失業者となって農民層の階級分化を停滞させ、むしろ逆行させる現象を生みだし、中小企業を広汎に存続させた。農業、中小企業は産業予備軍の不断の供給源になるとともに、巨大独占資本の収奪の対象ともなった。

農民や中小企業者は、むしろ労働者以下の生活を強いられる。だが彼らの不平・不満はただちに独占資本の方向へ向けられるとはかぎらない。彼らの不平不満はもっとも身近なところに向って爆発しやすいし、彼らの動揺常ない階級的地位とあいまって、階級間の力関係に応じてある場合は労働者階級の味方となり、ある場合にはブルジョアジーの尖兵となる。ここに帝国主義段階におけるファシズムの物質的基盤があった。

独占の強化はそこに働く労働者階級の役割を増大させた。ブルジョアジーは労働者階級の抵抗に対処するために、社民を利用し、それでもだめな場合、ブルジョアジーにとってさえもっとも危険な道具であるファシズムに賭けざるをえなかった。世界戦争や大恐慌のあとにファシズムの危機が増大したのは当然であった。

国家独占資本主義段階においては、そうした傾向はますます増大する。階級闘争における労働者の役割は決定的なものとなる。巨大独占体は、国家権力によって法制的にすら保障された自己金融と国家資金の補完によって、ますます自己の欲するときに設備投資をすることが可能になり、それとともに国家権力のあらゆる機構を利用して大衆収奪を強める。巨大独占間の競争と市場争奪戦は激烈をきわめ、階級闘争は尖鋭化する。戦争とファシズムの危機が存在しないのは労働者階級が闘わないで敗北するときか、(フランスの例を見よ)最終的に勝利したときのみである。

今や世界は歴史の転換点にある。国家独占資本主義の強化によって帝国主義陣営に復帰した諸列強、とくに西ドイツの脅威的進出とアメリカの相対的地位の低下は世界の資本主義の再編成をもたらしつつある。しかし、この「再編成」は単なる再編成にとどまるものではない。この「再編成」は再編成後はまたふたたび安定した力関係を生みだすというようなものでは決してないであろう。すでに戦後の復興期故の設備投資はかげをひそめ、今や資本は世界的に過剰になりつつある。この世界的な資本の過剰は、世界的な大恐慌をすら予測することを可能にする。

こうして、世界的な市場争奪戦の激化と階級闘争の尖鋭化とは、中間層に位置する学生大衆をして、そうした状況を本能的にしろ、意識的にしろ敏感に感じさせる。彼らは危機を感じ、焦燥を感じ、行動への意欲にかりたてられる。だが、彼らはそのままに放置されるならば、どちらの側からにせよ階級闘争に参加すべく大胆に行動を起すことはないであろう。それを組織し指導することこそ「社会主義者」の任務である。もしそれを怠るならば、彼らはブルジョア

ジーの手先によって指導されることすら可能であろう。

「社会主義者」による中間層の組織化と指導はかならずしも階級意識や「社会主義」を表明して行なわれるわけではない。それは大衆の生活を守る闘いでもよければ、ブルジョア民主的権利を守る闘いでもよい。その闘いは、「社会主義者」によってしかも政治闘争として指導されるからこそ、労働者階級の前進の武器となり、よき同盟軍となり得るのである。ここにこそ社学同の任務がある。

学生大衆を組織し指導することはなにによって可能であろうか。それは問題の本質を、つねに具体的な行動と関連させて宣伝することによってのみ可能である。名古屋大学におけるストライキの成功も、共産党の日和見に対する徹底的な闘いもさることながら、最初から大胆にストライキを提起していったことに多くを負っているのである。そうしてこそ共産党の日和見を暴露し、それと闘うこともできたのである。

〔三十二頁より続く〕た時、西尾新党もまた大衆的基盤をもつことなく衰退の道をすすむだろう。「経営者時代」は一場の夢と消えるのだ。

だが、そのためには労働運動に深く根を下した真の前衛党の存在が不可欠なのだ。現在の危機は、みずから限界を口にする民同の裏切りを、これを看過するばかりでなくすすんで援助さえする公認前衛党の無力さの直接の結果であることはすでに明らかにした。

「団結のために」闘争を放棄して組織を売りわたす思想こそ、公認前衛の公式の思想なのだ。砂川闘争に際して条件派との統一を主張したのは他ならぬ彼らであった。新潟闘争を、勤評闘争を、五九年の鉄連の闘争を敗退させたのもこの思想であった。

階級協調主義の侵入をまのあたりに見ながら、革命的労働者は明確な闘いの方針と指導を待ちわびている。日和見主義は粉砕されなければならない。「民同指導の限界」は、真の左翼の拳でつき破られねばならない。

五九年の社会党の分裂を日本プロレタリア運動潰滅の一里塚とするのではなく、一転して真の指導部の確立と昂然たる資本家階級への反撃の劃期として運動史上に記録させるためには、安保・合理化の資本家階級の政治・資本攻勢に対する非妥協的闘争の遂行と、その中での真のプロレタリア前衛党の確立こそが要求されるのだ。

学生ノ闘イ孤立セズ

十月三十日・金沢大学支部発

（一）

十月三十日、全学連三十五万の全国政治ゼネストが労働者階級に階級的覚醒と安保改定阻止への重大な決意を呼び起した、その日の夜、石川県においては、宿願の青年学生共闘会議の結成大会がもたれた。

総評の七次にわたる安保改定阻止の闘いが、敵のスケジュールの中にすっかり埋没してしまい、下部労働者のすべてのエネルギーが窒息させられようとし、幹部の裏切りが続き、炭坑労働者の血の闘いも孤立せしめられ労働者階級が危機的状況に追い込まれている中で、十月三十日、敏感に情勢をキャッチし、つねに重大な政治闘争の口火を切ってきた全学連三十五万の偉大なる闘いは、労働者階級がいま、なにに向って、いかなる武器で闘うべきかを明確に指し示した。

この日の金沢市街は、目抜き通りから狭い小路の奥にいたるまで早朝から「安保改定阻止」を訴える金大学友の姿であふれていた。

闘いは、ストで起った教養部の学友と、八〇％授業放棄で起った文科学友を中心にして朝七時、労働者の出勤時を目指して開始された。市内一四カ所でのクラス単位の街頭アピール、そしてビラ配布は七〇〇名にのぼる学友の手から出勤時の労働者の手から手へとわたされた。午前九時には四万枚のビラが、各所でクラス単位の無届けの大衆的デモがまき起り、安保改定反対のシュプレヒコールが高らかに叫ばれた。そのデモは電車通りから小路の奥へ、一般家庭への個別訪問、さらには各労組訪問、ビラ配布へと自然発生的に発展していった。活版で準備した四万のビラが足りなくなってしまい、次から次へと各クラスのビラを作成にくる学友の手で三台の謄写版はフルに回転し、闘争本部はごった返した。この学友の底知れぬエネルギーの前に、指導部はなすすべさえ、見当らぬ場面がしばしば現出した。国鉄北陸地本から借り受け学友の運転する宣伝カーは金沢市内をかけめぐり、各所で演説をブッた。この金大教養を中心とする学友の断乎とした決起は、ついに金沢美大有志学友の行動参加を導きだした。午前十時電話によって美大有志が街頭に出たとの知らせに闘争本部はわきたった。

はたして午後二時、七〇〇名を結集した学内での全学抗議集会は駆けつけた県評代表の「今日の学生諸君の闘いこそ、われわれ労働者の進むべき方向を明確にした。」との熱烈な連帯の挨拶によって

はじまった。

六・二五以降の闘いの中で指導部が盛り上らぬ大衆闘争の中でヒステリックに叫び続けた労学共闘のスローガンは、大衆の圧倒的な闘争意欲と行動の中で大衆自身によって完全につかみとられているではないか。共社両党代表の中味のない宣伝演説になんら反応を示さなかった大衆が、県評代表の真に闘う姿勢をもった連帯の挨拶に対し、鋭い批判と激励の声の中で、ものの見事に闘う労働者とともに闘う決意を固めていったではないか。大会終了後、全行程二・五キロのデモは、デモ中に潜入した私服の挑発を暴露し、制・私服三百名の警官の暴力を排し、戦闘的なジグザグデモと座り込みによって断乎として闘われた。夕闇せまる午後五時三十分最後まで闘った五百の学友は、県評青年部長の連帯の挨拶の中に肩を組み高らかに「国際学連」の歌を夜気にひびかせて解散した。そして六時より、学友代表五十名は、青学共闘結成大会に合流、社共両党の無方針のもとに、「十一・二七」の闘いの意志統一もされずに終ろうとした大会で、大衆的闘いの自信の上に立って、断乎とした方針を、青学共闘会議の方向に大きな前進を与えた。夜十時まで三百名の青年労働者と夜間デモを展開し、警官の介入に抗議してただちに警察署への抗議へと、青年労働者とともに闘ったのである。

（二）

われわれの一〇・三〇の闘争は、全学連第十四回大会、社学同第四回大会から、六・二五、原水協大会、九・一八、国鉄学割闘争、講習会阻止闘争と続いた四カ月間の闘いの集約であり、さらに、十一月段階の安保闘争への起動を果すものとして位置ずけられていた。

闘いの集約と起動とは、第一に、全学連十四回大会、社学同四回大会がその理論的破産を宣言した、学生運動内における日和見主義諸潮流に対し、実践的破産を証明し、われわれの革命的理論を検証することであった。第二に、われわれの理論に導かれた大衆行動によって、闘争の中核たる労働者階級闘いの爆発を阻害しているものを実践的に明確にすることであった。第一の問題はここで多言を費すこともないであろう。すでに、ゴミ箱に投げ捨てられた。われわれの支部が、闘いの中心においたのは、第二の問題であった。労働者階級の闘いの前進をなによりも阻害しているのは公認の共産党であるが故に、一定の権威をもつ日本共産党の徹底的に誤れる指導方針であり、労働運動指導者の日和見主義による裏切りである。この上に立って、われわれがなによりも問題としたのは、この障害の除去が、われわれ学生の労組オルグによって、理論闘争のみによって行われるものではなく、われわれのもてる最大の物質力であり、武器である学生の圧倒的な大衆行動をこれに応える形で爆発させることによってのみ可能となるということである。われわれの革命的理論によって指導された圧倒的な大衆行動を組織すること、すなわち、われわれの課題は、これらの桎梏の除去に応えうる内容をもった大衆行動を成功させることであった。そしてその課題は果された。

昨年の警職法闘争以来の金大学生運動の混迷は、一〇・三〇の偉大な闘いを生みだす陣痛の苦しみであった。明確な政治方針のもとに、展望をもちつつ、大胆に大衆の前に問題提起を行い、大衆を組織するという指導部の原則はある時期には忘れ去られ、大衆的基盤をもたずに労組を訪問することによってのみ自己の闘いへの情熱を発散させるという時期を克服して、革命的理論でもって指導された

大衆の底知れぬエネルギーを組織し、労働者階級との強固な連帯と共闘へと前進していくという意志統一のもとに一〇・三〇は取り組まれた。自治会執行部、社学同活動家などの指導部の強固な意志統一と断乎闘う姿勢に立った緊張感は、大衆のエネルギーをくみつくしていったのである。

（三）

九・一八を不充分な形でしか闘いえなかったわれわれは、緊急の度を増々加えてくる中で、一〇・三〇の決定的な学生の闘いへの意志統一と、労働者への問題提起とによって次の準備がただちに始められた。

なかんずく、九月末の県評大会、および十月十四日～十七日の中部地区教育講習会、一〇・二〇第七次統一行動を中心にして、代々木共産党の誤れる裏切理論と、総評幹部の日和見主義理論と指導を、暴露するオルグ宣伝活動に主力が注がれた。県評大会にたいし、大部な県評方針批判と「労働者への手紙」（社青労同機関紙）が共産主義者同盟との緊密なる連絡のもとに発行され、先進的労働者に多大の反響を呼び起した。大会においては、右派からの「まきかえし」をはねつけた。闘う姿勢をもつ前執行部が再び選出され、一〇・二〇、一〇・二七への展望をもって安保闘争を一おう闘う姿勢を示した。これを受けて県評との結合のもとに、第一に、安保県民会議を闘争指令部とせよ、第二に、一〇・二〇とその後の展望をきり開く討論集会を開催することを要求し、実現した。しかし、現実には十・二〇の闘いは北陸三労評共闘の自転車行進に衣がえしてしまった。

この混迷と沈滞を打ち破る準備はその中でなされていった。県民会議の推進力としてのオルグ団の結成（六名中一名学生）、青学共闘会議結成大会を十月三十日夜とすること。そして事務局を学生が受けもつことなどと一〇・三〇への学生の盛り上りの中で、われわれの活動もジグザグのコースをたどりながらも前進した。

しかし、この県下労働者の混迷を決定的に打破するには全学連三五万の学友の闘いを背景とした金大学友の圧倒的な大衆行動への決起をまたなければならなかった。

（四）

われわれは、闘いを成功的に遂行しえた。われわれの闘いは、なによりも労働者に、現時点の中で、なにに向ってどのように行動することが重要であるかを訴えた。そして、労働者階級にとっては、生産点での断乎とした実力行使こそが、この時期にもっとも重要であり、これなくしては、安保改定を阻止するどころか、合理化、賃上げの闘いすら勝利しえないと訴えていった。

翌三十一日、五十名の労働者を結集した県民会議討論集会は、われわれの闘いがいかに原則的かつ効果的なものであったかを実証した。それは学生への称賛と労働者の闘う決意と、前衛党への不信に満ち満ちていた。

第一に、労働者の闘いの敵が、日本独占資本であることが明確にされ、第二に、労働者階級の実力政治闘争の必要かつ重大性が再確認され指導部の強固な闘いへの姿勢こそが、現時点における労働者大衆を起ち上らせるのだという意志の一致がかちとられた。第三に、仮装行列等のカンパニアとして予定されていた一一・一三が一

一・二七ゼネストへの総決起の突破口として位置ずけられた。(事実一一・一三は県下一万五千を大動員する闘いとなった。)

第四は、一一・二七をストライキ闘争とするべく具体的方針が決定された。さらに画期的なことは、これほどの学生の断乎とした圧倒的な大衆闘争がどのように組織されていったのか、という素朴な組合活動家の中から、その教訓をくみとらねばならないという要求がわき上り、八中委以降、われわれ全学連――学生戦線だけが輝ける、しかし苦難な闘いの中でつねに死守してきた大衆闘争の原則が石川県下の先進的労働者の中へ、闘いの尊い教訓として吸収されていきつつあることである。

〃学生の闘いを孤立させるな！〃（北鉄幹部）

〃学生の闘いの教訓を学べ〃（一代々木共産党員）

この声は一〇・三〇学年の闘いが、いかに労働者にいかに大きな衝撃を与えたかを示しているではないか。ついに学生運動は、県下の労働者を中心とする闘いの中で、確固とした市民権を確立した。十一月十三日の県下労働者の決起大会を前にした県民会議、青学共闘会議共催の戦術会議は、十三日を県下一万五千の労働者の大集会デモとして成功させ、安保闘争を独自の政治闘争として闘っていくことという画期的な方針を決定せしめた。一方青学共闘会議においては、十一月二十七日全国政治ゼネストを呼びかける「労働者青年学生へのアピール」を採択し、県下労働青年へ配布した。「青学共闘ニュース」も、われわれのイニシャティブのもとにつぎつぎと発刊されている。こうして現在、県民会議を中心にして連日の街頭演説（早朝出勤時を狙って）、オルグ団による各労組オルグ、青学共闘会議を中心にした労組青年部との戦術会議などと二十七日に向けて前進している。しかし、ここでも総評および労組中央幹部の裏切りが行われようとしている。二十七日の闘いを敵が調印時期をのばしたことによって、十二月十日にのばそうとする方針がそれである。北陸鉄道はすでに一カ月前から協約闘争の盛り上りの中で二十七日、二時間の時限ストを決定している。しかし、私鉄総連中央は、時間外職場集会に切りかえ、協約闘争の統一的闘いを放棄するとともに、闘う組合の孤立化をうながしている。しかし北鉄は必ずや二十七日には断乎闘うであろう。国税石川地方本部も、中央の指令を返上して時間内二時間の大会を断乎闘いとる姿勢をくずしていない。十一月二十七日の闘いをのばすことを、すべて大衆の責任者として、総評幹部に追従し、これを弁護することによって階級闘争に害毒を流す代々木共産党本部との徹底的な論争と、これを実践的に打破する闘いが再び緊急な問題としてわれわれに提起されてきた。闘う姿勢をくずさぬ石川県評の方針を支持しつつ、再び学生の圧倒的な大衆行動が要求されているのである。

世界政治

ロケットは社会主義をもたらすか

軍縮提案とブルジョアとの共存

「平和の強化」とプロレタリアート

A

〃ソ連、社会主義諸国、および世界の平和勢力の努力によって、最近、国際情勢にいちじるしい改善が認められたのは喜ばしい〃。十月三十一日、フルシチョフソ連首相は「国際情勢とソ連外交」に関するソ連最高会議への報告演説を、かかる言葉で始めた。

今年三月のマクミラン英首相のソ連「親善訪問」をきっかけに、九月のフルシチョフ訪米による「東西両陣営を代表する米ソ二大強国」首脳の緊張緩和への努力、九月十八日の国連総会におけるソ連政府の「完全軍縮提案」さらには来春に予定されるフルシチョフ、ド・ゴール会談、東西首脳会談、五～六月ごろのアイゼンハワー米大統頭の訪ソなど、一連の西ヨーロッパ、アメリカ帝国主義者との「平和の取引き」、あるいは、九月の月ロケット、十月の宇宙ステーション打上げ成功に見られる、ソ連の、軍事、科学技術の優位はフルシチョフによれば、〃西ヨーロッパ側においても、国際情勢をまじめに評価しようとする動きがあり、戦後の力の相対関係を合理的に理解しはじめている〃（最高会議の報告）ことの現れなのである。

〃こうした情勢の変化の主な原因は、ソ連を始めとする社会主義国の力が増大し、その国際影響力が増大した点にあり、その他、国際情勢に大きな影響力を与えているものに植民地主義を脱した国ぐに、および、平和の維持を要求する他の国ぐにがある〃のであって、〃いまや、平和共存に関するレーニンの思想の賢明さを、あらゆる国ぐにの人々が理解するようになり〃このことは〃われわれ（ソ連）が社会制度の異る国ぐにとの共存というレーニンの命題から出発し、地球上の恒久平和のために全力をつくしてきた、第二十回党大会以降の路線の正しさの検証である〃（同上）

「共産主義者」フルシチョフは、彼の動向をめぐって、ジャーナリズムにもてはやされた九月、十月の国際情勢の特徴点を以上のように位置づけた。

「良心的」ブルジョアジーから、プチブルジョアジー、社会民主主義者、「共産主義者」おそらく、地球上の公認されているあらゆる「進歩的」思想が、フルシチョフの動向に焦点を合せて、「平和のムード」によいしいれていた、ここ二、三カ月の状況を、彼は、以上のような自信で合理化した。

そして、今後、引き続き行なわれる「共産主義者」フルシチョフと帝国主義者との平和の取引が、プチブル平和主義者、「社会主義者」の熱狂の中に、受けとめられている事態を、あたかも、ブルジョアジーの首でも取ったような錯覚に置き代えて、各国に配したエピゴーネン＜共産党＞の側面援助を受けつつフルチョフは、さらに一層精力的に、「平和共存外交」を推進しようとしている。

フルシチョフは続ける。〃社会制度の異る

国ぐにが、平和的に共存しようとするためには、相互の譲歩が必要となる。ことなった社会制度を認め、各国が独自にその問題を解決する権利を認め、相手の主権を尊重し、内政不干渉の原則を認め、交渉によって問題の解決をはかる。――これが、合理的基礎の上にたつ、平和共存の姿である。〃……〃最近私がド・ゴール仏大統領を訪問することについて決定を見たが、この会見も、対仏関係の改善と全体平和の強化にとってきわめて有益であると考える。ソ連、仏両国間には、一部の問題で現状の解釈に関して異るものがあるがこの相違は根本的なものではなく、のぞきうるものである。……民族自決権にもとずき、国民投票によりアルジェリア問題を解決しようとしたドブレ首相の最近の提案はアルジェリア問題の調整に主要な役割を果すであろう……アリジェリア問題の平和的解決は、フランスの国際的権威と大国としての役割を演ずるものとなるであろう。〃（同上）さらに軍縮の合理的推進、首脳会談の早期開催、「大国」である中国の国連加盟などを粘り強く主張し、〃この期間に達成された緊張緩和を固定し、この緩和を強固な平和に転ずべく、ソ連政府は行動するであろう〃ことをのべて「共産主義者」としての当面の任務を明らかにした。

かかる「国際情勢とソ連外交の任務」は、出席した全代議員によって万雷の拍手のもとに確認され、さらに、全世界の共産党にも、無条件にうけ入れられて、現今の世界階級闘争が、「平和の強化」というバラ色の幻想に覆いつくされて推移しているとの印象をプロレタリアートに与えているのである。

B

しかしながら、現実に生起する事態は、フルシチョフと帝国主義者との話合い、あるいは、ソ連の経済的、軍事的、技術的進歩によって、非和解的な階級闘争の論理が、プロレタリアートに有利に導かれているとするオトギ話とは逆に、ブルジョアジーの支配強化に彩られて進行している。

一昨年、昨年と後進国を襲った植民地革命の嵐、アルジェリア解放闘争に端を発したフランスの階級闘争の激化そのいづれもが、プロレタリアート指導部の没階級的、日和見戦術のために、ブルジョアジーのヘゲモニーによって大過なく政治的安定へと、闘いは終熄させられていった。

フランスにおいて、中東、東南アジアにおいて、まさにそれに勝利することなしには、いかなる勝利の道も存在しない階級闘争において、プロレタリアートは指導部の裏切りによってドゴールの登場を許し、後進国ブルジョアジーのあらたな政治支配を許したのであった。（理論戦線No.2・3参照）

激化せる、当面の階級闘争に、一応の勝利をえたブルジョアジーは、当然のことながら腐敗、堕落せる生命の発展の道を探し求めている。

本年初頭来の一見、もの静かに見える国際情勢の中にも、資本制生産様式の生み出す、すべての罪悪を拡大再生産しつつ、階級支配の野望を貫徹するブルジョアジーの努力を見ることができる。

すなわち、プロレタリアートへの徹底的な弾圧と搾取を通じて、飽くなき利潤追求に明け暮れるブルジョアジーどもは、昨年暮の西ヨーロッパブルジョアジーの新たな発展〈欧州共同市場発足に端的に見られる〉が呼び起した各国資本の血みどろの闘いに勝ちぬくべき道を、いま真剣になって模索しているのだ。

昨年末の西ヨーロッパの通貨交換性の回復は、彼らの資本が、アメリカ資本に並びうる

生産技術を導入したことによって、彼らをして、通貨や、貿易上の諸制限を投げすてさせ実力に上る各国資本の闘いが本格化したことを示すものであった。

いいかえれば、第二次世界大戦でドイツ、イギリス、フランスなどのブルジョアジーが大打撃をうけている中で、ブルジョア世界の王者として君臨していたアメリカ、ブルジョアジー――今なお、圧倒的な地位を保っているとはいえ――の相対的な地位の低下による世界資本主義の新たな「力の均衡」が争われる段階の到来を意味するものであった。

このような、世界市場での各国資本の闘いの白熱化は、各国ブルジョアジーをして、一層のプロレタリート人民への圧制と同時に、生産設備新鋭化の競争を不可避要請としつつ実力による勝敗の決着がつくまで〈プロレタリアートの勝利がないならば〉つき進まざるをえない。

いかに美くしい言葉で粧われようとも、資本の鉄の論理は、言葉によっては曲げることはできない。

かかる、世界資本の闘いの新しい局面を迎えて「資本の人格的表現者」たるブルジョアジーは、政治的には、今までの、アメリカの天皇的地位による「西側陣営」の結束を乱しつつ「社会主義圏」との取引きによって、自己の政治的、経済的なヘゲモニーの強化を策しているのである。

一方において、一国において共産主義を建設するという、マルクス主義とはエンのないオトギ話で、「社会主義建設七カ年計画」を急ぐ「東陣営」の貿易拡大の要請と奇妙に結びついて、現在の帝国主義者の再編成課程が「平和裡に」進行しているのだ。

西欧ブルジョアジーの階級的利益の追求とソ連官僚制度の自己保存という公認「共産主義者」の没階級的政策の結びつきによって、あげてプレイタリアートの血の犠牲の上に、「平和の強化」は語られているのである。

階級闘争が、いかなる空想も排して、それ自身の論理を貫徹する以上「帝国主義者と話し合っても」「ロケットを打上げて見ても」そのことによって、資本の運動を曲げることはできないし、ましてやプロレタリアートの「赤化」をもたらすことのできないのは当然の話だ。

真の社会主義者にあっては、「社会主義の前進」、「平和の強化」とは、現実に生起する階級闘争に、プロレタリアートが勝ちぬくということであり、決してそれ以外の意味を有するものでは、ないはずだ。「共産主義者」フルシチョフは、アメリカ、西ヨーロッパにおいて、東南アジア、中東において、階級闘争がすべて、ブルジョアジーの一方的な攻勢に終止している、本年初頭来の情況の、どこを、どのようにほじくって、〃いちじるしい平和の強化〃がもたらされたと言うのか。

ましてや、ド・ゴールが、アルジェリア人民への支配強化の一貫として〈今までの徹底的な軍事作戦の一定の成果の上に〉、今度は民主的カムフラージュをこらした「新提案」のアメを提出したのに対し、いち早く、「共産主義者」の名のもとに、ド・ゴール支持をうちだすにいたっては、いうべき言葉もない。

生々しい階級闘争の現実から、プロレタリアート、被搾取者の闘いを捨象して、語られる、「社会主義の勝利」「平和の強化」は、まったき空語であり、かかる空語が、階級闘争でのプロレタリアートの勝利を、意識的、主体的にもち来たすべき「共産主義者」によって語られる時、それは、プロレタリアートの闘いに対する強力な「阿片剤」の効果として現われ、反階級的行為として、決起せるプ

ロレタリアートの前に、血の返礼を受けなければならない性質のものなのだ。

軍縮案は世界に平和をもたらすのか

公認社会主義者達は、かかる批判に答えて自己の没階級的理論を発展させて、「フルシチョフ訪米が、あるいは、ソ連の軍縮案がいかに多くの『平和を愛する人々』に歓迎されまた戦争挑発者を動揺させているかという事実（？）にこそ、現代の世界の階級闘争の問題があるのであり、社会主義学生同盟の見解は、プチブル的なアセリである」として、平然としている。

彼らのいい分をきいてみよう。

〃現在、世界の人民は恐るべき核兵器の発展によって「皆殺し戦争か、平和共存か」の岐路に立たされている。これ以外の問題の立て方は絶対にない〃そして、〃第二次大戦後の社会主義の世界体制としての確立、強化は、帝国主義者をして平和共存に向わざるをえない情況を作りだし、今回のソ連軍縮案にも、真剣に耳を傾けざるをえないような、根本的な世界情勢の変化をもたらしているのである。〃

たとえば、〃ハーター米国務長官も「夢のような案」だといいながら、「フルシチョフ首相の演説は、広範な人びとの気持を表したものであり、軍備全廃案については真剣な討論が必要だ」とのべ、西独のシュトラウス国防相までが「フルシチョフ首相が提案者だということを忘れてはならない」とことわりつつ「この案はすぐれた案だ。詳しく研究すべきである」といはざるをえなかったのである〃。（前衛十一月号）

〃国連政治委員会も三週間にわたってこれを審議、日程の関係でこれを打切ったが、七十余カ国の代表が発言して熱意にみちた討論を展開した。そして、英国案その他の意見を合わせて、これを来春早々開かれる東西五カ国ずつの代表からなる新軍縮委員会の議題にさせようという決議案を米ソ両国が出し、八十二カ国の全国連加盟国がこれを共同決議案として採決した。……まさに歴史的な出来事である。〃（アカハタ十一月十七日、一九五九）

プロレタリアートの血と汗を吸いつくすことによって、生き甲斐を見出しているブルジョアジーが、プロレタリアートの歓心を買おうとして、頭を集めている姿に狂喜している、「共産主義者」。ブルジョアジーの平和のポーズに一杯一憂している「共産主義者」、彼らは自分たちの無能さの故にいままで資本主義が、腐敗、堕落せる生命を生きのび、まさにその故にこそ、現在の核兵器製造、軍備競走があるのだという社会主義者として当然の反省をまったく忘れて「平和か戦争か」という、一般的、抽象的なプチブル平和主義的な戦略に、ブルジョア社会の止揚か、否かという戦略課題は「トロツキスト的」だとして排除して！〃すべてを解消している。

フルシチョフの言動が、階級闘争の勝利的課題に、いかに位置づけられるのかという問題は、一切捨象されて、混とんとした平和の幻想をどのようにして追い求めていくかという茶番劇の主人公の役目を演じている。

ソ連最高会議でのフルシチョフの自信、世界の共産党の熱狂とブルジョアジーの動揺をもたらした「軍縮案」とはいかなるものか。

〃アメリカの国内事情の複雑さにもかかわらず、彼（アイゼンハワー大統領）は、自国民（アメリカ、プロレタリアート？）の絶対的信頼をえている人間として、われわれ両国首脳の交換訪問を提案してきた。われわれはこの平和の事業を強化するために行なわれた

重要な発意の功績を認めるものである。〃……親愛なる同志諸君！ 私は、われわれが相互訪問に関するアイゼンハウアー大統領との事前協定の一部を実行し……そこで重要な諸会見や、談話を行った。〃（フルシチョフ帰国演説）、かような重要な諸会見や諸談話の象徴的な表現として九月十八日の国連総会でのフルシチョフ「軍縮提案」がなされたのであった。

フルシチョフ「軍縮提案」は大きく分けて二つから成立っている。

第一は、世界の軍備を四年間に三段階に分けて全廃する構想であり、

第二は、それができない場合の部分的な軍縮案で、これまでのソ連の主張をくり返した

(1) 西欧に軍縮管理地帯の設置、
(2) 中欧非核武装地帯の設置、
(3) 欧州からの外国軍隊の撤退と、基地撤廃、(4) ＮＡＴＯとワルシャワ条約国との間の不可侵協定 (5)奇襲防止協定、(6) 核実験の即時、無期限の中止、という六項目から成立っている。

さらに重要なことは〃全般的で、完全な軍縮の実現によって、莫大な資金が、学校、病院、住宅、道路の建設に向けられ……税金や物価は大巾に下がり、いく百万の市民に歓迎されよう。完全な軍縮案はまたアジア、アフリカ、ラテンアメリカの経済発展に、実際の新時代を切り拓き……

また、アメリカ、イギリス、西独、仏など高度に発展した工業国にあっては、結局においては、他の国ぐにから大きな注文をうけることになろう。

だから、軍縮は、資本主義の高度に発展した工業国に危機や、経済的衰退を生むという主張は誤っている〃（国連での演説）

ああ栄えある「共産主義者」フルシチョフよ！ 貴殿のマルクス、レーニン主義はいつバートランド、ラッセル卿のイデオロギーと結婚したのか。

「核兵器競争、軍備拡充は、資本制生産様式の生みだす必然的な帰着なのではない！」

「資本のクビキの中にうちこまれている、賃金奴隷の解放によって、はじめて恒久平和の現実的土台を見出すという見方は誤っている！」

良心的ブルジョアジー、プチブル平和主義者ならずとも、たしかにこの「軍備撤廃提案」は、エポックメーキングな事件であった。

飽くなきブルジョアジーのプロレタリアートに対する資本攻勢、反動攻勢をマヒさせ、彼らの階級意識の覚醒を抑えつける点において、プチブル的な平和の幻想を固定化させ、強化させて、ブルジョアジーの階級支配の維持強化に協力する点においてエポックメーキングな提案であった。

戦後、いくつかのプロレタリアートの革命的高揚を、公然と共産党の名において平和的に解決し、ブルジョアジーの「力の増大」によってえられた「平和の強化」を、さらに一層追求する目的をもって――戦後の世界共産党の裏切りの総決算として――「軍縮提案」はなされたものにほかならない。

ボルシェヴィキと「軍縮撤廃」

それは、直接的には、〃私たちは、全世界の人民大衆の幸福を考え、すべての国民の明るい未来をめざして呼びかけます。

男女の皆さん、労働者農民の皆さん、学者芸術家の皆さん、まごころから、じぶんの祖国を愛する皆さん、ことなる社会制度の平和共存の政策、諸国民の巾広い経済交流、文化の交流の政策を支持しましょう〃と、一九五七年、六十四ケ国の共産党代表によってロシア革命四十周年の日に、モスコーで発表され

た、いわゆる〝平和のよびかけ〟なる現在の公認共産党の段階級的なイデイオロギーの直接的表現なのである。

〝軍縮、平和共存のイデイオロギーは、レーニンのボルシエヴィズムのエッセンスであり、ブルジョア社会の政治家の中には、われわれの平和共存的立場を非難して戦術というものがある。しかし、これはマルクス、レーニン主義の本質をゆがめるものに他ならない〟（最高会議での演説）云々のフルシチョフの必死の抗弁にもかかわらず、レーニンおよび十月革命のボルシエヴィキたちは、かつて一度も、このような態度を許したことはなかった。

十月革命を指導したボルシエビィキたちは、あらゆる種類の平和主義的幻想――国際連盟、集団的安全保障、軍備縮少など――に対して、ブルジョア支配の幻影をプロレタリアートに植えつけるものとして一切容赦することはなかった。

一九一九年の党大会で、採択された、レーニンの筆になる有名なボルシエビィキ党綱領には、この問題に対する明白な解答がある。

〝プロレタリアートの攻勢がたかまり、とくに、二、三の国ぐにのプロレタリアートの勝利は、搾取者どもの抵抗を強めている。このことは同時に資本家の国際的連合の新しい諸形態（国際連盟等）が作り出されることになったが、これは、地球上のあらゆる民族の計画的な搾取を全世界的規模で組織することを目的とするものであって、さしあたってはまず、万国のプロレタリアートの革命運動を直接に弾圧するために協力している。

これらすべての結果として、個々の国におこった内乱は、必然的に、プロレタリア諸国家の行う革命的防衛戦争に、そしてさらに帝国主義的強国の軛に反抗する被圧迫民族の革命戦争に融合している。こういう事情のもとでは、平和主義とか、資本主義のもとでの国際的軍備撤廃とか、仲裁々判とか、それ他これに似たスローガンは、ただ単に反動的ユートピアであるばかりでなく、また、プロレタリアートに対する直接の欺瞞であって、プロレタリアートの武装を解除し、そして搾取者からの武装解除という任務から、彼らをそらすことを目的とするにすぎない〟（レーニン全集一九巻）

フルシチョフ、ならびに彼のエピゴーネンはまた、必死になって抗弁するに違いない。「世界情勢は、レーニンの時代とは根本的に変化している。平和勢力は飛躍的に前進している。

あるいはレーニン主義のエッセンスは、その革命性にあるのではなく、一九一九年のブレスト、リトウエスクの講和の是非をめぐってブハーリン一派の左翼に対して彼がのべた〝権力を取ったボルシエビイキは柔軟な戦術を取るべきだと語った言葉にある。〟（外交演説、同右）。そして、〝産業資本家の皆さん〟に平和のよびかけを行う（平和宣言）だけではなくアメリカ、西独、仏、英の実業家の皆さんとも、貿易を拡大することによって――世界平和は国際貿易からという問題の出し方に同意して――平和共存を不動のものにすることにある〟（アメリカ実業家へのフルシチョフの演説）と。

たしかに世界情報はレーニンの時代とは根本的に変った。

社会主義圏は地球の三分の一を覆い、資本主義は、国家独占資本主義へと転身することによって、ともに、新たな腐敗の道をさがし求めている。

変ったのは世界情勢だけではない。

なによりも問題なのは社会主義の思想の変貌だ。

一九二四年来、スターリン支配につちかわれた、「ソビエト社会主義」の歪曲、堕落と軌を一にして行なわれた、社会主義思想の、ボルシエビイズムとは、縁のないまでの変り方だ。

「外交は、どこの国でも、いつの時代でも内政の延長である。なぜなら、外交もまた、同じ支配階級によって指導され、同じ歴史的目標を追求するから〟」といわれるように、世界情勢の根本的変化の問題点は、社会主義者にあっては、ソビエト「社会主義」の変貌にある。〈制度的にも堅いブルジョア的官僚制度、分配の不平等、価値関係の残存が、社会主義の理念であるとする、定式化〉

現在の「平和共存」外交は、まさしく、ソビエト「社会主義」の堕落という、物質的基盤を背景として、追及されているものにほかならない。

スターリン、フルシチョフの帝国主義者とのかけ引きによる、現状維持の外交政策の典拠とされる一九一九年のブレスト、リトウエスク講和の是非をめぐって展開された、ボルシエビイキ党内闘争は、後の「鬼子たち」（スターリン、フルシチョフ）の志とはまったく違って、疲労、困憊したロシアプロレタリアートが、全世界解放の観点からブルジョアジーとの「屈辱的な妥協」を、なすべきかどうかという問題であった。（「左翼小児病」についてなど）

なればこそ、この条約に棄権という手段をもって、ドイツブルジョアジーに加担した当時のドイツ社会民主党は、「裏切り者」としてボルシエビイキの激しい批難の矢面に立たされなければならなかった。

よし万歩ゆずって、現在の「平和共存外交」が、「ブルジョアジーの圧倒的優位のうちになさなければならない屈辱的な妥協だとしても、アルジェリア政策に関してド・ゴール支持を表明したフランス共産党（十一月三日、中央委員会）「平和の友」アイゼンハウァー大統領をたたえるアメリカ共産党、中立をヒステリックに語る日本共産党を強烈にとらえている思想は、社会主義の思想からはとうてい理解できるものではない。

おそらく十月革命のボルシエビイキたちには予想もできなかったであろう「共産主義者」による「平和共存外交」の推進は、さきに触れたように、一九二四年秋に発表された一国社会主義理論の固定化による、ソビエト外交を国際革命の舞台から解放しようとするスターリンの努力に由来するものである。

それは、一九二三年のドイツ革命の失敗を機に、ボルシエビイキたちの期待を裏切ってヨーロッパ革命の嵐が、資本主義の相対的安定をもたらし、ロシア、プロレタリアートが孤立をよぎなくされ、スターリンによる「インチキ社会主義」の建設がなされる中で、歴史に登場してきたものである。

同時に、ソ連の政策を無条件に支持することが「共産主義者」の第一義的任務という神話のもとにプロレタリア世界解放のために、世界各国に配された「共産党」は、まったく、スターリンの現状維持政策の翼賛者としての機能に転落し、ソ連官僚制擁護のための、道具となった。

このような事態の進行の中で、一九二七年リトブイノフ提案といわれる「軍縮案」が国際連盟事務局に提出された。

*今回の軍縮案の前身といわれるリトヴノフ案にあっても、客観情勢の推移、その政策、そしてプロレタリア解放を阻害する点にいたるまで――本質的に同様のものであった。

すなわち、第一次世界大戦の終りとともに、ロシア、プロレタリアートの決起を中心として起った、革命の嵐を切りぬけた、ブル

ジョアジーは戦禍を癒しつつ、新たな利潤を目差して、死闘をつづけていた。

一九二三―五年の欧州安全保障（ロカルノ条約など）一九二六年のジュネーブ軍縮準備委員会、ジュネーブ軍縮会議（一九二七）ロンドン軍縮会議（一・九三〇）などなどと、大衆の反戦気分に、たくみに迎合しながら、他のブルジョアジーの索制をなしつつ、第二次大戦を準備していた。

かかる事態の中に、リトヴィノフ提案は投ぜられた。大衆の「平和のムード」に「積極的に迎合し」、かつそれ以上のなにものでもないものとして〈プロレタリアートのブルジョアジーに対する血みどろの闘いを組織しえなかった〉以前の提案もなされた。

このような、「平和外交」は、ブルジョアジーの力の増大とともに、国際連盟への加盟〈衆知のように、ボルシエビイキは、これを盗賊どもの団体と心得ていた〉ドイツ・ファッシズムとの不可侵協定などと発展し、第二次世界大戦の勃発を許すことになった。

〃三十年前、帝国主義者は、ソ連の同様な案を「夢」だとしりぞけることができた。ソ連の力が弱かったから〃（アカハタ五九年十一月十七日）という一意的、超客観主義的な、歴史家のような総括は社会主義者には通用しない。

広汎な大衆の反戦気分によってだされた、「軍縮案」がなぜに、軍備を撤廃できなかったどころか、第二次大戦を招いたのか（？）という総括が必要なのだ。

〃ソ連が弱かった〃（！）からではすまされない。〃プロレタリアートの支持をうることができなかった〃といいなおす必要がある。

なぜか！　答えはレーニンのプロレタリア綱領の中にある！

かかる事情は、戦後のソ連外交政策においても一貫している。

一九四六年、第一回、国連総会の「原子兵器並びに全般的軍縮案」から、今回の「軍縮案」にいたるまで一貫している。

「一貫して、平和政策」の笛をふきつつ一向に平和の事態を現出できない「共産主義者」による平和政策の問題は、すでに何回ものべたように、現実の階級闘争をどのようにしてプロレタリアートに有利に展開していくのかという問題と無媒介的に追求されている点にある。

すなわち、プロレタリアートの政治的、経済的闘いと無関係に存在する平和外交は、反革命的行為なのである。

「戦争か平和か」いう一般的な問題設定の上に成立する、「平和共存外交」は、断じて社会主義者の外交政策ではない。

その上に語られる、プロレタリアートの闘いを捨象した、軍備撤廃なる、超階級的オトギ話は、同様に社会主義者にとっては無縁のイディオロギーである。

社会主義者にあっては、高度な科学技術の発展のもたらす、悲惨な帝国主義戦争の結果を阻止する道は、まさに、帝国主義に対するプロレタリアートの非妥協的な闘いをおいてはない。ブルジョアジーの武装解除は、いまではロシアプロレタリアートの運命をかけても世界革命を遂行する決意を完全に失ってしまい世界革命の基地ではなくなった、ソ連の力の増大によってではなく、世界プロレタリアートの独自の力による世界革命によってのみ、なしうるものなのだ。（H）

右傾化への再編成

――社会党の分裂・左派の無力・全労の抬頭――

大瀬振

一、分裂の異った様相と異った内容

「日本社会党は大分裂した。中央から地方組織その末端にいたるまでの全組織にわたって、文字どおり大衆的に分裂してしまった。

わが党の基本線を死守する大衆的威力が大衆的分裂の契機をつくらしめ、平和への裏切り者たちを党外に放逐し、大衆的処断の機会をたたかいとらしめたというべきではないか。

いまこそ、内部抗争に費した全エネルギーを正面の敵にむけて駆使することができ、いまこそ、大衆の中へ大衆とともに闘う社会党として、社会主義政策をうちださしめることができるだろう。

対日講和をめぐって恐るべき反動期を描きつつある今日、わが党の純潔をささえてくれたものは、即ち反動の下に頭をもたげつつある大衆的反抗であり、反動期の底に激流となって流れはじめている大衆の間の大進出であった。それ故に内外の支配階級に向って容赦なき挑戦を構え、大衆闘争の先陣を切ろうとするわが党は、この大衆の大進出に信頼して、堂々たる正攻法をもってあくまで大衆闘争の路線の上に立つことである。

新らたなる決意と戦略方針は、実に大進出時代における正攻法をつらぬくことから生れるであろう。これはゴールの白線にいたるまではつきるところがないであろう。（一九五一年十月、社会党中央機関紙『社会新聞』社説「大衆の中へ、大衆と共に」）

「第十六回大会は終った。西尾派は新党結成のコースを明らかにしたが、これは党の分裂ではない。党の統一は守られたのであり、西尾派は脱落したのである。……苦難なたたかいにたえることができない少数の諸君が、戦線から脱落し安保改定と憲法改悪を企図する支配権力の軍門に下ったのである。……

脱党派は党が総評に引きづられ、階級政党であり、議会否認であ

り、容共外交だと非難しているが、いずれもいれられないことである。……これらは国民を迷わすところの、ためにする逆宣伝にすぎない……。

脱党派の新党は、マスコミのやっきの宣伝にもかかわらず、結局のところ一握りのグループ以上に発展しないであろう。われわれは西尾新党そのものの将来についてはこのようにみるが、それよりも当面警戒しなければならないのは、労働運動における混乱である。新党運動を併行して、第二組合のうごきが各方面に活潑化してくることであり、この防止のために全力をつくさなければならない。」

（一九五九年十月二十五日、社会党中央機関紙、『社会新報』主張「権力の軍門に下った西尾新党」）

日本社会党は八年間の間隔をおいて再度大分裂した。だがなんという違いだろう。たしかに五一年の分裂は「文字通り大衆的に分裂化し、左右の比率は大会代議員にして一九三左一六一（右）、議員で一六（左）三〇（右）であった。左派は議員数では圧倒的少数派であった。これに対し、五九年はまったく逆であり、社会クラブを構成したのは三三名（二四九名中）にすぎず分裂ではない脱落であるようにみえる。だが少数派として残った五一年の社会党は激しい闘志をもってみずからの決意と未来を語ったのに対して、圧倒的多数派として分裂主義者を放逐したはずの五九年の社会党は、脱落派の誹謗に対する愚にもつかぬいいわけに終始したばかりか、あまつさえ第二組合による労働運動の混乱に深刻な危惧を表明しなければならなかったのである。

ここに、五一年の分裂と五九年の分裂の決定的な差異があるのだ。この日本労働運動の主導権を握っている労働者党の分裂の様相の変化は、八年の間に生じた日本資本主義の変化、その上での階級闘争の展開と挫折、これにもとずく労働運動指導部の再編成の全日本をゆるがす巨大な胎動の最初の表れであり、氷山の一角であるに違いない。

われわれは、単なる評論家ではなく、階級闘争の生きた現実の科学的解明によってわれわれの闘いの実践的方向を確立する社会主義者であるかぎり、われわれの分析を、日本の社会党はよく外交問題をめぐって分裂するといったところに止めてはならないのである。

たしかに、五一年の大分裂も今年の分裂も外交問題、しかも安保条約をめぐっておこった。五一年の分裂は、サ条約安保条約の両条約絶対反対の態度をとった左派が、中央執行委員会を占め、十月の臨時大会においても多数を握ろうとした時、安保には反対だがサ条約には賛成することを主張した右派は、棍棒をもった暴力団数十名を会場に乱入させて大会を流会させることによって直接にはもたらされた。八年後の今日、西尾派に対する攻撃と分裂は同様に安保の改定に対する闘争方針の対立を直接の契機にしている。

だが、五一年と五九年を決定的に区別するものは、分裂の数の比率とはうらはらに、五一年のそれが両条約反対闘争の大衆的展開を背景にした左派のヘゲモニーによってひきおこされたものであったのに対し、今年のそれは、みずから「民同支配の限界」を口にする左派に対して第二組合全労の伸長を基礎にし自信を深めている右派によってイニシアティブをとられたことである。

いかにも九月大会における西尾派攻撃は、向坂を中心とする「社会党を強化する会」や社会党青年部によって組織されて開始された。十月再開大会においても、「譴責処分」という無内容な統制委員会の決定に反抗して除名を要求したのは、左派六派であり、青年部であった。だが、こうした右派攻撃に対して終始一貫徹底的に日和見的態度をとり調停者として活動したのが主流派であり、後には労働組合幹部であったし、これに対しこの攻撃をうけて立ち最後には譴責処分の恥辱に甘んずるべからずと、大会への主席を拒否して新党樹立を宣言したのは右派西尾派であった。西尾派は二年前から分裂の準備を開始していたといわれ、そのために西尾の無罪判決をまちつつ地方組織の確立と政治資金、確保の準備を進めていたのである。五八年の選挙における左派の伸び悩みと右派の漸増西尾派は十人ふえたは彼らの自信を固めさせ、他派に比べて数十万～百万多い月に百～二百万という資金をものにしたのである。かくして西尾派は新党旗あげの時をうかがっていた。十月大会での分裂はたしかに彼らのスケジュールよりは数カ月早かったかも知れない。だがそれはそれだけの話しで、そのほかはすべて「西尾派の筋書き通り」（東京新聞日）に進んだのである。

分裂に決するやジャーナリズムは一斉にその当然だったことを論証しようと論陣をはり、多くの社民イデオローグは歓迎の声をあげた。西尾派が正式に脱党した二十六日、蠟山政道、土屋清、関嘉彦中村菊雄らの「民主社会主義連盟」（民社連）は新党育成への協力を誓い来年一月に「民主社会主義国民会議」を結成する方針を決定した。十一月彼らのイデオロギー活動の武装として雑誌「自由」は猪木正道、林健太郎らを加えて創刊された。全労は新産別に統一を申込むなどの全労の下への労働戦線統一工作にとりかかり、六〇年度運動方針案では新党支持と組織拡大を提起した。経団連副会長植村甲午郎は分裂の日「物心両面というわけにはいくまいが、新党の発展のため精神的な援助を惜しまない」と露骨に歓迎した。

すべての準備は完了していたのだ。だからこそ、分裂の当初は最上層部での西尾派の追放、（議員団にして三十三名）にすぎないようにみえた分裂は、わずか一カ月と経たぬ間に東京、神奈川、福岡をはじめとしてすべての地方組織にいたる分裂へと拡大し、さらに労働組合をも二つに割ろうとしているのである。

二、全労の進出と民同の崩壊

だが、これは現象論にすぎない。社会党はそれがいかに日和見主義と改良主義の党であろうとも、労働運動の展開と隔絶された存在ではありえないのであり、これを基礎とせざるえないのである。とすれば、五一年と五九年の分裂の異った様相は、労働運動そのものが新らたな転換点に立っていることを、そしてその基礎にある日本資本主義のあらたな展開を開始したことを示すものなのだ。

戦後日本の労働運動は当初から社会民主々義者の指導権の下におかれたのでは決してなかった。敗戦後数カ月間に零から一挙に数百万にまで組織された日本の労働運動に、共産党の独裁的指導下にある産別会議は完全なヘゲモニーを確立していた。だが、米軍に対する解放軍規定と平和革命という没階級的改良主義的戦略と根深い経済主義とその裏返しとしての政治主義に毒されていた共産党は空前の昂揚と吉田内閣崩壊の政治危機まで作りだした二・一ストを革命的に指導することに失敗して以来、その色濃いセクト主義をつかれて急速に指導権を失っていった。

敗戦によって解体の危機に瀕した再生産機構をアメリカ資本と国家資金の大量的投入によって再建することに成功した日本資本主義は四九年からドッジ・ラインによって世界市場と結びつけられここ、での競争戦に耐えうる競争力の強化を要求され、第一次の合理化政策を遂行しようとし労働者に対する激しい資本攻勢を加えてきた。四九年の国鉄、全逓を中心とする百万の首切りと五〇年のレッド・パージに対する闘いは戦後最初の壮大な決戦であった。決戦に際して産別は確固とした闘争方針を提起しえなかった。のみならず共産党は、ストライキ闘争を「挑発だ」とののしり、産業防衛闘争と地域人民闘争を強要した。こうした中で、四七年の二・一スト敗北以来、組合の民主化を唯一つのスローガンとして来た民同は、レッド・パージにのって機関をクーデター的にのっとったのである。

戦後日本資本主義再興の最初の屈折曲点で闘われた決戦で、資本家とグルになってもっとも戦闘的幹部を追放することに成功した社会民主々義者ははじめて労働運動における自己の指導権を確立した。すべては「民主化」の名の下に。産別は潰滅した。五〇年七月国際自由労連との密接な連絡の下に産別会議に対する第二組合としての総評は結成された。民同はここで幹部を独占した。

日本における社会民主々義者の労働運動指導権の掌握はこうして実現したのである。

だがこれですべてではない。民同幹部は、資本家と結んで機関をのっとることには成功したが労働者大衆を掌握してはいなかった。いかなる欺瞞的方策をとろうとも、大衆的支持をもちえることなしには彼らは椅子を維持することはできないのである。

ここに第二組合としての総評の「にわとりからあひる」への転化と、日本の社会民主々義者の特殊な性格がゆくり出されるのである。

五〇年七月に結成された総評は、その年のレッド・パージ反対闘争を放棄し、五一年のメーデーを「共産党の挑発にのるな」という口実の下にサボることによってその本領を発揮しようとした。だがメーデー放棄は即座に労働者の激しい攻撃をうけざるをえなかった。狼狽した総評幹部は労働者の憤激をしずめるために五月三日の憲法記念式典に彼らだけ三十数名でおしかけてデモをやり一人残らずニコニコしながら逮捕されすぐ釈放されるという醜態をすら演じたのである。

こうしたなかに九月八日サ条約、安保条約の両条約は調印された。ドッジ・ラインの実施以後世界市場との結合を回復し、国家資金とアメリカの対日援助による国家的資本蓄積方式から、竹馬の足をとり払って私的資本による正常な蓄積とそれによる競争力の強化を要求された日本資本主義は、朝鮮戦争の特需ブームの過程で急速に資本蓄積を遂行しこの課題に応えつつあった。両条約はこうして一個の帝国主義国として世界市場に登場する方向に向いつつあった日本帝国主義とアメリカ帝国主義との間のあらたな同盟関係の確認であったが、それは同時に四九年から五〇年にかけての徹底的資本攻勢の後の全面的政治攻勢の突破口でもあった。両条約の調印を批准に続いて、その年のうちに団体等規制法、集団示威取締法、ゼネ・スト禁止法、労働三法の改悪等が矢つぎばやにうちだされたのである。労働者階級は闘争への意志を固め行動に駆りだされた。九月一日に総評が行った両条約調印反対の「平和国民大会」のカンパニアは、全自動車のゼネストによる参加で様相を一変させられた総評

は反共中立主義の旗を一時下さざるをえなかった。もちろん彼らは十月〜十一月の両条約批准の決定的時期に批准反対闘争を秋闘と結合しつつ独自に組織することをまったく放棄し、すべてを反ファショ闘争カンパニアですりかえようとして批准に対する実力闘争を放棄したが、闘争は五二年へひきつがれ四度にわたる破防法反対労闘ゼネストとして爆発したのである。この戦後最初のゼネスト闘争は、反共第二組合である総評の「にわとりからあひる」への転化を完成した。

五一年の社会党の分裂はこうした階級闘争を背景にして進行したのである。「堂々たる正攻法をもってあくまで大衆闘争の路線の上に立つ」という左派の生気に満ちた闘志は五一年の分裂の内容を語っている。

だが今年は違う。分裂の背後にあるのは「大衆の大進出」ではなくて、総評の基盤を食いあらす全労の進出なのだ。圧倒的多数派であるにもかかわらず「新党運動と併行した第二組合のうごきの活潑化」に対し「この防止のために全力をつくさなければならない」と叫ばないわけにはいかないのであり、十一月末の大会に対する議案で総評と公然と組織的力量拡大の点で対抗する、というかってない意欲的な方向を全労はとっているのである。

ここにすべての問題がある。

社会党左派の基盤である総評に対する右からの脅威。これはなにによってもたらされたのか。

第一は、相次ぐ裏切りを累積した民同を先頭とする左翼の貧困と堕落によってである。現在の主流を占める民同左派は、高野派の民族主義、地域人民闘争主義（家族ぐるみ、町ぐるみ）に対して、階級闘争と産業別統一闘争を対置することによって鉄鋼・機械・化学・官公労等の近代的大産業労働者の支持をえて五五年にヘゲモニーを奪取し、高野派を中小企業小単産におしこめることに成功した。だが権力を握って以後の相次ぐ裏切り、五六年の春闘における、五七年の国鉄新潟闘争における、五八年の勤評警職法闘争における、そして五九年の春闘と鉄鋼労連の闘争における裏切りは、まず戦闘的労働者に激しい民同不信をうえつけたが、それは出口のないままに内攻して組合員大衆の組合不信にまで発展している。大衆的圧力に対してはつねに大言壮語しながら最後の段階で戦術的に闘争を回避するという彼らの常套手段は充分に知られながら公認前衛党の支持によって維持されている。闘えど闘えど敗北する、という深刻な認識は一方では民同にも共産党にも組織されない無党派活動家の輩出としてあらわれ、他方では闘っても勝てないのなら組合なんかあってもしようがないというニヒルな組合不信を生みだした。資本家どもはすかさずここに目をつけくさびを打ちこんだ。『闘ってばかりいるから要求も貫ぬけないのだ。おだやかに話し合えば解決できるのだ。労使は仇同志じゃない、相互依存なのだ』こうして労資協調主義が流しこまれ、第二組合が育成される。

民同幹部自身によって「民同指導の限界」が語られる一方、全労は生命を回復するのだ。

だが、それだけではない。社会党の分裂に象徴される労働運動指導部の再編成の動きは日本資本主義の新らたな展開という一層深いところに根をもっているのである。そうでなければ総評の全労化という敵階級のスローガンが単なるデマゴギーではない現実の物質的

根拠をもっているという事態の深刻さは決して解明されないのである。

五二年秋の炭労、電産ストの直後に「総評は経済闘争を政治闘争の手段にしている」と総評批判の共同声明を発した全繊、海員、日放労、全映演の四単産を中心に翌年春結成された民労連（民主々義労働運動連絡協議会）は、二年経た五四年四月「民主的労組の結集と「生産力向上、産業発展への建設的行動」をかかげて全労会議を結成した。だがこの第二総評は全繊二七万海員八万をのぞいては、ほとんどが少数派の第二組合（全炭鉱、全金同盟、造船総連、日駐労など）でわずか六〇万を組織しえたにすぎず、総評三〇〇万に対して一握りのストライキ破りの力しか持ちえなかった。

だがいまの全労はちがう。公共企業体労働者に対する弾圧の強化と国労の藤林斡旋案受諾を一つの転機とするこれへの屈服の中で「民同労組だけなら全労も総評も対等じゃないか。スト権のない官公労組の頭数が全労より多いだけの話しだ」という全労幹部の言葉は一層の真実性をもとうとしている。そればかりではない。十月初めの年次大会で一八六対五一で電労連一二万が全労へ一括加盟したことによって、民間産業中の最重要の基幹産業を自己の全一的支配下におきえた全労は、今や「官公労は総評へ、民間労組は全労へ」の旗をかき改め、全労の下への公共企業体労働者の別個の結集の努力を開始したのである。一九六〇年度全労運動方針案はいう。「社会党の分裂の影響は、国鉄、日教組をはじめ、官公労方面に次第に大きく現われてくるだろうし、そしてまた全労の組織活動の接触分野が開けてくる。われわれは、指向を同じくする官公労労働者との連絡を密にしつつ、官公労民主化の闘争に協力する」六月に国鉄職能連別組合、教団連（日教組第二組合）、全特定、全郵政（ともに全逓第二組合）の四組合は全官公労協準備会を発足させた。十月二三日大阪全労会議は全労系全官公結成準備会を開いた。

もちろん、これだけでは二〇〇万余の総評系官公労の前にはまったく微々たる存在でしかない。だが、こうした動きが国鉄民同右派、日教組内の独立教組、日高教らの動きを結合した時、第二官公労の誕生は現実のものとなりうるのだ。国労第五三回中央委員会のあった十月二六日の夜、国鉄新生民同は全国代表者会議を招集し「国労を割っても新党支持に踏み切るべきか否か」をめぐって激論がたたかわされているのだ。国労大阪地本、東北各地本は、完全に新生民同がヘゲモニーをとったという。

「総評の全労化」はいま音をたてて進行しようとしているのである。

三、労働運動の危機と「経営者時代」

総評を握る民同左派も全労を握る西尾派もともに社会民主々義者には違いない。では、なにかこの両者に不倶戴天の敵対、競争関係をもたらしているのか。それは彼らが基盤とした労働者層と資本主義の相違であり、現在の再編成はこの基盤の大変動の直接の反映なのだ。

敗戦から一九五〇年までの五年間は、その間にドッジ・ラインの流行による第一次企業合理化と「安定恐慌」の時代と、朝鮮戦争による特需ブームをはさみながらも、崩壊した日本資本主義の再建の過程であり、量的拡大として資本構成の高度化をともなわぬままで資本蓄積が遂行された時代であった。こうして五一年に戦前の生産力水準を回復した日本資本主義は、世界市場競争戦に耐えぬいていくために、新技術の導入、資本構成の高度化、合理化、体質改善に全努力を傾注しはじめた。

「電力事業再編成令」は五一年五月に制定された。鉄鋼の第一次合理化計画は五一年に開始された。炭鉱にはカッペ採炭法がドイツから輸入され、機械、化学工業もあらたな展開の道にふみ出したのだがにもかかわらず、五一年から五四年にかけての合理化、資本蓄積は長い戦争の間に全く磨滅し老朽化した設備の更新などを中心とした再建に止まり、五五年以降の「全面的技術革新」の地ならしとしての位置を占めたのである。

この段階で日本資本主義の基礎は決して強固ではなかった。戦後の再興を外国資本と国家資本の援助によっていわば温室の中で行った日本資本主義は、資本の有機的構成と技術水準は低く、戦後の尨大な過剰労働力によって可能となった低賃金労働によって再生産を維持し生産力水準を回復してきた。こうしたことは自己資本の蓄積が進まず他人資本への依存度が高いことなどと相俟って、景気循環への個別資本の抵抗力を弱いものにした。好況、不況にともなって労働力の吸収と反撥は絶えずくりかえされ、低賃銀労働が強制され、不況のたびに厖大な労働者が首を切られて工場から放りだされた。

これらすべてが、日本の労働者階級を不断に闘争への刺戟に駆りたてたのである。不安定なブルジョア政府は、ウルトラな政治攻撃をだしてはひっこめ、公共企業体労働者に対する弾圧は、官公労をきわめて戦闘的組合に育てあげた。四九年から五〇年にかけての第一次合理化攻勢の中で、資本家とグルになって共産党から組合の機関を奪いとった社会民主々義は、大衆の支持をかちとろうとする過程で、左翼的な戦闘的ポーズをとることを不可避にされたのである。公然と闘いを裏切った時彼らをまちかまえる運命はなにか、ということを五二年労闘ストに際しての炭労委員長武藤の例はあまりにも残酷に示していた。こうして、脆弱な日本資本主義を基盤にしたが故に、日本の左翼社会民主々義者は西欧の社会民主々義者をいちじるしく異った性格をうけとったのである。

だが、数年の準備期の後に本格的合理化を開始して、日本資本主義の様相は一変しようとしている。激化しつつある国際資本競争戦に勝ちぬくために、まったくあらたな技術体系の大胆な全面的導入がくわだてられ、新規設備投資は急カーブを描いて上昇している。ストリップ・ミル革命をはじめとする第二次、第三次合理化計画に着手した鉄鋼、石油化学工業の登場による化学工業の高度化など、重化学工業の大変貌をはじめとして、自動車、電気機械のオートメーション、量産体制の確立、合成繊維工業の天然繊維との交替、エレクトロニクス、原子力工業の登場など技術革新といわれ「第二の産業革命」といわれる日本資本主義の様相を一変させる過程が進みつつある。

このあらたな資本蓄積は、尨大な財政投融資や世銀借款等の長期低利資金の投入によって国家に全面的に援助されている。そればかりでなく、国家は企業危険や利潤率の低さなどで私的資本では担当できない部門（原子力や電力、通信事業等）や、私的資本の急激な合理化、生産力の拡大によって隘路化した部門（交通、運輸、工業用水、用地、さらに中小企業等）を国家はみずから担当してこの資本蓄積を促進強化している。加うるに、こうした技術的進歩だけではなく競争力と景気循環に対する抵抗力を倍加するために、資本構成の健全化つまり他人資本への依存度を減少させ社内留保による自己

資本の比率を増大させるための財政政策が追求され税制改革にともなう企業課程（とくに償却資金と蓄積準備金）の再検討が開始されている。

こうした日本資本主義の劃期的な変容は、労働者階級の闘争にもいろいろの方向なら重大な影響をもたらさずにはおかないのだ。

第一に、資本蓄積の過程でのいちじるしい集中と独占の進行は、基幹産業の大企業における尨大な社内留保金の蓄積をもたらし、資本家はこれの一部を上層労働者に撒布することによって彼らを買収しあるいは全労働者に一定のアメを分け与えることによって闘争を未然に鎮圧しうる条件を獲得した。長期賃金協定や定昇制等。基幹大産業労働者は闘わぬことによって賃上げを与えられ、中小企業労働者、臨時工は闘えど闘えど敗北する。中小企業労働者の戦闘性の増大と大産業プロレタリアートの貴族化からさらに進行する。

同じ条件が、大企業同志の競争の激化とともに企業意識を涵養し労資協調主義の洪水を導き入れようとする。

さらに、新技術の全面的導入にともなって、旧来の労働組織は解体し、年功給から職務給への転化、賃金格差の増大などがもちこまれ、同時にアメリカ式あるいはドイツ式の労務管理方式が登場した。オートメーション化の進行とともに、熟練労働を単純労働の、あるいは重筋肉労働と計器監視労働の交代がおこり、生産点にはあらたな労働組織、労務管理方式、職階制が確立されようとしている。管理労働者層のあらたな増大。もっとも戦闘的労働者は追放される。

こうした全面的再編成が企てられている時、もしも労働運動、労働組合指導部が頭の先から爪先きまで階級意識に貫ぬかれた者によってではなく日和見主義者、改良主義者によって占められていたならば、そしてこうした合理化攻勢に対する闘争を有効に組織しえなかった場合には、労資協調主義が隅々まで滲透するであろう。

ここに危機の本質、その深刻さがあるのだ。

「戦後十五年は労働運動独走の時代であった。今後十五年は経営者の時代である。経営者は労資協力体制の中で技術革新に対処する知識の探究に不退転の努力を傾注しなければならない」

そうだ。もしも「総評の全労化」が成就するならば、もしも労使協力体制が確立されるならば、戦後十五年の困苦の時代の後に「経営者時代の十五年」の幕が開かれるに違いない。そして労働者階級は、階級対立を隠蔽する巧妙な諸機構の背後で一層固く賃金奴隷の地位にしばりつけられるのだ。資本家はやがて彼らみずからが奴隷であることをも忘れさせたいと熱望している。

電産の潰滅に学べ

電産の解体と電労連の結成、そしてその全労への全体的移行の過程は、一つの典型をわれわれに与えている。電産は戦後労働運動の中で炭労と並んで基礎エネルギー産業を握るもっとも戦闘的労働組合であった。それが五二年の三カ月にわたり次の電源ストで闘った「電産スト」の後に一挙に崩壊したのである。その最大の原因はこの闘争の中で産業別統一闘争が崩れ企業別闘争へと分断されたことにあった。労闘ストの昂揚の後に平均八、〇〇〇円の賃上げ闘争として九月二四日の第一次電源ストで始められたこの闘争は、十一月二六日に中労委斡旋案が提示されて以来統一闘争は企業別交渉へと持込まれ、十二月に入るや八日東電労組、十五日関西地本、十六日中部第二組合と次々と単独妥結し統一闘争から脱落し十二月十八日

にはついに当初の要求をはるかに下回る二〇％賃上げで妥結し矛を収めざるをえなかったのである。しかも、それをひきかえに実労週三八・五時間を四二時間にするという労働強化の条件までつけて。単独妥結した組合は次々に電産を脱退し電労連を結成した。電産は一挙に崩壊した。二年後の五四年には電産五万電労連八万と真二つに分裂した。全労に一括加盟した電労連は五九年には十二万になり総評に止まる電産はわずか三千となった。

なぜ統一闘争は崩れたか。闘争の中途で中闘が賃上げ要求額を二万五五円から一万六千円にひき下げ中労委斡旋案と五百円差しかなくなり。これくらいなら企業別交渉でもとれると企業組合幹部に思わせたことは一つの重大な敗北の原因だった。だがそれだけではない。その背後には他産業にさきがけた電気産業の合理化の進行があったのである。日本資本主義再建強化のためにエネルギー産業の再建は第一の要求だったが、なかでも電力はなににもまして必要であった。軍事目的遂行のために戦時中も一貫して保護されてきたために、電力供給量は傾斜生産方式等によって超重点的に国家の援助を与えられていた石炭ですら戦前水準の五～六〇％にすぎなかったのに四七年には戦前水準を四〇％上回っていた。にもかかわらず戦後復興の過程が要求する電力消費量の急激な増大は深刻な電力危機を生み電力制限、緊急停電は頻々としていたのである。かくして電力に対する国家資金・外資の集中的投入による設備の復旧、更新、全面的設備近代化は他産業に数歩さきがけて開始されたのである。五一年の電力事業再編成令の制定はその最大のメルクマールであった。企業は北海道電力から九州電力にいたる九電力会社に九分され、企業の独立採算制の確立にともなって各企業別の料金差が認められた。電源開発の進行、新規技術の全面的導入とともに、とくに低コスト高性能の新鋭火力発電所の建設は九州、関西を中心に進行した。こうして五一年を一つの劃期として国家による集中的援助（五二年電源開発促進法、五一年の開銀発足）、外資の導入（五三年の火力借款など）によって電力産業のめざましい近代化は進行したのである。そして、労働条件の変化を賃金格差の増大、年給から職務給への転化などのあらたな賃金体系がもちこまれ、アメリカ式労務管理方式が意識的に導入された。九企業への分断とその独立採算制の強化は企業意識をもちこませた。これらすべてが、最強の部隊としての位置をしめながらホワイトカラーを主体とし、職場労働者といえば密集した生産点を持たない電産に、五二年の闘争を試金石にしたのである。

こうしたあらたな条件に対する具体的指導方針をもちえなかった電産中闘の指導のあやまりによって、五二年の電産の闘いは、電産を各企業組合に解体させて終ったのである。

数年後のいま、全産業をおおう設備近代化、「産業構造の変革」の嵐の中で、日本プロレタリアート、とくに基幹産業プロレタリアートは、五二年の電産が課せられたと同じ試錬の前におかれてはいないだろうか。「技術革新」の最先端をいく鉄鋼において、五九年の春闘で富士鉄釜石、広畑、日鋼室蘭、鶴鉄などが闘いへの激しい決意を示したにもかかわらず、それが不発に終らされた後、これら大組合が戦闘力をいちじるしく喪失しかけているということはなにを意味するのか。現在生死を賭した決戦に立ち向おうとしている炭労に電産の道を、あるいは全炭鉱の中核になり下った常磐炭鉱の道を歩ませないためには、なにが必要なのか。

五二年「講和発効後、最初の二大ストライキに、もし屈服するようなことがあれば、日本の労働運動が左翼一辺に色彩られてしまう危険がある」（「日経連タイムス」五二年十月二五日）とした日本ブルジョアジーは二つのうち一つを屈服させることに成功した。同じ者たちの血で汚れた手は、安保改定と同時にいま一つの炭労を絞り殺そうとしているのだ。

四、西欧社会民主々義の末路と革命の採折

「わが国内においては議会主義に偏せず広く勤労国民階層の福祉増進を実現する民主社会主義政党の発足に対し、切実な希望が寄せられている。われわれは世界の社会主義運動の潮流がわが国における本流となる歴史の必然を確信し、ここに日本社会党と袂別し、われわれの主張に共鳴する同志ならびに国民大衆と相携えて日本における真の社会主義政党建設の大業に向って不退転の決意をもって邁進する。

右声明する。

一九五九年十月十八日　　再建同志会代議員会」

「世界社会主義運動の潮流がわが国の本流となる歴史の必然！」しかり、日本の社会民主々義者の運動は西欧のそれの異端者であった。同じ社会主義インターの中でも、日本社会党はつねに最左翼に位置していた。世界の社会民主主義運動は、日本とは異った土壌の上に、異った道を歩んできたのである。

時あたかも、西独社会民主党は十一月十五日臨時党大会においてマルクス主義と最後的に袂別する旨を宣言し百年の労働者党としての伝統とともに階級政党たる性格を捨て去り、民主社会主義国民政党への移行を完了した。

第一次帝国主義戦争を機として共産主義者と袂別した社会民主々義者は、この戦争とその後のドイツ十一月革命に象徴される一連のプロレタリア革命の嵐の中で公然と一貫してバリケードを隔ててプロレタリアートに対峙してきたが、以来彼らは危機におけるもっとも有効なブルジョア支配の救世主としてあった。一九二〇年代のドイツ社会民主党多数派、一九五〇年代にもっとも熱狂的愛国主義者、帝国主義者としての役柄を喜んで演じたギ・モレ。政権の座につくや武装警官でストライキを鎮圧したのはイギリス労働党であった。こうした裏切りは数かぎりなくある。西欧社会民主党は四〇年前からその冠する党の名称にもかかわらず社会主義の党、労働者の党たることを実質において放棄した。だが社会主義インター諸党中もっとも理論的かつ正統左翼と目されていたドイツ社会民主党の公然たる右旋回によって、彼らは形式においても「社会主義」的たることを断念しバリケードの対岸へ移ったのである。

「ドイツ社会民主党は、精神の自由の政党である。ドイツ社会民主党は、人間の道徳的基礎的価値の共通性と政治目標からなる各種各様の信仰および思考方向を持つ人間の犠牲共同体である。その基礎的価値とは「自由、正義および団結の共通の結びつきから生まれる相互的義務」であり、「民主的社会主義は、ヨーロッパにおいてはキリスト教の倫理、ヒューマニズムおよび古典的な哲学に根ざしている。」

一九二五年のハイデルベルグ綱領にかわったあらたなバート・ゴーデスベルグ綱領は「社会主義の基礎的価値」をこのように宣言した。この階級闘争とは無縁な平面の上に社会主義を基礎づけたあらたな「社会主義綱領」は数年を出でずして全西欧黄色インター諸党の公認のテーゼとなるに相違ない。これが「世界の潮流」なのだ。

だが、われわれにとって問題となるのは、こうした社会主義への背理、露骨きわまりない裏切りを糾弾し怒りを燃やすことではない。福祉国家への志向、「自由かつ民主的基礎秩序の防衛」のための国防の肯定、自由な経済競争と自由な市場の要求、「正しい社会秩序の建設を防げないかぎりでの」生産手段私有の保護、「自由を徹底的に弾圧する」共産主義者に対する挑戦、等々の要求の真の階級的本質を暴露し糾明することはたやすいことである。だが問題の核心は、にもかかわらず彼ら社会民主々義者が一定数の、否大多数の労働者の支持をうけ労働運動の主導権を握っており、共産主義者はまったくとるに足りぬ影響力しか労働者階級の中に持ちえていないことにあるのだ。

なぜか？

資本家階級が大恐慌と戦争の大動乱の過程で、かってない強固な資本主義的な再生産機構をプロレタリア運動の敗走の廃墟の上に築きえたからであり、これに対抗する労働者階級が真の前衛党を持ちえていないからである。

金融資本主義の矛盾の尖鋭化した爆発を国家社会主義として解決しようとしながら戦争で甚大な打撃をこうむったドイツ資本主義が戦後国家資金と外資の大胆な投入をテコとして自己金融力を飛躍的に強化させつつ、「奇蹟的復興」をなしとげた時、ブルジョアジーは階級対立をおおいかくし、階級闘争の爆発をも未然に抑制する諸形式をも同時に獲得し、労働者階級を労資協調主義の洪水におぼれさす物質的基盤をつくりだすことに成功したのである。社内留保によって尨大に蓄積された独占利潤をもとにして大産業労働者の高賃銀水準は維持され、中小企業・農業保護政策がとられ、「中産階級化」が進行し、労働組合もそのためのメカニズムの一つとして評価され養老年金・失業保険等の社会保障制度の拡大などが福祉国家の現実性を裏づけるかのように見せかけ、階級闘争は昔物語りのように語られるのである。

バート・ゴーデスベルグ綱領、それは労働者階級が真に階級的指導部を持ちえぬ時には、いくたびかの階級決戦に彼ら公認前衛の誤れる指導によって惨憺たる敗北に敗北を喫しつづけたのちに、みずからの墓掘人たちの無力に援けられて生きながらえ一層強化された資本主義の下で、階級意識を喪失した無言の賃金奴隷の地位にかくも従順に甘んずることもありうるのだ、という階級闘争の歴史的現実を、残忍なまで冷酷にわれわれに示しているのだ。

五、危機の打開の方向はなにか

―労働連動の中に、真の前衛党を確立せよ！―

「総評内部にも五万人の西尾派支持の労働者がいる。総評の『西尾新党はブルジョア第三党』という規定はこれらの人々を分裂に追いやるばかりだ。政党が分裂しても労組は分裂すべきでなく、団結が何より大切な時期だ。」（「朝日」十一月二〇日刊）

総評臨時大会二日め、革同の一方の旗頭であり共産党員の国労細井はこう叫んでブルジョア新聞に「注目」された。

だがこれで危機は打開できるか？

現在の危機はたんに組合が分裂するか否かの問題ではない。四九

年から五〇年にかけて第一次の合理化攻勢の中で一挙に進んだ労働運動の再編成、共産党から社会党への主導権の移行に比すべき再度の再編成が、今度は右翼社会民主々義者の主導権への急迫という形で進んでいるのであり、しかもそれは基盤を飛躍的に強化しつつ同時に進行する日本資本主義の資本蓄積の過程に裏づけられて、日本労働者階級に西ドイツ労働者の歩んだと同じ道を歩ませようとしているのである。

戦後十数年まがりなりにも戦闘的労働運動の輝かしい歴史を保持してきた日本労働運動は、音をたてて崩壊しようとしているのだ。「団結がなにより大切だ。」しかり、団結は必要である。だが敵階級は分裂を防ぎ団結を守るために闘わない組合ができるなら、もっと喜ぶに違いない。十月末の国労中央委員会で書記長山田は新生民同からの追求に対し、西尾新党に対する執行部の見解として「判断の材料がないから、まだ結論は出せない。」と述べた。組織の分裂を防ぐために！　だが問題はこれだけではすまないのである。全労の基盤を着々と強化しつつ進行する合理化攻勢に対し、「団結のため」闘わないならば組織そのものの全労化は完成し戦闘的労働者は追放されるだろう。闘いの前に団結をおく考え方によって、危機は一層深化するのだ。

打開の道はただ一つ、現在の資本攻勢に対して不屈の闘いを組織することである。現在の資本攻勢、合理化攻勢がこうした「総評の全労化」の物質的基礎を準備しつつ進められる時、この攻勢と徹底的に闘い基礎そのものを破壊するために闘うことのみが勝利の展望を開くのだ。分裂を妨げ、労資協調主義の滲透をはねつけるものは闘う労働者の階級意識のみである。そして階級意識は闘いの中でのみ形成されるのである。資本主義そのものを転覆するために闘うという革命的労働者がどれだけつくりだされるかによって、闘争の最後の勝負は決するのだ。資本の攻勢が激化し、闘いが困難となり、目に見える成果をかちとりうる展望が暗くなった時、いかなる強力な組織の内部にも日和見主義は抬頭する。職階制が意識的にもちこまれつつあり、巧妙な近代的労務管理が発達し、職制と管理事務労働者が相対的に増大する傾向にある今、日和見主義は物質的基礎に支えられて強力に出現するだろう。危機だ。敵階級はすかさず、ここにくさびを持ちこむ。「闘いやめるなら金はやる……」「第二組合をつくらないか……」この時、資本家に対する燃える憎しみに貫ぬかれたものたちが、資本家の陰謀をあますところなくあばきだし、あくまで闘うことを主張しその方針を明確に提示しながら日和見主義と徹底に闘うことによってのみ、危機は突破できるのだ。あるいは脱落者が出るであろう。だがこうしてのみ分裂を最少限に止め革命的労働運動は守りぬかれ、階級意識にめざめた労働者は続々と生まれるのだ。三社連が脱退しようとも、三鉱連が妥協の道を求めようとも三池一万五千は闘わねばならぬ。「組織を守るため」死闘を回避して三百人のレッドパージを認めた時、三池の鉄の組織は亀裂を生じ炭労の全炭鉱化の道は開かれるだろう。和解のない闘いの烈火の中で一万五千の労働者の資本家への憎しみは一つの炎となって合するだろう。たとえ資本家があらゆる武装をもって三百人の「業務阻害者」の追放に成功したとしても、その後にはこれを数倍する阻害者の群が生まれるのだ。

たたかいの中で、「総評の全労化」が失敗し、全労がいぜんとして職制と管理労務者と裏切り者のセクトに止まっ〔十六頁下段へ〕

理論学習のために

スターリン官僚暴露の書

トロツキー著「裏切られた革命」

トロツキズム——この響きの惹起する騒々しさには、まったく驚ろくべきものがある。百余年も前にマルクス、エンゲルスは「一つの妖怪がヨーロッパにあらわれている——共産主義の妖怪が。旧ヨーロッパのあらゆる権力が、この妖怪にたいする神聖な討伐の同盟をむすんでいる。」(共産党宣言)と書いたが、今日では、この「共産主義」という語を「トロツキズム」とかえねばなるまい。

現代公認の左翼でトロツキズムを怖れないものはどこにもない。トロツキストの烙印は反党分子であり、さらには反革命、反労働者の徒を意味する。既存の前衛党の各派閥は、この妖怪にたいする神聖な討伐の同盟をむすんでいる。わが国でも事態はまったく同じで代々木共産党の所感派官僚も党内反対派の構造的改良主義者も、この点では固く同盟している。

今年、十月革命記念日のその日に生誕百年を迎えたトロツキーは、世界最初のプロレタリア革命の栄光と、奇怪なまでに歪められてしまったこの革命の獲得物の惨忍さとを、その生涯に背負った革命家だった。

革命には、往々にして反革命がつきものであるということを、トロツキーはしばしば主張したが、かれはみずからこの反革命（しかも巧妙にインペイされた）の手に非業の最期をとげたのだった。トロツキーは、党派的意味からすれば、いわゆる「オールド・ボリシェヴイキ」ではなかったが、この名称が、レーニンの「四月」以後に右翼日和見主義の総称となって以来、まさに真のボリシェヴイキであった。歪曲されざる十月革命の歴史は、そこからトロツキーの名を抹殺することはできない。それほどにかれは、レーニンのよき同志であり、蜂起の指導者であった。

ロシヤ共産党の二十回大会までかくされていた「レーニンの遺書」にあきらかなようにあきらかにレーニンの信頼をかちえた第一級の革命家だったかれの名が、忌わしい裏切者の代名詞に転落するまでには、おびただしく流されたプロレタリアの血によってつづられた国際共産主義運動の日和見主義への転落の歴史がある。

いまや「一枚岩の団結」の神話からときはなたれた若き世代の左翼が、トロツキーの生涯とその数多の貴重な活動の経験から学ぼうとするのには、それだけの理由がある。今日の国際的規模でのスターリン主義者は、日本においてトロツキズムが深く広く大衆をとらえつつある状況に首をかしげている。それほどに、この史上最大のドグマは公認の共産主義者の頭脳をむしばんでいるのだ。

このような意味からは、トロツキズムを学ぶことなくして左翼の真の革命化はありえない。だが、トロツキズムの絶対化は、またもやふたたび、われわれをして日和見主義の迷路へといざなう。

トロツキーは、真のボリシェヴイキであり

レーニン死後、革命の簒奪者（スターリン主義者）と最も勇敢に鋭く闘かい、一九三八年には、世界プロレタリアートの利益を裏切りソ連邦外交政策の道具となりはてた第三インターナショナルに代る第四インターナショナルを創設し、「全世界に新しい共産党を組織せよ」と呼びかけた革命家だった。しかし革命の伝統は革命家の想い出の中に生きつづけることはできない。

トロツキーには、大別して二つの弱さがあった。一は組織にたいするかれの態度であり他は情勢の戦略的把握における欠陥である。かれはその活動の初期から、その政治的鋭敏さにもかかわらず、前衛組織の革命性を守りぬく点では鋭さに欠けた。今世紀初頭、ボリシェヴイキ党建設の苦難にみちた過程で、かれはボリシェヴイキとメンシェヴィキとの合同を考えたこともあった。だがこの時には、日和見主義からの組織的独立を守りぬくことで最も徹底した革命家であったレーニンがいた。かれの誤謬はレーニンによって正された。

だが、レーニン亡きあとにかれのこの欠陥は致命的なものとなった国際的なて、左翼反対派はみずからの組織をボリシェヴイキ的に建設する機会をとらえることなく、ドイツのプロレタリアートのナチズムにたいする一大決戦の日にその威力をふるうことなく、世界プロレタリアートの衰退の大波にほんろうされてしまった。

またかれはその政治的鋭敏さにもかかわらず、国家独占資本主義へと変貌する世界資本主義の実体を科学的に把握することができなかった。第四インターの政治綱領である過渡的綱領は、多くの示唆に富む方向の指示にもかかわらず、プロレタリア運動衰退（この責めの多くは公認指導部が負うべきものだが）の過程における資本主義のフェニックスのような生命力を看取しえず、革命への路を一直線の平坦な路として描きだしたきらいがあった。

スターリンの「社会主義」を論験したトロツキーの最も体系的な労作「裏切られた革命」は一九三六年にノルウェーの亡命先で書かれた。ブルジョア・イデオローグの悪意によるソ連「社会主義」の否定的評価ではなくて、マルクス主義の立場にたつ共産主義者の間にもソ連社会主義の現実にたいするいくつかの評価が存在するのは当然であるが、トロツキーの本書は、これらの批判の古典であるということができよう。

一九三六年という時期はスターリン主義者の「裏切り」を既にあらわなものとしていた。一九二四年のレーニンの死とともに、スターリンは世界革命の立場をかなぐりすてて一国社会主義論の立場に公然と移った。二三年のドイツ革命の敗北の結果として、プロレタリアートが権力を掌握した唯一の国家としてのソヴェト・ロシアが孤立させられ、非常な苦境におちいったのは事実としても、そうであればあるだけ、世界革命の機会が一層追求されるべきであったにもかかわらず、スターリンは公然とこの努力を放棄し、翌二五年の末には資本主義諸国との「平和的共存」の政策を打ちだして、その裏切性を鮮明にした。

そして二六～二七年にかけてイギリス・ゼネストの解消と中国革命の流血の敗北に破滅的な役割を演じたスターリン主義者は、三三年にファシズムとの決戦には社会ファシズム論を掲げてナチスと共に社会民主主義者を挟撃してナチスの勝利に直接手を貸し、ドイツ・プロレタリアートの決定的敗北を自ら生みだした。この頃には、世界革命の、したがって国際プロレタリアートの利益の圧殺者としてのクレムリン・スターリン主義官僚の役割は、明々白々たるものとなっていた。そしてトロツキーはこのスターリン主義官僚を痛烈に弾劾したのである。

スターリンは革命前夜の時期にプロレタリア革命の推進者としてではなく、レーニンの「四月」の弾劾をうけるべき立場にたっていたが、かれは（そして後のスターリン主義官僚は）レーニン死後、動揺常なき指導者としてふたたび登場してくる。

五ケ年計画が着手されるその瞬間まで、スターリン主義者は、「個人的農業経営にたいする優柔不断、大規模計画にたいする不信、最少限テンポの擁護、国際問題の無視」（山西英一訳三八頁）という立場を一貫してとっていたにもかかわらず、農村における富農の抬頭と食糧にたいする焦眉の必要は、かれらが集団農場への移行の綱領を採択することを余儀なくさせ、かつて非難した左翼反対派の綱領の一部をそっと借用せざるをえなくした。

しかしそれならば、「思想的に一ばん貧弱で、しかも一ばん多く誤謬を犯している分派が、どのようにして、またなぜ、ほかのグループ全部に打ち勝ち、無制限な権力を手中にかきあつめたかということは――少くとも歴史を合理的に見る場合――もちろん不可解なことである」（同上四九頁）とい当然の疑問にトロツキーはどうこたえているのか？

この問題にこたえてトロツキーは本書の第五章を「ソヴェト・テルミドール」と名づけ「スターリンはなぜ勝ったか」と設問した。「この断定は、先を見ることができない一派が着々と勝利をおさめたのに、いつそう烱眼な派が敗北に敗北をかさねたという、きわめて簡単な事実によって、一見反駁されるようにおもわれる。だが、自動的に頭に浮ぶこの種の反駁は、ただ純理的にだけものを考え、政治を論理的な議論か将棋の手合せと見る人間しか首肯させないであう。およそ政治闘争は、本質上利害と力の闘争であって、議論の争いではない。もちろん指導部の性質如何は争いの結果にとって無関係なものではないがしかし唯一の要因ではないし、結局のところ決定的なものではない。それに相争う陣営はそれぞれ自己の姿に似た指導者を要求するものである。」（同上九二頁）

このような問にトロツキーは次のように答えている。

後進国ロシヤにプロレタリア革命がおこったということから

(1)「まだ後れていたプロレタリアートは、数カ月のうちに、半封建的帝政から社会主義的独裁へと、前代未聞の飛躍をとげたという、ほかならぬこの理由によって、その隊列中には、不可避的に反動がおこった。」

(2)「五百万の赤軍の復員は、官僚の形成に少からぬ役割を演じた。……大衆は、各方面において、国の指導に実際に参加することから除々におしのけられてしまうのである。」

(3) 新経済政策は、都市と農村のプチ・ブルジョア層に希望と自信を与え「最初プロレタリアートの代弁者として立った若い官僚は、いまや自分が階級間の仲裁裁判所となったことを感じた。彼らの独立は一月ごとに増大した。」

(4) 世界革命の挫折（スターリン主義的指導によってもたらされた）は、官僚に「反対派は世界革命のために、われわれを革命戦争にひきづりこもうとしているのだ。騒ぎはもうたくさんだ！われわれは休息する権利を獲得したのだ」といわしめた。

(5)「反対派は孤立させられた。官僚は労働者の狼狽と消極性を利用し、おくれた層を進歩的な層に対立させ、富農や、一般にプチブルジョア的同盟者にいよいよ大胆にたよりながら、鉄を熱いうちに打ったのであ

った。こうして、官僚は数年の間に、プロレタリアートの革命的前衛を粉砕してしまったのである。」(以上、同上九四～九七頁)

プロレタリア革命の勝利したソヴェト・ロシヤに官僚の発生した根拠のトロッキーによる分析は、ほぼ正しいであろう。そしてここから例の有名な結論、「スターリンが彼自身の道を探りあてるまえに、官僚がスターリンを探りあてたのである。」(同上九七頁)という結論がひきだされる。だが、これは対象の一つの側面を表わすだけであろう。たしかに相争う陣営は、それぞれ自己の姿に似た指導者を要求するもの(同上九二頁)であるが、同時にスターリン主義分派の能動的積極的働きかけを忘れることはできない。トロツキーにこの側面の理解のないことが、かれ自身左翼反対派の活動のなかに敗北の主体的要因を探り出して、教訓とすることを妨げたのである。そしてこの教訓の最大のものは理論を実践に媒介するものとしての組織の重大性であるはずだった。書記長のポストについたスターリンはボリシェヴィキ党を官僚的弾圧の具として変質させ、強大な権力を掌中におさめたが反対にトロツキーは合同左翼反対派のゼイ弱な基盤にしか方針を物質化するための推進力を見出せなかったのではなかったか? 「官僚支配の基礎は、社会が消費の対象たる物資に欠乏していて、そのため、すべてのものがたがいに争いあっていることにある」(同上一一五頁)ことが疑いないとしてもそうなのである。

トロツキーの本書はさらに、スターリン主義官僚のロシヤにおける社会的経済的不平等の増大、文化政策の歪み、対外政策の変質(世界革命から現状維持へ)などなどについて多くの指摘をおこなっているが、最後に最も重要な問題であるソ連邦「社会主義」の本質をどのようにかれが規定しているかをみよう。

「生産手段は国家にぞくしている。だが、国家は、いわば官僚に「ぞくして」いる。もしもこれらのまだ完全に新しい関係が、労働者側の抵抗の有無にかかわらず、固定化し、規範化し、法律化されるならば、それは結局プロレタリア革命の社会的成果を完全に破壊してしまうであろう。だが、それについていま云々することは、すくなくとも時期尚早である。プロレタリアートは、まだその最後の言葉を発していない。」(同上二四一頁)

この意味から「まだ歴史が決定していないソ連邦の性格」というのがトロツキーの当時の立場であった。

そこにおける官僚の性格は、それが「官僚以上の何物かであることは否定できない。それは文字どおりソヴェト社会における唯一の特権層であり、支配層である。」(同上二四〇頁)といわれているが、かれらはまだ「彼ら自身の特別な財産関係とは無関係に、行政上の職階制にしたがって徴募され、補充されまたは更新せられる」(同上二四一頁)不安定な身分だとされている。

かくしてトロツキーによっては(その死の瞬間までも)、ソヴェト・ロシヤ社会の確定的規定は与えられずに終った。「ソヴェト同盟は、資本主義と社会主義との中間にある矛盾した社会である。」(同上二四五頁)それは資本主義へか、社会主義へか、このどちらかへの移行の可能性をはらんでいる。それは堕落した労働者国家である、というのがトロツキーの結論となっている。

以上至極く簡単にトロツキーの「裏切られた革命」の内容を紹介してきた。それは本書の内容の粗っぽい紹介にすぎない。しかし、本書のもつ絶大な意義はここからでもわかるだろう。公認左翼のドグマがいまだに横行している現在だから尚更にそうなのである。(S)

戦後学生社会運動史ノート II

(一九五六年一月—三月)

熊谷信雄

第一部 学生運動の再建(つづき)

第四章 授業料値上げ反対斗争

——再建の手がかり——

(一)

「せっかく正常化した学生運動を刺戟するおそれがある」と賢明なる一文部省官僚の予測(註一)どおりに、昭和三十一年度国家予算編成に際して発表された国立大学授業料の二倍値上案(註二)は、約半年の恐るべき沈滞から、伝統ある日本学生運動を甦らせてしまった。

一九五六年一月—三月の国立大学授業料値上げ反対闘争は日本学生運動を混迷の淵から脱せしめる機会をつくっただけでなく、その後の日本学生運動の第二創世紀といわれる壮大な劇の幕をきっておとしてしまったのである。

第一部 学生運動の再建(つづき)(註一)

——一九五六年——

第四章 授業料値上反対斗争

——再建の手がかり(一九五六年一月—三月)

第五章 小選挙区・教育三法反対斗争

——再建の全国化——(一九五六年四—六月)

第六章 砂川斗争

——再建の完成——(一九五六年秋)

(註一) 先号で、私は、

第一部 学生運動の再建はいかにして可能であったか

第二部 学生運動の再建はいかにして進んだか

と区分したが、その後第一部第二部の内容からみて、両者を学生運動の再建とまとめて一部とした方が適切であると考えたので、標記のようにまとめるとともに、それぞれの章別にした。

おそらく、あのときのだれもが、わずか一年後に示された全学連の奇跡的な立ち直りが、この一文部官僚の危惧のように進行するとは予想しなかったであろう。

およそ人民の大衆的運動は、だれもが予想しえないようなごく些細に見える、ある意味では偶然的要素を、契機に勃発し発展するものである。このような契機がいかに、眠れるかのごとくに見えた人民のエネルギーを顕在化させ、爆発させ、支配者をして震憾せしめるものになるかは、往々にしてその闘いの渦の中にいた中心的部分にさえ予測できないものである。ましてや評論家どもには！

表面的には一見なんらの波立ちもないような人々の集団、もはやいかなる政治的圧迫にも、人間的恥しめにもまったく不感症のごとくに「平静」な人民大衆に対し、小ブル的「指導者たち」の多くは始めはうろたえ、次には歎息し、さらには軽蔑の言葉を吐き散らし、ついにはそれだけにとどまらないでかかる状況になった「大衆」の変化を合理化するもっともらしい理論と理窟をこねて、大衆におもね、みずからを慰めるものである。

だが、このような小ブル的評論家たちが、理論を弄び、後衛になりさがった破産した「労働者前衛」たちが、過去の「反省」に憂身をやつし敵階級の前で武装解除をしている間にも、眠れるかのような人民大衆と支配階級の間の激闘は日々の生活のなかで続けられているのだ。激闘は現象化しない。その関係は物と物との関係として「正常な秩序」の中に封じこまれている。

それが題在化し、人と人、階級と階級との関係、激闘としてあらわれるためには、ある事件、ある契機が必要だ。しかし十分ではない。この契機を間髪をいれずにとらえ、この契機にあらわれた全社会―小宇宙を暴露し、日々の物と物の再生産め中に秘られている人間の歪みへの怒りを爆発せしめ組織していく理論と、この理論を実践に媒介する人々の集団組織が必要なのだ。

この理論と組織がないままでは、大衆はいかなる契機をもとらえず過し去り、ときどきエネルギーは爆発してもやがて消えていくものとなり、ふたたび全機構の中でのきりはなされた歪んだ人間の集りにとどまってしまう。逆に、この理論と組織が準備されているときに、そしてこの理論と組織が、与えられた契機を寸時も逃すことなく把握して動きだすとき、まったく無定形のように見えた人民大衆は一つの巨大な全社会を揺がし変革しうる力、マンモスのごとき歴史の推進者としての本来の姿をあらわすのである。

世界の人間の歴史、なかんずく人民の闘いの歴史が画くこのような真理を、小さな規模ではあるが、ものの見事に今一度示したものこそ――「奇跡的な再建」をとげた一九五六年の全学連――日本学生運動の歴史であり、その手がかりを与えた国立大学授業料値上げ反対闘争であったといえよう。

まず簡単にこの闘いの経過を追ってみよう。

（二）

〈闘いの経過〉

昭和三十年十二月二十八日　大蔵省、三十一年度予算原案編成に際して国立大学授業料二倍値上げ、入学検定料、入学金四百円の千円への引上げの方針決定

昭和三十年**十二月二十九日　商業新聞各紙右値上げを報道**（但し日本共産党機関紙日刊「アカハタ」は一月十三日に報道）

昭和三十一年**一月十四日**、東大C自治会常任委、反対運動決定全学へよびかける。

昭和三十一年一月十五日、全学連中央執行委員会「反対声明発表」

昭和三十一年一月十六日　授業料値上げ問題についての関東国立大学自治会代表者会議がひらかれ、十二大学二十自治会出席、対策委員会設置を決定。

一月十九日「アカハタ」主張「国立大学授業料値上げに反対する」掲載。

一月二十日　政府閣議、三十一年予算案正式決定

一月廿四日から東大C自治会等街頭進出

廿五日　〃　代議員大会でデモ決定

二月二日　約四千の学生、東京四谷外濠公園に結集、国会請願デモ（註三）

代表、文相に面会申入れ、全国各大学の反対署名六万を手渡す。

二月十四日　都、自治会代表約七十名、文部省、自民党、社会党代表と会見反対を訴える

二月二十八日　衆議院三十一年度予算案可決

三月三日　授業料問題全国対策委員会

全国反対署名集計十六万に達す

三月八日　衆院文教委員会へ代表陳情

三月廿日　衆議員文教委員会「国立大学授業料の値上げに関する要望書」決議案全会一致で可決（註四）

三月三十日　参議院予算案可決

（註一）三十一年度予算編成の大蔵省第一次原案は国立大学授業料現行六千円を一万二千円、入学検定料四百円を千円にする値上案を含むものであったが、この案に対して、文部省が強行に反対し、閣僚も難色を示したため、その後大蔵省と文部省との個別折衝が行われた結果、一倍半値上げ―六千円から九千円―で折合いがつき、この第二次原案が一月廿日の政府閣議で政府案となった。このときの文部省の反対意見は、教育財政政策上にもとずくものであったが、なによりも「無用な値上げは学生運動を刺戟する」ということにあったと、当時の各紙とくに朝日新聞十二月三十一日付朝刊は文部省学生課長の言葉として報じていた。

（註二）註一参照

（註三）東大教養学部新聞及東大学生新聞による。

（註四）二・二のデモ、全国の十六万の反対署名を背景に全学連、各自治会は第廿四国会へ度重なる陳情、請願をつづけ、代議士への働きかけを行った結果、三月二十日の参議院文教委員会は左記決議案を全会一致で可決した。

「国立大学の授業料値上げに関する要望書

政府は昭和三十一年度予算において国立大学の授業料の引上げを企図しているが、このことは教育的並びに経済的見地から適切な措置とは考えられない。

しかしながら右の措置が止むをえないとするならば、昭和三十一年度の引上げに伴う増収分については、これを国立大学の学生のために必要な経費のために必要な諸経費の増額に還元充当すべきである。

右要望する」

この運動の経過を、ただ静止的に、表面的にこう記述するならばそれは、なんの変哲もない学生運動の歴史にあらわれる華やかな「大闘争」と比較しても、まったく映りばえのしない諸事象の羅列にすぎないだろう。

また、さらにこの闘いが行われた時期が、一九五六年一月—三月というときであり、一方では保守合同後の最初の通常国会—教育三法、小選挙区法案の提出された第廿四国会へ向けられた闘いであり、さらに総評の始めての試み「産業別統一闘争による賃銀闘争、春季闘争」—岩井事務局長によって二・一スト以来の規模とさえ豪語された—の労働者階級の闘いの最中で行われたということを考察するならば、社、共両党への要望という以外には、労働者階級とのなんらの連帯なしに、行われたこの運動は、学生社会運動史の一頁をとりわけて費すほどのものではないように思える。

事実、この運動の経過の中で、ほとんど唯一の大衆的行動とて、あげられる二月二日の東京四千の国会請願デモンストレーションでさえも、次のようにジャーナリズムに報道されるような、静かな、平穏なデモであったのだ。

「……去る二日、四谷外濠公園に東大教養学部学生約二千名を始め、都内数十校、地方大学、私立大学を含めた四千名の学生が集り新橋駅前までデモ行進を行い道行く人々を、〃久し振りの学生デモ〃と珍しがらせた。しかしデモの様子は以前と比べてあまりに変ってしまっているのに一層驚いたようだ。なにしろ〃始めてデモをやる学生が大部分で指導者の中には〃職業的学生運動家〃の姿も、激しいアジや巧妙な統卒力もみられず、まったく和やかな空気で、整理にあたった警官との衝突もまったくなかった。」(＊)

それは、「大蔵官僚をして、予算に対するただ一つの手ごたえある運動」(＊＊)といわしめたことはあったとしても、決して、後の小選挙区闘争、砂川闘争、警職法闘争のごとくに、全人民的な、全社会的な闘争として政府に迫るものではなかったし、また一九四八年の授業料闘争のごとくに、全国的に、組織的に強力な学生のエネルギーを結集した闘いともいえなかった。

総じていうならば、この運動は、まだ支配階級への憎しみをこめた全社会運動の一環としての闘争ではなく、学生の要求をつつましやかに掲げ、「世論」に訴え、政府あるいは国会へ陳情する学生運動であり、また、全国的に強固に組織されていない半ば自然発生性の色彩の濃厚な運動であったといえよう。

そしてまた、「この闘いの輝かしい成果」を誇示するには、あまりにも少い「直接的成果」しかもたらさなかったのである。(註一)

しかし、それでは、なぜにわれわれは、いまこの闘いに「日本学生社会運動史」のノートの一章をさかねばならないのか？

もし闘いを、その表面的、現象的経過、形態、直接的成果においてのみみるならば、ほとんど特筆すべきことのないようなこの授業料闘争は、しかしながら、その中に一たん入って考察したとき、われわれは、きわめて短期間の中に、あまりにも多くのことを経験しているこの闘いの歴史的意義を見出さずにはおかないのである。

それは単なる運動の経過ではなく、学生社会運動におけるイデオロギー理論、思想の激しい相克の闘争の歴史であり、この歴史なしには、五六年四月以降の歴史が決して展開されないような歴史であり、さらには、学生運動にとどまらない日本社会革命史の重要な構成部分をなす一頁なのである。

このことを行うためには、われわれは、諸事件の記述家たり、無責任な評論家たる位置にとどまることをやめ、歴史の創造者たる立場に身をおき、「全学連」にも「特定政党にも頼ることをせず」しかも「二、三年の空白の後に」「〃初めてデモをやる〃大部分の学生」を組織しつつ、次の時期、小選挙区、砂川へ続く巨大な闘いと全学連の再建の頁をひらく準備をするために苦吟した学生たちの苦闘そのものを経過しなければならない。

物事をただ現象的にしかとらえることのできぬものは、この「二三年ぶりの空白ののち」にしかも全学連のおそるべき沈滞の半年の後に突如として、あらわれた学生のデモに目を見張ったが、かれらがこの驚きのあとに、見出したものは、せいぜい「警官隊との衝突のない」、「全学連や特定政党に頼ることをしない」、しかも「政治問題に直接とりあげて政府と衝突するのではなく、学生の切実な要求を掲げて世論に訴える」、「職業的学生運動家の指揮がない」「自主的な」学生運動であったのだ。

新しい学生運動万才！

かくて学生課長は、微笑みに満ちて、デモをおくりだし、帰ってきた学生に「模範的デモ」と称讃の言葉を与えた。(註二)

だが、事態がこの慈悲深い学生課長の思惑を見事裏切って、むしろ冷酷にして総明な文部官僚の恐れの通りに進んでしまったとき、彼は、なにを、「新しい学生運動」の中に見出さねばならなかったか。

彼が過したこの半カ年を、このようにのんびりと送るには、その当時の革命的学生にとって余りにも多くの経験に満ちた、余りにも豊富な日々であったのだ。

それはどのような日々であったのか？

(＊)毎日新聞　昭和卅一年二月十七日附「大きく変る学生運動」

(＊＊)全学連第八回中央委員会報告決定集、五頁。

(註一)この闘いを総括した全学連八中委は、闘いの直接的成果について、次のようにいっている。

「……値上げの阻止はできなかったが、分納、延納制の自由の確立、医学部進学者、編入者、学士入学者の授業料据置き参院文教委における授業料値上げは適切ではないという決議などいくつかの成果を記録した」前掲書五頁。

(註二)早野東大教養学部学生課長談「駒場では学生がよく勉強して教授との折合もよくデモも立派であった。……。」(毎日新聞前掲号)

(三)

冬休みが明けた直後一月一六日、自治委員会よびかけに始まり、わずか二週間の後に〃三年ぶり〃の全学的デモに発展していった東大教養学部学生の闘いは、この授業料闘争の要をなすものであった

が、このいわば劇的な展開の模様について、当時東大C自治会の副委員長であった村尾行一君は、感激的な口調で次のように記している。

「一月十七日、弥生道の銀杏はほとんど葉をおとし、寒風にたえてやがて春をまっているかのようであった。ぼくは昨日の自治委員会のことをおもい、沈滞しきった学生運動のなかでたち上ろうとする真剣な討議をおもい、だが一方ではどうなっていくであろうかという不安にとりかこまれつつ、よし、やらねばならぬというはりつめた気持で、いそぎ足に自治会室へとむかった。すると、

『おい、あれを見ろ』と、二階の窓からA君がどなりながら指さしている。

そして弥生道のはずれの掲示板は人だかりでいっぱいだ。いったい何ごとなのか。

だがかけよったぼくは、おもわずもぐっとつきあげてくる気持をどうすることもできなかった。そうか三十年の理一組がクラスアピールをだしたのか、授業料値あげに反対するというたくましい字、ぼくはうれしくなり、二階の窓に手をふって自治会室へとびこんでいった。……

自治委員会が国立大学授業料値あげ問題にとりくみ、反対の意志を表明するとともに全学へ討議をよびかけたのは、昨日十六日である。そのとき誰がこうもはやく反響があると考ええたであろうか。……そしていま、このアピールを見たぼくは、自分のクラスでも思いきって討議を提案しよう、と決心した。……そこでも真剣な討議の結果、二名の反対のみで反対闘争にたち上ることを訴えることになった。クラス討議はぞくぞくおこなわれはじめた。アピールはアピールを呼び、学友たちは授業料値あげの問題と、その本質について討議しあった。だれの胸にも、今日の現実にたいする莫然たる不安といかりはあったのだ。……

一九日の自治委員会は十四クラスの討議を背景に圧倒的多数が値あげに反対した。だがわれわれはいかにたたかうべきなのか？『これは政府の文教にたいする軽視のあらわれである。』『根源は再軍備予算にあるのだ。』という意見。『いやそこまでだすのは反対だ。学生がまたあばれだしたといわれるし、第一、学生には政治闘争的になることをいやがる人がたくさんいる。』『全学の統一のために経済問題に限定すべきだ』という討論。……

ぼくらはたしかに学友たちがいわゆる尖鋭な政治闘争に不安をいだいていることをしっている。だがそれがすべてとなるならばなぜあのようなクラス討議はおこなえたのであろうか？ ぼくらは日本学生運動を沈滞と考え、それの原因を十二月から考えはじめていた。十三期常任委員会は、こうした沈滞について討論をおこなってきた。……

ぼくは発言した。『われわれにとって第一に大切なのは他人がどう思っているかということではなく、まず自分の最高の能力をもって問題をできるだけ科学的に分析し、その本質をあきらかにすべきことなのだ。

……はじめから他人が他人がといったアクチブ意識で、大衆はひくいからできないという見方はまちがっている。』……

……二十三日つもった雪はさっそく歴研の学友たちによって大きな雪だるまと化し、それにさされた『授業料値上反対』のプラカードは通学する学友たちによびかけた。

二十四日の街頭署名は予想外の都民のげきれいによっていっそう活動をいきいきとさせていった。そして二五日、流会が定例の代議員大会は傍聴者をふくめた六百人の参加者によって一年ぶりに成立した。

テレビのライトをうけ録音器の音に上気して大村委員長は『この運動は民主教育を守る運動だ。現在の学生の主体的条件はたしかにわるい。他校ではどこも運動にたちあがっていない。しかし、いや、それだからこそ駒場が、レッド・パージ闘争以来、伝統ある拠点駒場がその先駆者としての役割を、全国民の期待をなによりも、今反対することもできず辞書をひいている〝弟たち〟の期待をになって果さねばならない。』との提案理由を説明する……。活潑な討論のすえ、反対闘争が〝民主教育防衛〟という点で反対数票で可決された。デモについてもさまざまな意見がでたが全員が参加できる……整然としたデモを行うことになった。カメラマンのフラッシュ、紅潮した学友たちの顔。沈滞しきった学生運動は、駒場においてまさに蘇生の第一歩をふみだしたのである。

……代議員大会の内容はさらにクラスにもちこまれ、デモ決議はぞくぞくおこなわれ、街頭署名参加者もふえていった。

二月一日の駒場はプラカード工場と化し、いたるところで金槌と歌声と笑声がこだまする。三十日の試験発表もどこへやら、だがいったい何人ぐらい参加するだろうか。

ぼくたちはデモも未経験者が圧倒的であったので徹にいり細にいった説明をデモ実行委員会でやったり、ビラにしたりして「不安」をのぞくように努めた。

二月二日、朝『全学整然たるデモへ』とのビラが登校してきた学生にわたされた。午後からの授業を休講にして、本館前にぞくぞくと集合する。全体で二百以上のプラカード……

残雪をふんで正門をでていった二五〇〇の学友。シュプレヒ・コールもスクラムをくむこともはじめてのことながら面はゆそうな、真正面をにらみつけた五千の瞳は厚生課長の『がんばってこいよ』とのこえをうけながら、このたたかいの先頭をきった三十年理一八組をトップにでていった。……」(＊)

大分長くなったが、この引用した記述は当時の運動の模様を、いきいきと再現している。

事実、この約二週間の間にもり上った東大Cの学生運動は、これにさきだって、「沈滞の原因」を追求した討論において、多くの進歩的評論家や後衛的前衛たちを支配したもっともらしい客観主義的宿命論の誤謬を、ものの見事にうちくだいてしまうのに十分であった。あきらかに沈滞の原因は、客観状勢と学生層全体の変化には求められなかったのだ。

あれやこれやの現象の変化にまどわされて、歴史の深部で進む本質的な内容を見失ってしまうのは、百年を通じての小ブル的日和見主義者のつねである。

一月一六日の駒場自治委員会のアピールが、「その次の日に」ピンとはねかえるようなクラス決議でむかえられることを「ほとんどだれもが予想せず」に、しかし「真剣な討議の結果」「どうなるかという不安」にとりかまれながらも、全学にむかって発せられた、そのこと、—この運動を決定した一二年のなかには、これにいたる

激しい思想の相克の歴史がこめられている。

因みに同じころ、「一月十五日、全学連中執反対を声明」と記録されている「日本学生運動の指導部隊」全学連中央執行委員会の定例総会の模様を、当時の記録に語らせてみよう。

「一月十四、十五日定例中執は、田中委員長以下十名の出席のもとおこなわれた。……

委員長報告要旨、

○この期間の学生運動の全国的情況

十一月中執以後、全体としては、それ以前に引きつづいて、自治会活動についての反省と新しい発展の準備がおこなわれたほかあまり大きな変化はなかった。……自治会としては依然として『なにをしたらよいかわからない』『なにをやるにも力が足りない』といった状況が多い。……地方学連、府県学連で、下部学連の殆どで混乱と停滞がおこった。

一般に各学連では、各自治会の交流と各自治会への援助について特に強調されており未加盟校をふくめて再組織することについて検討されている。……

○今後の一般方針、

……自治会活動としては、具体的活動というよりは、過去の活動についての検討と今後の活動についての立案の点で努力されている。……

自治会活動の本質、その内容や、自治会活動とその他の学生の活動との関係、学連活動のあり方はぜひ討論されなければならない問題ではあるが、簡単に結論をだすべき性質の問題ではなく、従ってこれらについての結論は来る六月の第九回大会において、全国的意見と運動の交流の中で求められるべきである。

一方、それまでの間、多くの全国的、個別的問題の解決を必要としている以上、自治会や学連はそのための活動を続けねばならぬ。……またそれができるだけ広汎な学生の要求と意見を反映し、皆が一致でき、しかも実現可能な範囲の中で努力すべきことは明らかである。即ち授業料問題、アジア・アフリカ学生会議、春休みの旅行宿舎アッセン…etc。……

中央報告、一般方針が承認されたのち、㈠授業料問題　㈡春休中の学生旅行の宿舎の斡旋　㈢新入生歓迎の準備　㈣アジア・アフリカ学生会議　㈤その他、の五項目が当面の活動として承認された。……

…国立大学授業料問題については、次の通り報告、討論、決定された。

書記局報告、

……授業料値上げ案が政府で検討されている。これに対し、文部省関係では反対している。学生の中では顕著な動きはおこっていない。しかしこの案は、学生生活をさらに困窮させ、進学者を限る結果をもたらすから、反対すべきだと考える。……

結論、㈠この案に反対し、その趣旨を説明する声明をだし反対運動を進める。

㈡運動はあくまで、広汎な学生の一致する点に基き慎重に行うとともに、一致した点で積極的に学生運動を進める。

㈢具体的行動方針

(1)当局へ要望する　(2)関係政党へよびかける。(3)資料、アンケートをつくり配布する　(4)高校へよびかける。

自治会へ次のことを要請する。

㈠この問題について広い角度から周知徹底をはかる。

㈡委員会などで討論し、その討論を学内外へ示す。

㈢新聞への投書、政府への要請

㈣対策委員会の設置……」

要約しよう。

一月十五日の全学連中執会議は「授業料値上げは反対すべきだと考えた」が、混乱と沈滞がつづいている現在の全国的状況では「自治会活動の本質、学生運動のあり方について討論すべきであるが」「簡単に結論をだしてはならず」したがって「六月の九四大会まで、まつべきであって」当面「授業料問題や、A・A学生会議や、旅行宿舎斡旋などの」「解決をせまられた問題は、皆が一致でき実現できる範囲で努力する」のであって、当面の行動方針は、「反対を当局に要望し」「学生に周知徹底せしめるよう」「自治会に要請する」ことぐらいが学連にできることだ、……としか討論されなかったのである。この沈滞しきった、疲れはてた義務感に辛うじて支えられた全学連中執の討論の結果でた一五日の声明と、先の一六日の駒場の声明とは、同じ「反対」でもなんと異った姿勢であったろう。「われわれにとって大切な第一のことは、他人がどう思っているかということではなく、まず自分の最高の能力でもって問題を科学的に分担しその本質を明らかにするべきである。……はじめから他人が他人がといったアクチブ意識で大衆はひくいからできないという見方はまちがっている」と叫んだまだデモの経験もない一自治会の一年生の学生の態度、

「主体的条件はわるい。……しかし、いやそれだからこそ、われわれが立上らねばならない」と上気して叫んだ東大の自治委員長の態度と、日本学生運動の全国的最高の指導部隊として存在した全学連中央「職業的学生運動家」のかかる姿勢との相異こそ、授業料反対闘争の―いやそれに端的にあらわされた当時の日本学生運動―さらには日本の革命的社会運動の姿を如実にあらわしたものだし、またこの闘争の先述した性格を決定したものであったのだ。

そしてこの二つの相対立した態度―思想の相異こそ、約二週間の歴史を貫いていたものだったのだ。

それでは、この相異はどのように始まったか、どのように進んだか。

それはどんな内容をもっていたのか。

(＊)

(＊＊)全学連書記局発行「全学連通信No.4」一九五六年一月廿日号。

(四)

一月十四日東大C自治会常任委員会のよびかけとそれに始まる駒場の運動の組織化と二月二日の全都のデモへの発展は、十四日に先立つ二週間前――すなわち年の暮十二月二十九日、新聞が値上げを報道したその日から始まる意識的分子の周到なる討論、理論と方針とそれに基いた激しい論争の開始、組織化なしにはありえなかった。

さらにこの報道を耳にした瞬間に賢明なる文部官僚が発した危惧

の言葉の真実性をとらえ、その示唆の通りに、これを学生運動の沈滞からの脱出のきっかけとするべき重要な問題提起として意識するためには、それに先立った「数十年の内面の闘い」を経過した意識された分子の結集と彼らの闘いの構えが不可欠であった。

すでに前号でのべたごとく、日共、東大細胞を中心とした一部の学生党員、反戦学生同盟の学生たちは、九月から極端に始まった学生運動の壊滅的混乱の中にあって、苦闘を続けた結果、この危機と沈滞の原因を、客観的な諸条件に帰せようとするいかなる宿命論とも闘い、まずなによりも主体的諸条件――なかんずく革命党――日本共産党の危機としてうけとめ、五五年暮までに、戦後の革命運動の歴史と学生運動の諸論争をむさぼるように学びながら、この危機の究明をサボリ、誤謬の根源を覆いかくそうとする党中央幹部たちと激しい闘争を続けていた。（前号ノートI参照）

それとともに彼らはいたずらに過去の歴史をせんさくしていたのではなかった。彼らは一方では、安易な実践第一主義や、折衷主義と闘いながら（註一）過去の誤謬を克服する道が、かれらのおかれている諸情勢の中で支配階級との闘いをはなれては、決してありえないことを、党内外論争の中で、知らないわけにはいかなかったのだ。

共産党の情況がどうなろうとも、それとは無関係に、諸情勢は、緊迫したものになっていた。

保守合同、教育三法案の提出、憲法改悪のための憲法調査会法案の提出、小選挙区制の強行の意図の明確化、日本軍隊核武装の試み、原水爆基地化、などの諸情勢は、インテリゲンチャの目に「重大な状勢」を意識させずにおかなかったし、学生たちにも政治的関心をよびおこさずにはおかないものであった。

この状勢に対して、一般的には労働者階級、特殊的には共産党のあまりに立ちおくれた階級的状況、さらには学生運動の中の共産党員の総だおれ、全学連の解体という事態は、日本の学生運動――とくに戦後――にとってはきわめて、珍しい状況を生みだしていた。すなわち、学生社会運動の主たる発言者、代弁者が、共産党員に代って小ブル的民主主義者となり、前面にあらわれてきたということである。（註二）

すなわち、両階級の激突となるようなときには、明確な労働者階級の立場に立つことを俊巡する、小ブル的急進主義者、学生運動が社会運動として発展するだけでなく、支配階級とその秩序に対する、労働者階級解放の同盟軍としてあらわれるときには、かならずといってよいほど、学生運動の主要な阻害者として立ちあらわれる民主主義的な良識ある教授たち、非マルクス主義の急進的民主主義者たちが、共産主義者、マルクス主義「進歩」主義者たちに代って、学生社会運動の鼓舞者として立ちあらわれ、一方では支配階級の反民主主義的意図に対する勇を奮った政治的発言をなし、他方では、共産主義者、共産党への左翼的批判、行いを学生たちへのハッパかけをしたのである。（註三）

もし、学生の中の共産主義者の混乱と非政治化、右翼化が、共産党中央がその後続けているように続いたならば、日本学生運動のその後の歴史は大分かわったものになったに違いない。

すなわち、日本の学生たちは、たとえ共産党員による「全学連の再建」がなくとも、いつまでも、全学連の壊滅、完全な学生運動の崩壊を続けるようなことはしなかったであろう。おそらく、共産党

の支配が排除された後に日本の労働運動が、極端な労資協調主義者ではなく、「左翼」社会民主主義者にその支配を委ねたごとく、小ブル的民主主義者、「左翼」社会民主主義者による「学生運動の再建」がなされ、全学連はその支配の下に、つくりかえられていくような事態が生れたかも知れない。（註四）

冒頭にのべた五六年第一四半期の――すなわち授業料闘争に端的にみられる――学生運動が広汎な学生の参加にみられる昂揚にもかかわらず、小ブル的、学園的運動の限界を有していたことはこのことを一面で示しているといえよう。

もち論事態はこのように進まなかった。

小ブル的民主主義者の「左翼」からの批判、非党員自治会活動家の不信にみちた批判も身にしみて、先述した一部の学生共産党員たちに、新しい決意を抱かせたのである。

共産党中央を始めとするほとんど全党の組織がはげしい混迷状況にあったなかで、日共東大細胞委員会は、五六年の冒頭にいちはやく、つぎのような自己批判的立場を発表し、その決意をのべている。

「……昨年七月、六全協議発表以来われわれは過去の党活動についての深い反省に貫ぬかれて討論をつづけてきた。……前『臨時委員会』が六全協の理解をたんに個人的道徳的反省にとどめず、党の基本的問題にまでつきつめて検討せねばならぬことを指適しその実践にとりくんできたことは大きな積極的意義があった。……しかし、われわれはこの討論を組織するにあたって、われわれのおかれている客観的状勢がどういものであり、敵の攻撃がどのようにかかり、味方の主体的条件がどういう状態にあるかについての認識が殆ど欠けていた。……

年頭にあたって、われわれはこれらの点を自己批判し、諸情勢の把握と大闘争の実践的課題にとりくむなかで、過去の総括、基本方針の立案にとりくむ決意を明らかにする。」

こうのべたあと、かれらは国内状勢を分析し、保守合同、廿四国会への諸反動立法提出、予算と文教政策などについての容易ならぬ事態を指適して、いう。

「…これに対し、われわれの戦列はどうか、わが日本共産党は六全協決議に基き、党の統一を固め、正しい方針を生みだす努力を、年末に予定された第七回大会にむけて集中し、党建設の課題にむけてとりくんでいるが全体としては、まだ端緒についたばかりであり、大衆運動の方針の検討も不十分にしかなされず、全体として状勢に著しく立ちおくれているのが現状である。……

このような党の弱さは、……特に学生戦線においては都学連の解体などにみられる状況を現出せしめ、学生戦線は、全般にわたる混乱からいまだたちなおらず、敵の攻撃の前に殆ど無防禦となっている。……

学校細胞の弱さは全国的なものであり、都学連、関西学連などは解体状況にあり、全学連も六月の大会まで組織を維持するのが精一ぱいである。

このような党の状態、細胞の状態は……はわが党に期待した学生諸君に失望を抱かせている。また、私学総連（私学経営者団体連合）がもちした『授業料値上げをするなら、学生が沈滞してい

る今が絶好だ』という言葉は、われわれの弱さに対する支配者の政治的意図を明白に物語っているのではないか？

…われわれは、このような情況を把握するとき、当面する重大な事態と党の責任を自覚せざるを得ない。特に全国的学生戦線の要となっている東大細胞の責任は重大である。」（＊）

このような決意を年の暮にのべあった彼らは、授業料値上げの報道を耳にするや直ちに「**授業料闘争を一九四八年の授業料闘争たらしめよ**」（註五）の合言葉を口にして、物した戦後の運動の教訓――なかんずく四七年―五〇年の教訓をひっさげ、正月を返上した闘いにとりくんだのである。ただちにすでに連絡のとれていた東大C細胞委員、反戦学同らと連絡をとり正月の休みで開店休業していた全学連書記局を訪問し、あるいは個人宅を訪れ、活動は組織的に展開された。

一月九日には、東大C、東大の合同細胞委員会がひらかれ、東大駒場をして授業料闘争の突破口たらしめよとの方針を確認、すでに活動を開始していた駒場常任委員会らとの連絡のもと、休暇あけ、即日開始される大衆的活動の前段階の準備が完了していくのだった。

闘いが開始され、驚くべきほど急速に大衆化し、約二週間ののちに、予想しなかったデモとなるためには、この二週間は単なる闘争の組織としてのみ過されたのではなかった。逆に、もっとも激烈な思想闘争が、あらゆる場所において、あるいは非公開で、あるいは大衆的に行われなければならなかった。

論争は、東大細胞のなかで、自治会の会議で、関東、自治代会議で、公開討論会のなかで、共産党のグループ会議で、学生大会で、クラス討議において、学生新聞紙上（註六）において、激しくおこった。それは、単なる戦術上の相異のみの論争ではなかった。学生運動を進める上での基本的な考え方について、さらにそれにつながる日本革命運動の、思想の根抵にふれる問題であり、戦後十年の思想史の総括的な討論でさえあったのだ。

このような思想闘争の試練こそ、かの駒場自治会の十四日の声明の、いくぶんの不安を混えながらも、確乎とした確信の上に立ち、未来への明るい展望を持った東大自治会のよびかけの基礎をつくるものであった。

かかる激しい「内面の経験」があってこそ、闘争の進展の一週間の後、冬休明け、試験という時期にもかかわらず、まだ一度の経験もない人々をして、多くの懐疑的な学生運動家の躊躇をはねのけさせ、「数年ぶりのデモ」を、学生の前に呼びかけさせたのだった。

（註一）誤謬をひたすらに隠そうとする共産党幹部は、六全協決議のひきおこした深刻な動揺と混乱、なかんずく幹部の責任追求の声におどろいて、最初は自己批判を一億総ザンゲ的な道徳的反省と個人の修養におきかえることに汲々としていたが、五六年に入ってからは、「大衆運動を忘れるな」とか「清算主義的自己批判反対、過去の活動の自信をもて」とか「前向きの批判を」とかいってふたたび安易な実践第一主義を前面に出して、下部党員の素朴な批判を抑圧した。

あるいは、経験主義的な一団は、「昔のことをいつまでもいっていてもしょうがない。これからは誤らないようにやろう」

と折衷的態度で、ふたたび誤らないための保証―自己批判の徹底化―をごまかそうとした。

東大細胞らは、これらの傾向とは終始闘わねばならなかった。

（註二）この時期に、「学生は政治的関心を、国家的立場に立って、青年の勇気をもって発言しなければならぬ」「学生自治会が、学生健康保険などの学生の要求をとりあげて努力するのは結構だが、もっと大きな社会的問題にも目をむけねばならぬ」と東大自治会中央委員会の学生たちに、訓辞をなしたのは、ほかならぬ当時の東大総長矢内原忠雄氏であった！（東大学生新聞）

また、共産党員たちが六全協ノイローゼで「学園にかえり」勉強に汲々として仕事を放棄したときに、この困難な時期の自治会活動を支えていたのは多くの無党派活動家たちであった。

（註三）前註参照。あるいは、その後学生運動の昂揚期にはつねに進歩的装いをこらした抑圧者として立ちあらわれるかの『学生のよき理解者』山下肇教授のつぎの言葉をみよ、

「最近の東大生はどうかしてはしないか、実によく勉強するね。勉強の風潮が一般的になってからもう一年以上になる。それまでは、たとえば駒場では教室全体が討論で沸騰する風景にしょっちゅうぶつかった。いつからかそれが歌声にかわり、今日此頃ではなにも聞えない。……

…前ならば、心中にそれ（立身出世主義――筆者註）があっても、口に出せない緊張があった。今は左翼の宣伝がききすぎてか、平和共存の太平楽で真けんな討論が姿を消した。『力以上のことをしない』というのがその口実である。『力以上』といって、それだけの力がある（ない）と思っているのだろう。力以上のものに情熱をかけて、それに未知の自我を現実に発見することこそ、若い青春の特権ではないか。

……去年の夏休前、自治会が教官と学生の懇談会をやるので同窓会館にいってみたら教官の数より学生の方が少くて、あいた口がふさがらなかった。夏休中に『砂田放言』や『体力検査』や『海外派兵』や『砂川基地問題』が出たのに秋になっても、さっぱり元気な発言がきかれなかった。そして、ノートの貸借や、教室の立ちんぼう解消が自治会の仕事だという。それが学生の『生活』であり、『力』なのだろうか？　その位のことは以前だってやっていた。ただ片手間にやっていただけだ。

以前にはもっと重要な問題があった。しかしそれは今だって同様に、否それ以上にある。今年は『憲法改正』が白線にのぼり、矢内原総長も教育の危機を強く指適されている。……日本はアジアの、否、世界の孤児になりつつある。立おくれて、みすてられつつあるのだ。……

東大生も、日本と世界の歴史的現実（民衆）の中で、立おくれ、みすてられ「孤児」にならないように忠告した。勉強の「余暇の善用」という教養主義ではこのきびしい現実は克服できまい。……

…三年前の…あの憲法擁護平和遊説の『帰郷運動』を全国的に展開した勇気と頑張りとが、来るべき春休みの自治会に果してあるかどうかぼくは今から刮目している。

（東大新聞昭和三十一年一月二三日、赤門時評、「東大生への

苦言」山下肇）

（註四）事実、アメリカ国務省の直接の援助をうけて、I・U・Sに対抗する国際学生組織COSEC（あるいはI・S・C）の極東オルグ、アメリカ全学連の日本代表として派遣された。フイッシャーはこのころから勢力的な活動を展開し、ユネスコ学連、国際学連、私学連、学生放送協会、国際学生協力協会などの一握りの反全学連（ないしは非全学連）組織と接触を強め、これを結集しようという動きが続けられている。それと呼応するかのごとき全学連内組織からも、新しい学生組織の再編がとなえられ、全学連中央自体が、これらの非全学連組織との統一行動なるスローガンで、共同の全国協力機関をつくって、一部の反動的学生の策動に絶好の場を与えていた。しかも、これらの方針は、いずれ後述するように国際的な方向として、I・U・S書記局自体からだされ、さらに日共中央のグループからも賞讃されていたのである。

永らく学生運動にその組織的基盤をえられなかった社会党も、全学連のかかる状況をみて、組織的学生対策を開始し、学生護憲連合なる組織を自治会の参加のもとにつくろうとし、積極的に各自治会に働きかけ、かなりの数の自治会が参加した。

（＊）日本共産党東大細胞委員会編集「東大細胞情報No.1 主張『一九五六年をむかえて』」

（註五）一九四八年春、国立大学授業料が当時の六百円から千八百円に、一躍三倍に値上げされたのに対し、当時の自治会は、国立学連に結集して不払い、スト、デモをもって闘い、さらに大学理事会法案が提出されるに及んで私学の国庫扶助要求の闘争と合流し「教育の植民地化」反対「学生生活擁護」を叫んで、六月二六日、歴史初の全国ゼネストを敢行して、立ち上った。このゼネによって、大学理事会法案は紛砕された。授業料値上げは遂に阻止できなかったが、国鉄運賃の五割の割引きなど現在までに主な学生の権利を獲得した。そしてなによりに特筆しなければならないことは、この国学連、私学連の統一した全国ゼネストの闘いの中から、学生戦線の統一がなり、全学連がその年の九月一八日に誕生するのである。

すなわち一九四八年の授業料闘争が全学連を生みだしたごとく、一九五六年の授業料闘争をして、全学連再建の火蓋たらしめよと、かれらは叫んだのである。このスローガンは完全に、実現したといえよう。

（註六）とくに、東大新聞は、一九五五年暮から学生運動の検討に紙面をさいてきたが、五六年の冒頭号は二頁全段抜きの大スローガン「新しい学生運動よおこれ！」とかかげ、以後数号紙面を全面的に学生運動の経済、思想の検討にさき、討議の積極的な展開のイニシャテイブを発揮した。

また、公開討論座談会を開催（二月四日）するなどして。

この中で、六全学連委員長、新井昭夫、同中執安東仁兵衛、宮田洋一郎、吉田嘉清らの五二年までの指導者たち、斎藤文治、田所泉、柴垣和夫、らの五二年以後の運動の相手、さらに当局東大細胞委員、全学連、自治会のメンバーらがあるいは一室に会し、あるいは紙上で、激しい討論を行い、貴重な教訓を与えていった。

しかしなによりも、運動の方向を与え対立した考えを明確にしたのは、一月十七日の関東、自治代及びその後の対策委、一月末共産党本部でひらかれた、全学連と自治会内のグループ、学校細胞代表を含め、中央より戒谷書記副部長出席のもとにひらかれた共産党グループ会議であったろう。ここで運動を進めるに際して後述する二つの方針がいとも明確な形で浮彫りにされ、しかも討議を通じて一つの方針の勝利の中に進んだのである。

（五）

まず第一に、かれらは、政治的ニヒリズムと斗争しなければならなかった。

政治的ニヒリズム――享楽的マージャン学生、観念論的懐疑的哲学学生などをとらえているそれではない。

学生運動、あるいは社会運動一般に常に存在するこのブルジョア・イデオロギー一般がここで問題になるのではなく、一九五五年末一九五六年にかけての特殊な時期に、既存の学生運動指導者たち、さらに一般に共産主義学生たち、「進歩的」マルクス主義者、多くの日共党員たちを襲い、わずか半年たらずのうちに全学連の危機にまで導くまでにかれらをとらえた政治的ニヒリズムである。

すでに、われわれは前号――一九五五年後半の記述において、かかる状況がいかに現出したかをたどった。

しかし日共六全協を機として始まった学校細胞の極端な動揺は、この後の日共全党の混乱の拡大と、日共派マルクス主義イデオローグのノイローゼ症状の進行によって、この期にも一層深刻なものになっていった。

それは、一方では、「ノイローゼ症状」が極端な痴呆的状況から脱出して、一定のイデオロギー的模索の状況に進むことによって、他方では、外部からきりはなされた内面での闘争から、ブルジョアジーとの避けることのできぬ闘いの中におかれることによって、より明確なイデオロギーの相克、新しい論争を導かずにはおかなかったのである。

混乱と動揺のなかで、永い間蓄積された日共の誤謬と歪められたマルクス主義の横行のために道を失った多くの共産主義学生は、「自分らを誤らせた日共への不信」に「人間性の回復」を叫ぶとともに、「喪失した主体性をとり戻すために」との合言葉のもとに、踏みしめてきた既成の道からの脱却の方向を、いわばアガキにも似た努力が求めていた。

かって戦後の革命的高揚が二・一ストの維持を境に急速に後退へ向う最中、日共の指導と公式マルクス主義への批判と再検討の声を内に蔵しつつ労働運動、学生運動の中に生じた動揺が、さまざまな形での「主体性論争」を流行病のようにまん延させた歴史を二度繰返すかのように、一九五五年暮から一九五六年初頭の学生新聞は、「主体性論争」を大きくクローズ・アップした。

後の社会主義学生同盟初代委員長中村光男の「歌と踊りの愚民政策」（註一）なる一文によって始まったこの「論争」（註二）は、多くの日共党員、自称マルクス主義者たちが、まだ問題の深刻さを自覚せず、日本革命運動を裏切り続けてきた日共路線、スターリン主義思想への真剣な批判と自己の思想の再検討に苦しむことなく素通りしようとしていた中にあって学生らしい鋭敏な問題意識と感覚をもって、日本革命思想史、マルクス主義史の大きな転境の核心にふ

れるものであり、その後の学生運動の革命的再建の上での貴重な土台さえ提供したともいえる。

しかし、この論争も、真の人間性、主体性喪失の悔悟につらぬかれながらも、その回復のための必須の、そして、もっとも肝要な問題が忘却されていたことのために、「歌り踊りの愚民政策」と日共の学生運動路線への痛烈な批判をこめた中村が、ただ「古典に帰れ」と叫ぶのみで学生たちの非政治的傾向の尻馬にのった結論しか導けなかったように、ふたたび一九四七年の論争の結末をたどるかのごとくであった。――もっとも肝要な問題――それは、「人間性の喪失」という逆転した結果を生んだ既存の「人間性回復のための思想」への全体系的なマルクス主義的批判の展開、この逆転した理論をもって解放運動を死に至らしめた組織――既成前衛党への仮借のない批判弾該、がこれであり、しかもこれを「自己目的化することなく」「一つの物質的力に至らしめるために」批判の武器を武器の批判に代らしめる努力である。

かかる軸を抜きにした「主体性論議」は、一方では、「日共への不信」をたもらしめた多くの共産主義学生をマルクス主義への――ひいては革命運動への不信へ誘い、ふたたび舞いもどったブルジョア的秩序の中での安居を、若干高尚めいた色彩をもった政治的ニヒリズムで飾る役割しか果さなかったのである。授業料闘争のなかで、闘わなければならなかった政治的ニヒリズムとは、このような性格をもってあらわれた。

したがって、この闘いは、単なる非政治的傾向、日和見的傾向、不活動分子への叱責によるハッパかけとしてのみ行われたのでなかった。それまでは、内面の「悩み」、紙上の論議、思想闘争上の一意見として存在した、この潮流は支配階級と闘いに直面したとき、否応なしに階級闘争に有害な役割を露呈せずにはいられなかった。

革命的学生は、種々の口実を設け、闘いをサボリ、否定する「共産主義学生」たちをもはや甘やかしはしなかった。

闘いは無慈悲に行われた。

しかし、この無慈悲さは、同時に、さらに両面にわたってむけられた。

一つには、いぜんとして、「主体性」を奪い去ったばかりか、過去の誤りをいぜんとして覆いかくし、下部からの激しい批判のまえに破廉恥極まる汚臭のボロを到る所にのぞかせながらもなおも、若干の方法をかえてもその権威を保存するために躍起となっている日本共産党中央幹部との闘争において、

二つには、なおも続けられる自己の理論、思想――既成マルクシズムに対する容赦のない追求とその主体的再建設の道において。この両面――内面の無慈悲な追求こそ、もっとも肝要な軸を忘れさって主体性論議にふけるものの思想へのかしゃくなさを保証するものであったのだ。

この授業料闘争時に行われたかかる闘いは、やがて、この主体性論争をして、アダ花に終らせないで、真の主体性確立の道、既成の腐敗しきった前衛政党にとってかわり、マルクス・レーニン主義の革命的再生と創造に燃えたった新しい前衛政党結成へ向かった三年後の「共産主義者同盟」の誕生の基礎となしたといってもよいだろう。

私は、いま三年の後にこの期の闘いをふりかえるとき、この政治的ニヒリズムの闘いとその克服の方向こそ授業料闘争のもたらした

最大の最重要の成果であったと躊躇なしにいうことができる。

共産党の誤れる理論と方針、その下での誤謬にみちた活動、その結果としての政治的ニヒリズム、これらの克服の道を、もっとも正しく歩むことができたのは、数多くのマルクス主義者、日本共産党員のいるなかでこの授業料闘争を闘った革命的学生のみであったといってもよい。

あるものは、いぜんとして誤りをも素直に認めようとしなかった。認めたとすればただそれは下部の圧力によってのみ(日共幹部たち)あるものは、誤りのすべての根源を自己の中に求め主体性確立を空虚に叫び階級闘争とも、その組織からも離脱することによって、ふたたび、ブルジョア秩序の中に舞い戻っていった。(多くの共産主義者、党員たち、なかんずく小ブル的活動家たち)

あるものは、日本革命運動の生んだこの痛々しいまでに貴重な敗北の教訓の重大さを見ることができず、理論は上から与えられるのみだと信じこみ、自分は素朴に実践活動を行っていれば足れるとする、多くの下部日共党員、経験主義的労働者党員たち。

あるものは、日共への不信を訴え、痛憤しながら、日共幹部の頑迷な態度に愛想をつかすとともに、同時にマルクス主義、あるいは前衛組織そのものへの不信に進むことによって、真のマルクス主義回復の道、階級的革命組織再建、創造の道を放棄してしまった。

またさらにあるものは、日共幹部の裏切り的誤謬に対して断乎とした党内闘争に立上ったが、この党内闘争は、過去の誤謬の責任の追求あるいは単なる理論的闘争としてのみ行われ、現実の階級闘争とはほとんど無縁に進められていった。(多くの日共内反対派、旧都委員会の多くのメンバー)

さらには、この授業料闘争の中で再建運動のイニシャテブをとったもののなかには、政治的ニヒリストへの狗喝ハッパかけをなすのみで、自己の理論の再検討をも、思想闘争をも抜きにして、傲慢にかまえた経験主義者の一形態も存在した。(註)

ほとんどすべての革命は前衛を名乗る潮流がかかる状況に未だいるときに、みずから過去の運動の総括と追求を、無思想なまでに行いながら、そこでものした教訓を、階級闘争と、前衛組織の再建闘争の現実の展開に自分の身をおくことによって試し、つき進み、さらに発展させるという真の革命的立場に立ちえたものは、まさにこの革命的学生を除いてはほとんどいなかったのである。

かかる闘いの中での政治的ニヒリズムの克服とそれによる革命的共産主義思想と組織の再建、と運動における指導権の確保こそ、まさに、一九五六年全学連の再建の秘密であり、さらに三年の後に、この革命的学生運動から、真の革命的マルクス主義による前衛組織結成を叫ぶ部分が大挙して生れた、遠因でもあったのだ。

また逆に、日共幹部への激しい不満と不信をもち、またそれと部分的に真向から対立する大きな部分が日共の反対派部分として生れながら、やがて、二年後には日共の官僚幹部のあくらつきわまりない政治的策謀の前に無残に破れるようなグループとしてしかなりえなかったのも、まさに、前述した革命的立場に立ちえなかったことに基本的には由来すると考えられる。

一九五六年一月―三月における闘いの不均等性は、かかる構えもった革命的部分が未だ東大、東大などのいくつかの学校にしか形

成されていず、またこれらの闘いの経験と教訓が全体にもたされなかったこと、――したがって正しい統一的指導が存在しなかったことを示す以外のなにものでもない。

（註一）中村光男は、東大教養学部新聞に「歌と踊りと愚民政策」なる一文を投稿、ときの学生運動を支配していた日共の方針――「うたごえ運動」と「フェスティバル」に代表されるいわゆるフェスティバリズムに示された路線を痛烈にヤユして、活動家は左翼によって、植民地的痴愚化されていると叫弾した。しかし、これに対する結論は、マルクスやヘーゲルなどの「古典に帰れ」と叫ぶのみであった。これは党の誤れる政策への消極的レジスタンスには違いなかったが、「学生党員は勉強していない」という教授たちの威嚇の前に屈し、当時六全協ノイローゼでボー然としている活動家に対して、掌をかえしたように与えられた日共の「学生は学園にかえれ」という方向と一致し、党員たちの非政治化的傾向を一層助長させるのにあずかった。

（註二）中村のこの一論は波紋をまきおこし、以後、東大新聞、教養学部新聞は、学生運動の方針の再検討とともに「主体性論争」をいくたびか特集した。

（註三）その典型を、わたくしは、この五六年の再建の一翼を担い、当時は東大らとともに日共幹部への党内闘争の先頭に立った教育大細胞の飯島郁＝津島薫に見出だす。

五〇―五二年には旧国際派に属し、六全協以後、党に復帰して、五〇年の教訓を摂取し、授業料闘争などでも右翼日和見との戦闘的闘いに一役を演じた彼は、みずからの理論の検討も深刻な思想闘争もなしえなかったために、一年後――日共中央青対部員になるや、今度は掌をかえしたように官僚主義の権化となり、同時に、後の反全学連分派、日共学生対策の尖兵となる。

東大細胞委員を中心としたグループは、かくて、授業料闘争にあらわれた政治的ニヒリズムとの闘いを実践的に敢行しつつ、この闘いの時期一月―三月の時期を、新しい党内闘争、理論闘争を精力的に展開することに過した。

六全協以後の日共内の混乱は、全党をふきまくり、激しい中央幹部への責任追求となって、進んでいった。歴史上始めてなされた「民主的討論」の場は、幹部――なかんずく――一九五〇年の党分裂、五二年以降の極左方針、総点検運動なる党内官僚主義の責任追求、糾弾の場となった。「国際派、所感派幹部の仲直り」「軍事方針、官僚主義」のお詫びと、ずぶずぶの追髄主義と右翼日和主義とでごまかそうとした幹部はいたるところで立往生した。

批判はなかんずく一貫して党主流を形成し、なかんずく、五〇年以降、反対派を暴力的に封殺し、機関を占拠し、党を極端な誤りに導き、暗黒状態にまで至らしめた野坂、志田、椎野、春日(正)、紺野らの党主流派（所感派）にむけられた。

一月、潜行時代の道徳的腐敗を追求された所感派の首領、志田重男はついに、「逃亡した」

前臨時中央指導部議長、椎野悦郎は同じく、「婦女子への暴行」の事実の暴露の前に失脚する。（註一）

…これらの光景は、あの暗黒にとじこめられ、硬直し、枯死しかった日本共産党の中から、新しい革命的息吹きが、下部党員大衆から、おこってくるかのごとくに見えた。

腐敗幹部を、放りだし、新しい革命的再生がこの党を訪れるかとも思えた。

自分の信じこんだ信仰の提灯持ちたることに甘じ、思考中断を行った日共マルクス主義者たちは、一度は、自分の犯した誤りに驚いて、腰をぬかしたが、やがて、「自由な立場」で物がいえる状態に気がついて、始めて活発な自己批判的な理論闘争と、論争がおこるかに見えた。

マルクス主義――歪められおしつぶされたスターリン主義一色に塗りつぶされたマルクス主義の再生の努力が始められるかにみえた。

五五年九月以来、おこなわれた地方協議会はかかる党内の中央幹部追求の場となったが、この党の混乱に、驚き、みずからの支配さえ危くなることに気がついた中央幹部たちは、さまざまの色合こそあれ、自分たちの支配の座を守るために、一致した。

始めは、所感派の狼狽ぶりを小気味よく眺め、この下部の追求の波にのって漸次主導力がころげこむのをみていた旧国際派の旗頭宮本顕治は、批判が、党中央の権威をゆるがしてくるのに慌てて、これを圧殺する側に廻った。

かくて、共産党内の分派は旧主流派対国際派の対立から、官僚主義と党内民主主義との対立へ進む。

党内民主主義――それは官僚主義に挑戦する激しいエネルギーを擁した下部党員の批判の一形式を与えるものではあったが、武器の批判になるものではなかった。

このエネルギーは、この官僚主義の根源たる理論は、思想的根底の認識に進むことなくしては革命的エネルギーに結実はしない。

党幹部は、この認識を妨げるために一致した。二月四日になって、実に6カ月ぶりに、いやいやながら出さざるをえなかった「党の統一と団結のための歴史上教訓として」なる中央委員会の決議さえ、なんら、この分裂に潜む真実と闘争の意義を明らかにせず、むしろ覆いかくすための、しかも各派閥の利害を考慮しての折衷主義的作文であった。（註二）

五六年二月ひらかれた、第一回東京都党協議会は、約半カ年の全党の論議を集約的に表現した会議という点で、また、新しい段階に入った、共産党内闘争の縮図を表現した点で、またその後の共産党の党内闘争の行方を定めた点で、注目に値いする会議であった。

なぜなら全党員の約三分の一を有する東京都こそ、常にそれまでの党主流派志田派の拠点として、党中央の方針の誤謬を集中して累積していたからである。

東大細胞委員らの学生実態の一グループは、いちはやく、この会議の召集を要求しつづけていたが、会議がひらかれるに至って、「一都協議案に対する意見」（註三）

東大C細胞委員会意見書「学生運動の方針についての意見」（註四）を提出、全出席メンバーに配布、冒頭から、中央への質問を開始し、六全協以前の党の誤謬を明らかにするとともに、六全協後もこの誤謬を糊塗しようとしている中央幹部を弾該する先頭に立った。

約6カ月の批判的検討と授業料闘争の実践的教訓をひつさげたかれらのこの活動は、中央に沸々としながら、なお方向をもたないままに混乱に混乱を重ねた会議において、一つの焦点となった。かれらは、中央批判に湧きたっている下部党員を必死になっておさえようとした宮本顕治らと果敢に応酬し、その折衷主義的態度と闘った。中央らの頑迷な態度となすところをしらぬ都党員の無能さのために混乱のままに終始したこの一都協は、日共始まって以来の無記名投票による役員選挙を行ったが、この結果、旧都委員の多くは落選し、増田格之助、片山さとし、芝寛ら、後に、都委員会派としてしられる多くの反中央派幹部が選出され、また、これらとともに約五年ぶりに復帰した元全学連委員長武井昭夫が東大細胞の推選によって立ち、当選した。以後、武井は、都委員会青年学生対策部を担当、この新都委員会のもとに、三月初め、東京都学生細胞代表者会議が召集され以後、定期化される。このことによって、東大細胞らの経験は、約半カ年おくれて急速に、全都学生細胞のものとなり、授業料闘争の時の不均等性は克服の方向をたどり、この学生の日共組織の立直りのもとに、四・五月闘争、砂川闘争へと続く、全学連の闘争の要となった東京の学生運動再建の基礎がつくられていったのだ。(註五)

このように、共産党内における闘いは激しい思想的、理論的闘争として行われたが、それは単に、思想、理論の闘いとして行われたのではなかった。

革命党建設の道は、決して理論闘争によってのみつくられるのではない。それは同時に組織的闘いとして展開されねばならない。理論と実践を媒介する組織における闘いを抜きにした理論闘争は結局のところお喋りに終るだろう。

かくて五六年一月三月の時期は、授業料闘争を経て共産党内闘争においても新しい局面をひらいたのである。

かかる党内における組織的闘争まで進んだ闘いによって、政治的ニヒリズムとの無気味な対決はその勝利の一歩を刻んだ。

(註一) しかし、これらの事実は全党員、全人民にひた隠しにかくされた。下部党員の追求にあって、党中央がこれらの事実と処分を発表したのは実にこれから九—十一ヵ月のちの一九五六年の九月、および十一月になってからであった。

(註二) 日共の五〇年分裂は、数少い日共の思想闘争の最大のものであり、誤れる党の方針に対して行われた戦後革命運動の貴重な闘争であった。六全協以後の党内闘争の焦点がこれに向けられたのも当然であった。日本労働者階級が汲むべきさまざまの貴重な教訓がこの闘争の中に含まれていた。

しかし、六全協後六カ月の下部党員の要求の結果だされたこの「四中委決議」は、教訓どころか、事実さえも覆いかくした悪どいものであった。

旧所感派の野坂らは、事実をひた隠しにかくした。

旧国際派宮本らは、「歴史的教訓」だから、事実を明らかにするのは時間がかかる。「せっかちにやっては党を破壊する」とこれに妥協し、この闘争の教訓の現在的意義を見抜かず、教訓をもっぱら党の組織的分裂にのみおき、「党の統一」なるお題目をひきだすのがせい一ぱいであった。

かくて、両派の一致したことは「党の分裂をくりかえしてはならない」というお説教であったのだ。

このようなため、五〇年分裂の教訓は、ながらく下部党員には、経験者以外には知らされず、ようやくにして、当時の文献が発行されたのは、党内闘争のエネルギーの冷却した、二年後であったのだ。しかもこの文献(青木文庫、日共綱領問題文献集三冊)を党中央に抗して発行した野田弥三郎らはまたまたその責任を問われるのである。

(註三) この意見書は一都協東大細胞代議員 柏木正夫(=柴垣和夫=後の文京地区委員) 大分三郎(=島成郎) 上田英一(=森田実) 三名の連名によって提出された。

意見書は、

「一、『党協議会をひらくにあたって』及び全般的問題について。

二、党分裂の政治責任の所在について。

三、新綱領の問題点

四、戦術上の誤りについて、

—右翼日和見主義思想と極左冒険主義戦術、とくにその連関について。

五、総点検運動について。

六、おわりに。

という項目からなる、過去の党活動の全般的総括と、六全協以後の活動についての批判からなっているが、

かれらは、この中で

「今なお、党中央が五〇年以後の党分裂の政治責任を明確にしえず、またそれ以後の党活動の各分野での系統的、具体的総括も行いえないでいるために、一方では、大衆闘争の指導を事実上放棄し…他方では、全党に展開されていった六全協決議の討議の指導と援助を放棄、あるいは誤った指導を行ったこと、そしてこの誤りが、単に六全協以後だけでなく、それ以前からの一貫していたものである」と、鋭く指摘。

「本協議会開催は緊急の課題として、これらを自己批判し、本協議会が、来るべき第七回大会への一過程として位置ずけねばならない」と主張している。

そして、戦後の党活動の全般にわたって、その根底にある右翼日和見主義を暴露し、これを指導した所感派分派を徹底的に糾弾した上、当時まだ「まったく正しかった」とされていた「新綱領—五一年綱領」にまで追求のメスを鋭くいれている。

「新綱領にまでさかのぼった党中央の方針の批判」はかくて本意見書により、はじめて正式の党機関で討議されるに至ったのである。

(註四) 東大C細胞意見書は、代議員、生田浩二(=加藤明男)によって提出された。意見書は「戦後の日本学生運動ほど党の誤れる政策を一つ一つうけ、損害を蒙ったものはない」と前置きして五〇年分裂の学生運動における意義、一貫していた右翼日和見主義を指適と、極左冒険主義はその裏返しにすぎないこと、また経済主義と大衆追随主義、そして官僚主義のために五二年以降、いかに学生運動が困難な局面に陥ったかを明らかにした上、さらに「六全協以後の中央の指導は、この誤りを更に拡大再生産し、支持細胞を混乱に導き、学生戦線を解体の危機においやった」と迫るとともに、東大細胞らがいかにこの困難から脱出したかをのべて、授業料闘争の教訓を、実例にだして

学生運動の明確な方針をうちだせ、と主張している。

（註五）その後、東京の各地区党会議が続々とひらかれるが、三月の東大、お茶大、教育大などを有する文京区党会議（協議会）は東大細胞のほとんど完全な主導権の下に行われ、新地区委員には東大細胞の森田、柴垣らが入り以後学生指導に当り、また地区常任には元全学連の安東仁兵衛が返り咲いた。

新都委員会は、以後都学細代を定期的に行うが、常時的機関として学生委員会を全学連、都学連グループ、反戦学同、文京、目黒、新宿、東大、早大各細胞などの講成で組織する。

六

それでは、この政治的ニヒリズムの克服の過程において闘った過去一貫していた党の日和見主義は、この闘争の中でいかにあらわれたか。

それはもちろん日共の基本方針――五一年綱領にもとずく革命路線に由来したが、ここでは、さらにその根底にある理論、方針上のというにはあまりにも根本的な思想上の日和見主義をあげねばならない。

すなわち、第一に、極端な大衆追随主義、第二は、経済主義的思想にもとずいた右翼日和見主義とセクト主義であり、ともに、日共の戦後の全活動をつらぬいたものである。

授業料闘争は、これらの日和見主義をうちくだいていった闘争であった。

その典型的代表は当時の全学連中央に見出される。

かれらは「値上げには反対」したが、運動は「皆の一致した点のみで行う」というのみで、「闘いが下でおこっていない」と傲慢にうそぶいた。

かれらは、対策会議は召集した。署名の集計は行った。

しかし、いかにこの闘いを成功させるかという観点に立って、学生のエネルギーを全国的に結集し、いかなる方向に発展させ、いかなる形態で闘うかという全国指導部としての当然の任務を怠った。

二月二日の全都のデモでさえ、東大、東大らの学生の計画と、強力な主張なしには計画されなかったのだ。

冒頭にのべたこの闘争の半ば自然発生的な性格は、決して自然発生的にもたらされたのではなかった。一つ上は当時の学校細胞の混乱にあるとはいえ、主要なことは、全学連中央の追随主義、自然成長性の指導によってもたらされたといえる。

もちろん、この傾向は、全学連中央にのみ存在したのではない。ふたたび共産党である。戦後のこの党を毒しつづけた大衆追随主義は、五〜五二年の極左冒険主義の失敗以後、漸次全面的に全党を覆っていくが、とくに六全協後の自信喪失のなかで極端に漫画化された形にまで拡大され、骨の髄まで滲みこんでしまっていた。

学生運動の基本方針は「歌と踊りの統一行動」で塗りつぶされ、自治会の活動は、山下肇によって「片手間の仕事」とヤユされた世話役活動におしこまれてしまった。

もっとも重大な政治行動は、つねに「ウキ上る」とか「ハネ上り」とかいう彼ら自身の製造語によって見送られ、「力に応じた活動」というデデくさい思想で、青年の情熱と称讃すべき英雄主義は、はきだめに捨てられた。

自治会室に、学生のホコロビを繕うための針と糸とが備えつけら

れたというエピソードは、この時代の産物であった。

前衛党の活動は、インギン無礼に教室にいって「皆さんの要求はなにか」ときまわる御用聞きの仕事にとってかはられた。

このような極端な大衆追随主義は、すでに前掲した村尾君の文章が痛烈に批判しているように、裏をかえせば、「俺たちはわかっているが、下部大衆がついてこないのだ」というあの思い上ったエリート意識、大衆を小バカにしたダラ幹の腐敗思想そのものなのである。「主体条件は悪い。だからこそ、われわれは起たねばならないのだ」こう叫んで巨大な大衆運動を展開した東大駒場の闘いは、この腐敗しきった共産党―既成学生運動幹部の思想をぶち破るのに十分であった。

そしてかれらは、長い間の沈滞の淵にあった共産党の学生運動指導方針にみられる大衆追随主義の考えを克服し、次の闘争への貴重な礎をきずいたのであった。

第二に、これまた共産党をとらえつづけ、戦後の革命運動の敗北の歴史ときってもきれない関係にある経済主義的思想にみちびかれた誤謬と闘わなければならなかった。授業料闘争――それ自体は学生の経済的要求の闘いにみえるこの闘いにおいてこの思想はいかにあらわれたか。

闘いがおこり始めたとき、おくればせに「主張」を掲げた「アカハタ」は、その中で、授業料値上げによる学生の経済生活の破壊を約九十％の部分を費してのべていった。（註一）この主張に代表される部分は主張した。「値上げをすれば学生生活が苦しくなる。破壊される。学生生活を守るために闘おう」、そしてまたいった。「学生の

この闘いに政治的スローガンを掲げて巾をせまくしてはいけない、授業料値上げ一本のスローガンでいこう」しかし、闘いの進展は、かれらが誤っていることを明らかにした。二重の意味で！

五〇年前レーニンが「エコノミズム」として断罪し、ボリシェヴィキ創立のために、一冊の本まで刊行して闘わなければならなかった日和見主義――経済主義は、現代の日本共産党に、そのままいきていた。

労働者階級の闘いを害しつづけたこの経済主義は、学生運動の中にもちこまれるとき若干の変形をうけて、二重の誤りの形態を見だす。

一つには、かれらの経済主義的思考方法は学生運動そのものを科学的にとらえることができなかった。

かれらは学生の経済的要求を守る闘いを、労働者の経済闘争と経験主義的にとらえることしかできなかった。

労働者の経済闘争は、対資本家との闘争の主要な柱をなすものであろう。

しかし、学生の経済闘争は、そのままでは学生社会運動の重要な柱をなすものではない。むしろ、その内容は、学生――若いインテリゲンチャの集団の性格を反映して、政治闘争とイデオロギー闘争に主要なものを見出す。

経済闘争も一つの内容をもちろんなす。しかし、その場合とて、この要求は、学生の中では一つの媒介――イデオロギーの媒介を経てはじめて自覚された要求となり、学生の広汎なエネルギーを結集する。

授業料値上げはこのことを端的に物語る。現在の支配階級は、値上げを一度に、全学生から行うなど決してしない。かならず分割して新入学生、初年度から行う。

だから、運動に立上った学生は直接「生活が苦しくなるから」立上るのではない。

授業料値上げ反対に立ち上った学生たちは、この値上げが不合理であり、政府の反動的な政策、文教政策の一つのあらわれであると考えるから、反対したのであり、さらにこの闘いを通じてなんとかして、反動的政府への意志表示をなしたいという意志に駆られて、運動を展開するのである。

この現実を見ることのできない自称マルクス主義者たちの思想は、どこからきて、なにをもたらすか？

それは、学生の？　一般的にはインテリゲンチャの、さらにはイデオロギーの役割、政治的、理論的闘争の役割を理解できない経済主義的思想に由来する。

自然成長性に屈服するかれらは、レーニンが五〇年前批判したエコノミストたちの諸属性をのこらず備えている。

かれらは、労働者の自然発生的闘いにのみ革命的意識の成長の根拠を見出す。かれらは革命的理論の独自の役割を否定する、独自の政治闘争の組織を過少評価する。理論が、歴史的にはブルジョア・インテリゲンチャによって創られ、もたらされたという事実を否定する。素朴な労働者崇拝主義にとらわれる。かれらの根拠は「物質的下部構造が上部構造を決定する」という素朴な反映論、革命的政党の主体的活動を抜きにした、イデオロギーの役割を見ない客観主義である。

かくて、かれらの学生運動論もまたその「下部構造」によって導かれる。学生の出身階層と経済状態によって、科学的な粉飾がたされる。その経済的要求によってエネルギーが算出される。

インテリゲンチャとしての学生の性格の一面は、否定的に、すなわち、「頭だけの、根のない」性格としてとらえられる。

かくて、経済主義的思考方針に導かれたかれらの学生運動の方針は、前述した大衆追随主義とからみあって、一方では、学生の政治闘争の大きな役割を否定し、「日常要求論」をこれに対置する右翼日和見主義としてあらわれ、他方では、学生を大きく一つの階層として独自に結集することを忘れ、これを小ブルの運動として蔑視するセクト主義をもたらす。

戦後、日本共産党の学生運動方針をつらぬき通してきたものは、まさに、この経済主義的思想に基いた右翼日和見主義と経済主義であったのだ。

あるときには、あの五〇年のレッド・パージ闘争の最中に、草刈アルバイト闘争を対置し、あるときには、極左戦術にもとずいてつくられた学園解放綱領なるもので、貧困・アルバイト学生の運動におけるヘゲモニーの必要性を説き（五二年）、また、あるときには、学生の経済的要求をすべてならびたてた学園復興会議なるカンパニアをもって、学生運動の昂揚を叫んだ。その極端な右翼的カリカチュアが五四年「五五年のフェスティバル「歌と踊り」に結実したことはすでにのべた。

授業料闘争――六全協後約半年をすぎて闘われた「新しい学生運動」の中に、性懲りもなく姿をあらわした共産党のこの日和見主義

は、戦後の革命運動の経過とその役割――なかんずく、この思想と闘った五〇年にいたる学生運動における論争の教訓をものした学生たちの実践と理論における闘いによって、完膚なきまでに敗れ去りその根抵の思想が批判されたのである。

学生たちは、闘いの過程で「授業料反対のスローガン一本」ではなく「反動文教政策反対」を掲げ、この闘争を通じて、値上げの背後にあるブルジョアジーの意図、小選挙区、教育三法の提出となってあらわれている政治的圧迫の状況をはっきり見てとったのだ。当初、「弟や、妹のために」と叫んだアピールは、運動の過程の中で、政府の文教政策、予算、反動政策を全面的に暴露する宣伝文書となり、次の闘いの大衆的準備がなされて、いくのだった。

そして、かれらは、学生運動を成功させるためには常に学生をとりまく政治情勢に目をむけ分析し、支配階級の動向に注目して、運動の発展方向を定めなければならないという教訓を身につけたのだった。

経済主義的思想の誤謬は、これに止まらない。「前衛党」は、学生運動論の基本において間違い、その戦術において日和見主義をとったばかりでなく、もっとも本来的任務――前衛党としての任務――学生運動に革命的理論を注入しさまざまの小ブル的理論と闘い労働者階級解放の道に学生を組織していくことを忘れさってしまった。

特殊的には、この授業料闘争にしめされた学生のエネルギーを、政治闘争に発展させつつ労働者階級の闘いの同盟軍としてかつ、当時の総評指導部の社民の日和見主義のもとにある労働者の闘いを有利に導くように学生運動を有効に指導する方針をまったく欠いていた。

したがって第廿四国会の冒頭の時期に、労働者階級の経済闘争が春季闘争として闘われながら、政府の反動的政治攻勢の激化にあっても、総評幹部によってなんらの独自の闘争がくまれていないときに、授業料闘争に立上り、国家予算に肉迫し政府に迫った学生のエネルギーを、その指導権を確立している全学連の闘いを意識的に労働者階級の闘いと結合させる指導も方針も、共産党によっては、全学連中央によっては、なんらうちだされなかったのだ。

この期の学生運動が、そのエネルギーの存在にもかかわらず、労働運動と隔絶したままで終り、闘争が全体として小ブル的運動にとどまったという性格は、この指導部のかかる考えによるものであったのだ。

しかし、革命的学生たちは、この闘いを通して、日和見主義との闘争の経験を通して、学生運動を全人民的闘いの一環ならしめよ。その政治的先駆性を発揮せしめよ、との合言葉を物にし始め、次の小選挙区闘争に備える態勢をつくったのだ。

そして、もはや前衛党をまた全学連中央を、日和見主義の支配のままに委ね続けることはできないことを確認して、一方では全学連中央の再建と、他方では前衛党の再建のために日和見主義追放の組織的闘いの方向を見出したのである。

（七）

このようにして、例年より厳しい大雪をふらせた一九五六年の冬が去り、やがて、三月の春が近づいたとき、学生たちは、雪をふみしけ進んだデモの後の爽やかな気分と、新しいなにものもまた歩ん

だことのない未知の理想への憧憬と、そしてその未知の道を担うものは俺たちなのだという確信とにあふれて、登山者の前夜の会合にも似た気分で、学生運動の、いや日本革命運動の再建のプランを練っていた。

三月も始め、まだうすら寒い日、日ざしを求めて一座に会合した、東大細胞委員たちは、「いままでは過去の人々に学んだ。五〇年の全学連の先輩たちの助けをかりた。しかし、今年は、もろに俺たちの番だ」と誓いあい、全学連、都学連、反戦学同、そして日共の再建のために一大飛躍をすることを決めた。

細胞委員たちは、全学連へ、都学連へ、そして反戦学同へ、日共地区委員へ、それぞれ身を賭して派遣され再建の全国化を計ることを決定した。

また新都委員会のもとにひらかれた都学校細胞代表者会議がひらかれた。東大、東大C細胞によって提出された授業料闘争の総括と今後の方針は、早大、教育大細胞などによって支持され、始めて結果のみを知ってうろたえる多くの学校細胞との間の論争を経ながらも、全体で承認された。

同じ日、三月九、十日東大自治会室でひらかれた全学連中執会議は、もう一月の会議の繰返しはでなかった。

東大細胞からすでに全学連書記局にうつって活動を開始していた代表らは、大胆な、そして新鮮な形で、学生運動の再建の方向を提示していた。

東京での東大らの経験は、関西での帝大での闘いと奇しくも一致した。

同じように、五六年暮からの時期を私立大授業料闘争にとりくむとともに、前国際派の生きのこりの先輩たちにたすけられて歩んでまた関西の立命大と、東京の東大とのこの会議での握手は、学生運動の再建が、東西の拠点都市から始まり、それが直繋したことによって、太い支の綱がはられ準備されたことを物語ったのである。

かくて、全学連中央よりの立直りの橋頭堡はつくられた。

三月も末、二十七、八、九と、長期にわたる要求の末、ついに党中央によって開催された全国学校細胞代表者会議は、この期の学生運動の――再建の手がかりから全国化へと進む一つの画期をなすものであった。

――それは、「戦後学生運動の総括、と学生運動の基本方針」を討論し、「党中央の方針立案参考に資するために」ひらかれたものであったが、三年後の「アカハタ」が偽瞞をもって語るような（註二）組織上の指導の相異にのみ対立があったような（その他は存在しなかった）ものではなく、まさに、六全協以後の党内闘争の――すなわち「いかに過去の教訓を学ぶか」について相対立する二つの意見の真向からの衝突の集約場であったのだ。

春日正一ら党中央春闘対策部らの提出した（青対部員　平岡、石田両氏の執筆による）この会議の「討論資料」は、綿々と戦後学生運動史を列挙した掌で重味を感ずる程の尨大なものではあったが、それからの教訓としてあげられた「学生党員の活動上のいくつかの問題」と題する章は、㈠学生党員は勉強しなければならぬ――アカデミズムに対する態度、㈡教授に対する態度、などなど　誤りを活動上のスタイルと工作態度に帰着させつつ、しかも極端な右翼日和

見とブルジョア・イデオロギーへの屈服以外のなにものでもない作文でしめられていた。

ここからでてくる「基本方針」なる分析の視点は、そもそも学生とはなにかという社会学的規定から始まり、「学問」(?)スポーツ、経済などの「もろもろ」の事象を列挙することによって科学的装いをつけたものに過ぎず、したがって結論は、学生の巾広い要求をとりあげて組織するという批判済みの経済主義、追随主義路線以外のなにものでもなく、なんら現実の運動の指針となるものではなかった。

さらに犯罪的なことには、その組織論において、全学連と、外の学生組織との統一行動なることを強調し、唯一の統一的全国組織である全学連を日本学生運動の組織的結集点とせず、なんら下部に基礎をもたない反動的学生組織との統一をとき、学生戦線の分裂の場を提供する方針さえ含んでいた。

これらの総括と方針は、学校細胞代表、全学連中央、都学対部らの総反撃をくい、会議は、この草案を全面的に否決し、会議の結論にもとずいて中央みずからが、根本的に改めた草案をだし全党に配布することを決定し、党中央またこれを約して終了したのだった。

――今日に至るも党中央のこの約束――会議の決定は実行されていない。――

この三月の全国学細代は、一方では学生戦線内の日共党組織内における学生運動再建のイデオロギー的基礎が全国的にうちかためられる最初の機会であり、同時に他方、学生党組織と党中央との全国的規模での党内闘争の開始を告げる合図となるものであった。

――この会議を最後に、三月は終了する。

離れるべきものは離れた。しかし多くの自覚的分子は、政治的ニヒリズムを脱却し、まさに闘いの主要な鼓舞者として立ちあらわれた。戦闘性は復活された。疲れはたて既成の職業的活動家に代って、生き生きとした水々しい人々がこの闘争の中で続々と生れる。

夕暮の灰色は、暁の朝焼け、紅金色にとってかえられた。

それはまだ全国を照らしつくしはしないが、やがて中空にかかり一点の曇りもない青天をもたらすであろう昇りつつある旭日の色にちがいなかったのだ。

歴史はさらに一頁をめくらねばならぬ。そこには四月の暦がひらかれる。（第一部第四章終り）

（註一）一九五六年一月十九日付アカハタ主張「国立大学の授業料値上げに反対する」

（註二）三年後、全学連のトロッキスト狩りに熱中するアカハタは、五六年の学生運動再建の歴史をねじまげて、この会議について次のようにいっている。

「五六年一月から二月にかけて学生運動の基本方針の草案をつくり、三月までに二回にわたって全国細胞代表者会議をひらいて意思の統一をはかる努力をした。だがこの草案については意志の一致がみられなかった。

それは草案の内容の討議において不一致があったのではなく、細胞活動を中心にして学生運動を多面的に発展させようという草案の立場と、全学連グループ指導を中心にして　学生運動を指導しようとする立場との対立であった。そして後者の立場をとる同志諸君は、六・一事件の場合とおなじように自説を固執して中央の議題を審議することを拒んだのである。こうして草案は審議されないままに保留となり、四月からはじまる小選挙区制と教育二法案に反対する闘争にとりくみ、その実践のなかで意思の統一をはかることになったのである。これによって学生運動は急速な立直りと発展をしめした」（「学生運動における党活動の問題点」アカハタ一九五八・十二・二十九日附）

理論戦線

ランベオリ社会主義学生同盟理論機関誌
行発価80円定季刊

バックナンバーのごあんない

第1号……うりきれ

第2号……残部わずか

偉大な闘争と奇妙な勝利　森　茂
警職法闘争はいかに闘われたか—

学生運動の転機とはなにか？
学生運動と社会主義—　熊谷信雄

激動・革命・共産主義Ⅰ　姫岡玲治

第3号……臨時増頁特価一〇〇円

安保改定反対闘争と学生運動
大瀬振

学生運動——それはなにか？
新たに学生運動に参加する同志へ—
岸本　健一

理論学習のために
「ドイツ・イデオロギー」と
マルクシズムの生誕
戸坂出

激動・革命・共産主義Ⅱ
姫岡　玲治

戦後学生運動史ノートⅠ
—五五年～五六年—
熊谷　信雄

社　告

これまで、地方発送、郵便による講読お申しこみはすべて送料は当社が負担してまいりましたが、地方発送も飛躍的に増加していますので、出版商取引慣行どおり、今後は送料はみなさまにご負担いただくことになりました。

なお、割引率は、これまでの八〇円定価を六〇円に（十冊以上）を、あらためて、すべて百分比によります。さらに十冊以下の割引はいたしません。割引は、口座開設分ならびに現金予約にかぎります。

したがって
一〇〇円　定価八〇円に割引
八〇円　定価六四円に割引
ただし十冊以上お買上げ、となります。

一九五九年十二月　リベラシオン社

理論戦線　第四号

発行日　一九五九年十二月一日（年四回　発行）
編集　社会主義学生同盟全国執行委員会
発行所　リベラシオン社
練馬区豊玉北五の八の一
振替東京三七〇九九
印刷所　ミイレー印刷株式会社
定価　八〇円　年（四回）三〇〇円　送料　八円

共産主義

共産主義者同盟機関誌

リベラシオン社 発行 月刊 価円 編定100

第五号

共産主義者同盟綱領第三次草案

『民主統一戦線』のゆくえ　鈴木　森

現代における革命と労働組合 II　清川　徹

発売中！

第六号予告（十二月中旬発売）

同盟創立一年の活動と当面の方針

「財閥」と国家
—日本における国家独占資本主義—　姫岡　玲治

われわれの「何をなすべきか？」
—労働運動の当面する課題—　森　茂

西イリアン解放闘争と
インドネシア共産党（下）　岡田　行男

教育労働者

全日本青年教師集団編集

定価八〇円　隔月刊

第一号

都教組の一年間の闘いをかえりみる　山坂　虹内

神奈川勤評闘争記　山川　潔

第二号

日教組定期大会方針案への疑問　山田　洋二

五八年度民研レポート「教育を国民のものに！」　山本　寅郎

第三号

都教組左翼の問題点　山田　洋二

中野九中闘争始末記　Q・P

教育の「正常化」と「国民教育」論（上）　斉藤　徳太

第四号

特集　九月闘争から学ぶもの

福岡教組・北海道教組・都教組・都教組港支部

教育の「正常化」と「国民教育」論（下）　斉藤　徳太